
魔法少女リリカルなのはStrikerS～No. Zero～

Theater

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikersノZero

【Nコード】

N4333W

【作者名】

Theater

【あらすじ】

機動六課に異動してきた1人の魔導師。強くて優しくて面倒見の良い青年。だが、どこか人と距離を置こうとする。そんな、青年と彼女たちの物語。

プロローグ（前書き）

これから、始まる物語に彼は、何を想う。

プロローグ

「刻印NO. 9. 護送体制に入りました。」

「ふん。」

薄暗い部屋の中、1人の男が空間モニターで、機動六課の活躍を別のモニターに映っている女性と話しながら見ていた。

「追撃戦力を送りますか？」

「止めておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ。それにしても、この案件はやはり、すばらしい。君のそう思うだろ？」

「そうですね。」

男の後ろには、1人の青年がいた。青年は、男の問いに無表情で答えた。

「私の研究にとって、興味深い素材がそろっているうえに・・・フッ！」

モニターに、フェイトとエリオの2人が、映ると男は不敵に笑っ

た。

「この子たち、生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスがあるのだから。」

「・・・では、ドクター。私は、そろそろ任務に就きます。」

「そうだな、では、よろしく頼むぞゼロ。フフフツはははははははははは！」

プロローグ（後書き）

どうも、初めましての方も、ご存じの方もTheaterです。

何か、思いついたので勢いだけで始まりました。

こちらの作品もお願いします。

第1話 疑惑の魔導師（前書き）

異動してきた魔導師にはやては、疑念を抱く。

果たして、彼は敵か味方か。

第1話 疑惑の魔導師

「うゝん・・・」

「どうしたんですか？はやてちゃん？」

機動六課部隊長八神はやて。彼女は、今ものすごく悩んでいた。そして、その姿を見てはやてのユニゾンデバイス“リインフォース？”が不思議そうに聞いてきた。

「うん・・・ちよつとこれがな・・・」

はやては、リインに悩みの種である物を見せた。それは、どうやら何かの資料のようだった。

「これは・・・新しく異動してくる人の資料ですか？」

「そうなんよ。ちよつとここのところ見てくれるか？」

「えっと・・・えええええ！これって！」

はやての指さすところを見たリインは、声を上げて驚いた。

「はやてちゃん！これは？」

「うん。この人、レジアス中将の推薦なんよ。」

これが、はやての悩み事だった。機動六課、主にはやてを嫌っているレジアスの推薦。そこから異動してくる人物となれば、いろいろ考えてしまう。

「スパイ・・・なんかな？」

その疑念は、どうしても捨てきれなかった。無論、あなたはスパイですか？なんて聞けるわけがない。しかも、もし違っていたら相手に失礼だ。なので、はやては頭を悩ませた。

「ゼロ・レスティア一等陸尉か・・・」

「その人、いつ来るんですか？」

「今日や。」

「今日ですか！？」

はやてが、頭を悩ませている頃、機動六課の隊舎外に1人の青年が立っていた。

「ここが、機動六課・・・」

< マスター、時間に多少遅れてします。急いだが、よろしいかと・・・ >

どこからか、女性の声が聞こえてきた。その正体は、彼が胸元に下げているひし形でクリスタルタイプのインテリジェントデバイス“ステラ”だった。

「そうだな。急ぐか・・・」

青年は、隊舎内に入った。しかし、すぐに問題が起こった。

「部隊長室ってどこにあるんだ？」

青年は、迷子になっていた。隊舎の中に入り、歩いていたら部隊長室の場所を知らない事に気づき、誰かに聞こうかと思ったが、運悪く誰もそばにいなかった。

「困った・・・早くいかなきゃならないのに・・・」

「あのくどうしました？」

「ん？」

突然、声を掛けられた青年は、声のした方を見た。すると、そこには髪をサイドポニーにした女性がいた。

「えっと・・・部隊長室に行きたいんですが、迷ってしまっ・・・」

「そうなんですか？えっと・・・用件は？」

「本日付けで、機動六課に異動になりましたゼロ・レスティア一等陸尉であります。」

ゼロは、敬礼をし女性に名乗った。

「高町なのは一等空尉です。では、部隊長室に案内しますね。こちらです。」

ゼロは、なのはに案内され、部隊長室に向かった。

「遅い・・・着任時間もう2時間も過ぎてる・・・」

「はやて・・・とりあえず落ち着いて。」

着任時間になっても現れないゼロにはやては、イライラしていた。そして、はやてに呼ばれ部隊長室にいたフェイトが、それを宥めていた。

「2時間やで！2時間！遅刻にもほどがあるやろ！」

「ほら、何かあったのかもしれないし・・・」

「それにしたって連絡くらいするのが、普通やろ！」

はやての怒りが爆発しそうになる直前、部隊長室のドアが開いた。

「はやてちゃん。今日付けで異動してきた人を連れてきたよ。」

それを聞いたフェイトは、やっとこの状態から解放されたと安堵した。

「本日付けで、機動六課に異動してきましたゼロ・レスティア一等陸尉であります。」

ゼロは、はやての前に立ち敬礼をしながら名前と階級を言った。

「それで、何でこんなに遅れたんや？」

こめかみをピクピクさせながら、はやてはゼロに聞いた。それを見たゼロは、内心焦りながら答える。

「すみません。ここに来るまでに迷ってしまって・・・」

「ほう・・・そうか。それは、大変やったな。」

「はい・・・それはもう・・・」

「「ははははっ」」

はやてとゼロは、お互いに笑った。しかし、はやての目はまったく笑っていないかった。

「ふざけんなやー！何が、迷ってましたや！そんな言い訳が通じると思うのか！？」

「はやてちゃん、落ち着いて。」

「はやて、ダメだよ。」

ゼロに掴みかかろうとするのをなのはとフェイトが止めた。それから、しばらくしてはやてが落ち着きを取り戻した。

「はあはあはあ・・・まあええわ。それより、君に聞きたい事がある。」

「スパイなのか？と言う事ですか？」

「なっ！なんで!？」

はやては、言いたいことを先に言われ驚いた。そして、どうしてそれと言う顔をしていた。

「私が、レジアス中将の推薦で来たと分かれば、まず一番に疑うところですからね。」

「それで、どうなんや？」

「違いますよ。当然のことながら。」

「嘘やないな？」

「はい。私は、レジアス中将のスパイではありません。」

「わかったわ。信用する。」

ゼロの言い切った顔を見てはやては、ゼロを信用することにした。

「それじゃあ、ゼロ君。これから、よろしく頼むな。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

はやてとゼロは、和解の意味を込めて握手をした。

第1話 疑惑の魔導師（後書き）

はい！第1話でした。

何かいきなり、思いついて書いてしまいました。プロローグを見ればわかるように

今回は、スカさんサイドの主人公です。

敵側と言うことで、まだどうなるかわかりませんが、とにかくがんばります。

では次回、第2話で会いましょう。

第2話 実力（前書き）

実力を示すため模擬戦をすることに

果たして相手は・・・

第2話 実力

はやてからの疑いがなくなり、ゼロは一安心していた。それから、はやてに機動六課での担当の説明を受けていた。

「それじゃあ、ゼロ君はフェイトちゃんと同じライトニング分隊に入ってもらおうで。」

「わかりました。それでは、よろしくお願いします、ハラオウン隊長。」

「そんな堅苦しい呼び方じゃなくて、フェイトで良いよ。」

フェイトは、ゼロにハラオウンではなく、フェイトと碎けた感じがいいと言ってきた。

「ですが・・・」

「そうだよ。私もなのはでいいよ。」

「私も、はやてでええで。それに、ゼロ君の方が年上やし、敬語もなしでな。」

なのはとはやても呼び捨てで良いし、敬語もなしと言ってきた。ゼロは、そう言われ困った。何とかそれだけはと断ろうとしたが、

押し切られてしまい結局3人の言うとおりに敬語なしの呼び捨てにすることになった。

「わかった。それじゃあ、よろしくなのは、フェイト、はやて。」

「「うん。」」

それから、はやてとは一端別れ今度は、フォワードの4人とそろになのはとフェイトに連れられゼロは向かっていた。

「ヴィータちゃん！」

「おっなのは。終わったのか？」

「うん。それでねこっちが、新しく来たゼロ君だよ。」

「初めまして、ゼロ・レスティア一等陸尉です。」

「おう！ヴィータ三等空尉だ。」

ゼロは、エターナルロリータこと、ヴィータにあいさつする。

「おい！今なんか失礼なことを考えなかったか？」

「いいえ、別に・・・」

ゼロは、目をそらしながら否定をする。だが、ヴィータの疑いの眼差しは続いていた。それから、訓練が一時休止にして、ゼロの紹介のためにフォワードの4人を集めた。

「本日付けで機動六課に異動してきました、ゼロ・レスティア一等陸尉です。よろしくお願いします。」

「「「よろしくお願いします。」」」

「えっと・・・ゼロには、ライトニング分隊の隊長補佐をやってもらいます。なので、ゼロのはエリオとキャロの訓練を見てもらうことになります。」

「よろしくね。エリオ、キャロ。」

「「はい！」」

ライトニング分隊隊長補佐。それが、ゼロがはやてに言われた担当だった。フェイトが、執務官の仕事で機動六課を空けることがあり、しかも残った副隊長は教えることが、苦手と言うことでゼロが隊長補佐ということになった。

「それじゃあ、ゼロ君の実力を見せてもらいたいんだけど・・・」

「それは、私に任せてもらう！」

「シグナム。」

そこに来たのは、ライトニング分隊副隊長シグナムだった。

「あなたが、シグナム副隊長ですか。いいですよ、お相手いたします。」

「それじゃあ、ゼロ君の相手はシグナムさんということで2人とも準備をお願い。」

そして、ゼロとシグナムは訓練場の真ん中に来た。すでに、シグナムはセットアップを終えていたので後はゼロだけだった。

「ステラ。セットアップ！」

< スタンバイ・レディ >

ゼロがセットアップをしたのを確認してなのはが、開始の合図をする。

「レディ・ゴー！」

「はああああああ！」

開始と同時にシグナムが、ゼロに向かって突撃してきた。だが、ゼロは一步も動く様子がない。それに対してシグナムは、構うことなくレヴァンティンを振り下ろした。

「ええええええええ！ちよつと！大丈夫なのあの人！」

「なんで避けないの！」

フォワードを始めとする見物していた全員が目を見開いて驚いた。そして、シグナムの攻撃によって舞っていた土煙が晴れてきた。

「えっ！？あれって・・・」

土煙が完全に晴れてシグナムたちの姿が見えた。すると、そこに映っていた光景は・・・

「結構重い一撃ですね。シグナム副隊長。」

「おまえこそ。なかなかだな。」

そこにあったのは、レヴァンティンがゼロに当たる直前で停止させているシグナムの姿だった。

「一体・・・どうなっている。体が・・・動かない・・・」

「無駄ですよ。いくら足掻いたところで動きませんよ。なので・・・」

ゼロは、シグナムの首筋にデバイスを突き付けた。

「降参してください。」

「くっ・・・私がこんなに簡単に負けるなんて・・・」

「そこまで！勝者ゼロ君！」

なのはのコールでゼロの実力を試すための模擬戦は終了した。腑に落ちないと言ったシグナムを残して。

「・・・あのシグナム副隊長が1分も経たずに負けた・・・」

「すごい！ゼロさんすごいです！」

「すご過ぎでしょ・・・」

「わぁ」

上からスバル、エリオ、ティアナ、キャロの順番だ。フォワードの4人は圧倒的な強さのゼロにただ驚くことしかできなかった。しかし、それは隊長陣も同じだった。

「マジかよ・・・あのシグナムが・・・」

「信じられない・・・」

シグナムが、あんな簡単に負けたことは、やっぱり信じられない事だった。

「どうでしたか？」

「あっうん・・・」

「ん？」

ゼロは、模擬戦の結果がどうだったか聞いたが、みんな何とも言えない顔をしていた。

「レスティア！」

「はい？」

「説明してもらおうぞ！」

「えっと・・・」

シグナムに攻め寄せられ、ゼロは後ずさった。シグナムが言った説明しろとは、たぶん急に体が動かなくなった事に対してだろうとゼロは思った。

「言わなきゃダメですか？」

「ダメだ！」

「ゼロ君、私たちも知りたいな。」

「「うん、うん。」」

「・・・わかりました。お話します。」

第2話 実力（後書き）

どうも、Theaterです。

模擬戦でシグナムを瞬殺したゼロですが、ここで軽く設定を公開します。

ゼロ・レスティア

所属…機動六課ライトニング分隊隊長補佐（異動前、地上本部レジ
アス中将直轄部隊）

階級…一等陸尉（一等空尉の階級も持っているため空戦も可能）

魔法術式…ミッドチルダ式・陸戦A A（空戦A A A+）

デバイス…インテリジェントデバイス“ステラ”

モード1…杖型

モード2…戟型（魔力刃ではなく実体刃）

モード3…？

レジ阿斯中将の推薦で機動六課に異動。しかし、その正体はジェイル・スカリエッティが送り込んだスパイ。

今の所こんな感じでしょうか。それと、補足をしますとステラのモルド2の戦型

ですが、恋姫無双の恋の戦をモデルにしています。それに伴ってバリアジャケット

トも恋の服を男用にした感じでお願いします。

それでは次回、第3話で会いましょう。

第3話 レアスキル（前書き）

ゼロの能力の秘密が明らかに

第3話 レアスキル

「それでは、話しますね。」

シグナムとの模擬戦の後、シグナムを瞬殺できた理由をみんなに聞かれ、話すことになったゼロ。そして今その説明に入るところだった。

「簡単に言うところのことです。」 キイイイン

「な、なんだ？体が、急に・・・わあああ！」

「なっ？シグナム！こっち来んな！」

シグナムが、急にヴィータの方に走り出しレヴァンティンを振り下ろした。だが、間一髪でヴィータはそれは避ける事が出来た。

「シグナム！てめえ、あたしを殺す気か！」

「ち、違う！体が勝手に・・・」

「ゼロ君。ふざけるのはその辺でやめてくれないかな？」

「そうですね。」

明らかに怒っているなのは言われゼロはふざけるのをやめた。

「見て頂いたとおり、これが私のレアスキル“ドールマスター人形使い”です。」

「ドールマスター……」

「はい。能力は有機物、無機物を問わず自由に操れることです。さっきの模擬戦の時もシグナム副隊長をドールマスターで操り、動きを止めたということです。」

「なるほどな。せやったら何で資料にそのことが書いてへんかったん？」

「八神部隊長……」

そこに、はやてがやってきてゼロに聞いてきた。

「レアスキルこと、私は知らなかったよ。」

「書いてませんでしたか？おかしいですね……」

「まあええ。それで、ほかに隠してることはないんか？」

「別に隠してたわけじゃ……ありません。」

「ならええわ。」

はやては、納得をしたようだった。

「それじゃあ、訓練再開しようか。」

「」「はい！」「」

「ゼロ君はどうする？」

「まだ、部屋の片づけとかあるから私はこれで。」

「うん、わかった。」

「えっと・・・これをここに置いてと・・・」

< マスター、こちらはそこをお願いします >

訓練場から戻り、自室の片づけをしているゼロ。ステラに協力してもらい、そんなに時間が係ることなく片づけは終わった。

「さてと、これで片づけは終わりっど……あとは……あいつにも会っておくか。えっと……」 ピッ

『はーい、何やゼロ君。』

「これから、地上本部へ行きたいのですが、よろしいですか？」

『ん？別にええけど。どうしたん？』

「少し、用事ができました。」

『うん。わかったわ。』

「はい。それでは。」

はやてとの通信を切ってゼロは地上本部へと向かった。

コンコン

「入れ。」

「失礼します。」

地上本部に着いたゼロはある人物の下を訪れていた。ゼロが部屋に入るとそこにいたのは

「初めまして、レジアス中将。ゼロ・レスティア一等陸尉です。」

「貴様が、ゼロか。話は聞いている、まあ座れ。」

「はい。失礼ます。」

部屋の中にいたのは、地上本部総司令レジアス・ゲイズ中将だった。

「それで、どうだった。機動六課にはもう顔は出したのだろう。」

「はい。正直に言いますと部隊長を始めとする全員が甘いですね。」

ゼロは、機動六課で感じたことを話し始めた。

「ほとんどが身内や知り合いだけで構成された部隊だけあって、まるで遊んでいるかのようです。」

「ふははは！言うじゃないか。そのとおりだ、あの小娘が犯罪者の分際で・・・」

「今ところ、目立った動きはありませんが、引き続き監視を続けます。」

「ああ、精々ががんばって働いてもらおうか。」

「はい。それでは、失礼いたします。」

ゼロは、一礼を部屋を出た。

「ふっ、八神はやてを犯罪者扱いをしておいて、そう言う自分は何をやっているのやら。」

不敵な笑みを浮かべゼロは、その場を後にし機動六課の隊舎に帰ろうとした。

「兄さん！」

「ん？」

帰ろうと地上本部をから出ようとした瞬間、誰かに声を掛けられた。ゼロが振り向くとそこには、1人の女性局員がいた。

「ドゥーエ・・・」

「久しぶり兄さん？」

「ああ、久しぶりだなドゥーエ。」

「ここには何か用事？」

「まあな。でも、もう終わったよ。」

ゼロがそう言うと、ドゥーエはニッコリと笑ってゼロの腕を取ってきた。

「それじゃあ、今から時間ある？あるなら、ちょっと私に付き合っ
て？」

「はあ、わかったよ。かわいい妹ためだ。付き合っ
てあげるよ。」

やれやれと言った感じでゼロはドゥーエに付き合うことにした。

「それで、機動六課に潜入してどうだった？」

「うん。最初は、疑われたけどね。でも、今は何とか信用されてるよ。」

「そう。」

地上本部を出て、ゼロとドゥーエは街へと来ていた。そして、適当な店に入り任務の話をしていた。

「ドゥーエ、おまえのほうはどうなんだ？」

「そうね。まあまあかしら・・・」

「そう言えば聞いたぞ。おまえ、男性局員から絶大の人気らしいな。告白もよくされるとか。」

「なっ！なんでそんなこと知ってるの！」

ゼロの意外な発言にドゥーエは驚いた。

「違うからね！勘違いしないでね。告白は全部断ってるから！誰とも付き合ってなんかいないから！」

「え・・・いや・・・」

「さてと、それじゃあそろそろ行くよ。」

「え？もう。」

「あまり、機動六課を離れてるわけには行かないからな。」

「うん、わかった。じゃあ、またね。」

「うん、またね。」

そして、その夜。ゼロは自室で定時報告をしていた。

『どうだねゼロ。状況は？』

「はい。今のところ、順調ですドクター。」

『そうか。なら、このまま頼むぞゼロ。』

「了解しましたドクター。」 ピッ

通信を切って、ゼロは物思いに耽った。ゼロの機動六課での1日目
はこうして終わった。

第3話 レアスキル（後書き）

はい、どうも。Theaterです。

ドゥーエが可愛いですね。本来はこんなキャラではないんですが、ゼロとの関係上
こうした方がおもしろいと思ひまして。

それと、ゼロのことですけど少しだけネタばれをします。まあ、ドゥーエを妹と言
ってるあたりで、わかると思いますけどゼロは戦闘機人です。ただ
し、魔法を使っ
てますから人造魔導師を素体としています。

それと、ドールマスターですけど少し解説をします。

【人形使い】 ドールマスター

指先から魔力を元にした特殊な糸を出し、有機物、無機物を問わず

支配下におくことができる。人を操るさいには、精神も支配することもできる。操れる範囲に制限はなく次元間を超えても効果は続く。

まずは、こんなところです。まあ、糸と言っても本当に糸ってわけでもないです。あくまで比喻表現です。それと、ドールマスターには他にも能力があります、それはまたの機会に。

では次回、第4話で会いましょう。

第4話 もう1つの能力（前書き）

ゼロが来て初めての任務が始まる。

第4話 もう1つの能力

ミットチルダ 首都南東地区

その上空を一機のヘリが飛んでいた。

「ほんなら、改めてここまでの流れと今回の任務のおさらいや。」

ヘリの中にいたのは、機動六課のフォワードと隊長陣だった。そして、これから任務に向かう途中のようだった。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者及びレリックの収集者は現状ではこの男。」

はやては、空間モニターを出した。すると、そこには1人の男が映っていた。

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める。」

「こっちの捜査は、主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね。」

フェイトが、フォワードの4人を見て言った。

「」「はい。」「」

「そして、今日これから向かう先がここホテル・アグスタ。」

リインがふわふわとモニターの前に飛んでいきモニターを切り替えた。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護それが今日のお仕事ね。」

「取引許可の出ているロストログアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高いとのことで、私たちが警備に呼ばれたです。」

「この手の大型オークションは、密輸取引の隠れ蓑になったりするし、いろいろ油断は禁物だよ。」

「現場には、昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長他数名の隊員が張ってくれてる。」

「私たちは、建物の中の警備に回るから、前線は副隊長の指示に従ってね。」

「」「はい」「」

「あの、シャル先生。」

するとキャロがシャマルに手をあげて質問をした。

「さっきから気になってたんですけど、その箱って？」

キャロは、シャマルの足元にある4つの箱を指さした。

「ん？ああ、これ。ふふっ隊長たちのお仕事着。」

「はぁ、落ち着かない。」

ホテル・アグスタについた機動六課のメンバー。そして、ついたと同時にゼロはシャマルに着替えを強要され現在、ゼロはタキシード姿をしていた。

「おまたせやゼロ君。」

溜息をついていると、後ろから声を掛けられた。そして、振り返るとそこにドレス姿のなのはたちがいた。

「……………」

「あの、ごめんね待たせちゃって。」

ゼロが無言なので怒っているのかと思ったフェイトが申し訳なさそうに謝った。

「あ、いや。それほど待ってないよ。大丈夫。」

「本当に？」

「なんや、黙っとったけど……」

「ああ、それは……」

ゼロは、何か言いにくそうにしていた。

「どうしたの？」

「えっと……その……綺麗だなと思って……」

「「「えっ？」」」

「なのもフェイトもはやても、とても綺麗だよ。」

「「「／／／／／／／／／／／／／／／」」」

ゼロに綺麗だと言われ、3人は顔を真っ赤にした。

「あ、ありがとうゼロ君。」

「べ、別に・・・」

ゼロも負けないほど顔を真っ赤にしていた。

それから、ゼロはなのはたちと別れ、1人で会場内を周っていた。

「さて、そろそろいいかな。」

人気のない場所に来るとゼロは、本来の任務を始めることにした。

「ドールマスターのもう1つの能力《ファミリアードール》。
キイイイイン

ゼロが、そう口にすると目の前に1つの魔法陣が浮かび上がった。
そして、その魔法陣からだんだんと人型が形成されてきた。人型が、
完成するとそこにはもう1人ゼロがいた。

「よし、それじゃあ後は頼んだ。」

「わかった。」

そして、ゼロはその場から姿を消した。

その頃、ホテル・アグスタの近辺の森の中に1人の男と少女がいた。

「あそこか。おまえの探し物はここにはないのだな。」

男が少女に向かって言うと、少女は男をじっと見ていた。

「何か気になるのか？」

「うん。」

少女がそう言った瞬間、どこからか一匹の虫が飛んできた。少女が人差し指を立てると虫はそこに止まった。

「ドクターのおもちやが近づいてきてるって。」

「相変わらずだなルー。」

「ん？」

少女と男が見るとそこはゼロがいた。

「ゼロ。」

少女は、ゼロとわかると男と繋いでいた手を離しゼロに抱きついてきた。

「ゼロか。来ていたのか。」

「ああ、ゼスト。」

「確か今は潜入をしているのではなかったか？」

「大丈夫だ。向こうには人形を置いて来たから。」

ゼロは、抱きついてきた少女ルーテシアの頭を撫でながら言った。

「さて、そろそろ行こうか。」

「こちら、ライティング05。シャマルさん聞こえますか？」

『はい、聞こえます。なに、ゼロ君？』

「私もシグナム副隊長同様に前線に出たいのですが、よろしいでしょうか？」

現在、ホテル・アグスタに向かってきているガジェットを殲滅するためシグナム、ヴィータ、ザファイラが迎撃に出ていた。そして、フォワードの4人がホテル前で防衛ラインを張っていた。

『でも、ゼロ君には中の警備の仕事が・・・』

「八神部隊長たちがいれば、中は大丈夫だと思います。ですから・・・」

『わかりました。では、フォワードの4人についててもらえますか？』

「了解。ステラ、セットアップ！」

< セットアップ > キイイイイン

ゼロは、セットアップをして外に出た。

第4話 もう1つの能力（後書き）

はい、第4話でした。どうも、T h e a t e rです。

さっそく、ドールマスターのもう1つの能力ができました。まあ、見てわかるように人形を創り出す力です。やっぱり、人形使いということで操るだけではなく、人形を創るのにも必要かなと思いました。

今回は、自分にそっくりな人形を創りました。たぶんこれが、一番必要な人形になると思います。解説をすると、この人形は自分の魔力を媒体にして創っています。それによって本人と寸分変わらない物にすることができるので見分ける事がほぼ不可能です。まあ、要は攻撃されても消えない影分身とってくれればいいです。

他にも魔力以外でも創ることはできますが、それはまたの機会にでは次回、第5話で会いましょう。

第5話 ランスターの弾丸（前書き）

やれるつもりだった。できるはずだった。

しかし、その結末は・・・

第5話 ランスターの弾丸

「さすが、ヴォルケンリッターと言ったところか。」

ゼストとルーテシアに合流したゼロは、ホテル・アグスタの見える高台に場所を移していた。そして、ホテルの方でガジェットが次々に破壊されているのが見えた。

『ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア。』

すると、空間モニターが開きスカリエッティーが現れた。

「ごきげんよう。」

『ゼロも無事に合流できたみたいだね。』

「はい。ドクター。」

「なんのようだ!？」

ゼストは、少々不機嫌な声で言った。

『冷たいね。近くで状況を見ているんだよ。あのホテルにレリック

は無さそうなんだが、実験材料として興味深い骨董が1つあるんだ。少し協力してくれないかね？」

スカリエッティは、別のロストログアの確保に協力してくれと言ってきた。

『君たちなら実に造作もないことだと思うんだが。』

「断ると言いたいところだが、その為にゼロがここにいるのだろう？」

『話が早くて助かる。ルーテシアのデバイス“アスクレピオス”に私のほしい物のデータを送ったよ。』

「うん。じゃあ、ごきげんようドクター。」

『ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ。』

そう言い、通信が切れた。そして、ルーテシアは羽織っていたフードを脱いだ。

「それじゃあ、始めようかルー。」

「うん。」

ゼロの言葉に頷き、ルーテシアは魔法陣を展開させた。

「あっ！」

「どうしたのキャロ？」

「近くで誰かが召喚を使ってる。」

ルーテシアの召喚を同じ召喚を使うキャロが感知した。

『クラールヴィントのセンサーにも反応・・・だけどこの魔力反応って！』

「お、大きい！」

モニターしていたシャーリーと指揮をしていたシャマルは魔力反応の大きさに驚いていた。

「小さき者、羽ばたく者。言葉に答え、我が命を果たせ。召喚インゼクト」

ルーテシアの魔法陣からいくつかの触手が伸びていた。そして、ルーテシアの詠唱が終わると触手が弾け、そこから大量の虫が出てきた。

「ミッシヨン、オブジェクトコントロール。いってらっしゃい、気を付けてね。」

虫たちは一斉に飛び立ち、ガジェットのある方に向かった。そして、虫たちはガジェットいる場所までくるとガジェットの中に入っていた。

「さて、それじゃあ俺は行くよ。」

「ああ。」

「気を付けてね。」

「くっ！何だ急に動きがよくなった？」

「自動機械の動きじゃないな。」

急にガジェットの動きがよくなり、攻撃が当たらなくなってきたことにヴィータとシグナムは、不審に思った。

「ヴィータ、ラインまで下がれ、向こうに召喚士がいるなら新人たちの所まで、回り込まれるかもしれん。」

「シグナム！フォワードの4人の所にはゼロ君がいるの。だから、一応大丈夫だと思うんだけど。」

「それでもだ。何があるかわからない。」

「わかった。」

ヴィータは、フォワードの4人の下へ急いで飛んで行った。

「ヘザファイラ、シグナムと合流して。」

へ心得た。✓

「遠隔召喚！来ます！」

シグナムの予想通り、新人たちのところまでガジェットが遠隔召喚されてきた。

「召喚ってこんなことまでできるの？」

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです。」

キャロがスバルの疑問に答えた。

「何でもいいわ。迎撃行くわよ！」

「」「おう！」」

1人見晴らしの良い木の上にいたティアナは迎撃の用意を始めた。

（これまでと同じだ、証明すれば良い。自分の能力と勇気を証明して、私はいつだってそうしてきた。）

そして、ルーテシアとゼクトと別れたゼロは、スカリエッティの探し物を捕獲するためホテルの地下駐車場に来ていた。

「あれか。へルー聞こえる？」

へうん、聞こえる。✓

へドクターの探し物が見つかった。ガリユーをこっちへ寄こしてほしい。✓

へわかった。✓

ルーテシアは、左手のグローブを見た。

「ガリユー、ゼロに協力してくれる？」

ルーテシアがそう言うときラインとグローブのクリスタル部分が光った。

「うん。気を付けて行ってらっしゃい。」

すると、左手のグローブのクリスタル部分から何かが出て行った。



「さて、本体は任務に行ったし、こっちはどうするか・・・」

ガジェットの迎撃をしているフォワードの4人とゼロの人形。そこで、ゼロの人形は管理局にバレないようにガジェット破壊していた。

『防衛ライン、もう少し持ちこたえてね。ヴィータ副隊長がすぐ戻ってくるから。』

「でも、守ってばかりじゃ行き詰ります。ちゃんと全機墮とします。」

「ティアナ、無茶するな！」

ゼロが、ティアナを止めようとした。

「大丈夫です。毎日、朝晩練習してきてるんですから。エリオ！センターに下がって、あたしとスバルのツートップで行く。」

ティアナは、エリオに指示を出した。

「スバル！クロスシフトA行くわよ！」

「おう！」

スバルは、ウイングロードを走り、ガジェットたちをひきつけた。

（証明するんだ。特別な才能やすごい魔力が無くたって、どんな危険な戦いだって・・・）

ティアナは、心の中で思う。

「ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃つ抜けるんだって」

ティアナの周りに大量のスフィアが現れた。

「クロスファイアー・・・シュート！」

一斉にスフィアがガジェットに向かって行った。そして、次々にガジェットを撃ちぬいて行った。だが、その時一発の弾丸が逸れてスバルの方に向かって行った。

「あっ！」

スバルが気付いた時には、もう弾丸はすぐそばまで来ていた。徐々に迫ってくる弾丸にスバルは身動き出来ずに直撃かと思われたその瞬間

「えっ？」

スバルとスフィアの間突然壁ができた。

「がっ！」

「ゼロ隊長補佐！」

ゼロが壁となりスフィアからスバルを守っていた。そして、背中にスフィアを受けたゼロはスバルの方に倒れた。

「ティアナ！」

「ヴィータ副隊長！」

ようやくヴィータが防衛ラインまで来た。

「このバカ！無茶やったうえに味方撃ってどうすんだ！」

「あ・・・ああ・・・」

ティアナは、その場に立ちつくし言葉を発することさえできないでいた。

「あの、ヴィータ副隊長。今のもコンビネーションのうちで・・・」

「ふざけんな！その状態のゼロを見てそんなことが言えるのか！」

「ああ・・・」

スバルは、抱えているゼロ見てそれ以上何も言えなくなっていました。

「後はあたしがやる。スバルは早くゼロをシャルのところに連れて行け！」

「は、はい！」

スバルは言われた通り、ゼロをシャル下へ連れて行った。

第5話 ランスターの弾丸（後書き）

はい、どうもTheaterです。

ゼロがティアナの誤射にやられました。と言っても人形の方なので本体を何ともないんですが。

それにしても、バレないようにするために命張る奴っているんですかね？まあ、た

ぶんこれが、人形じゃなく本体の方がいたら助けたのかな？

何か、敵なのか味方なのかわからなくなるキャラで困ります。ちなみに次回本体の方が活躍するかも？

では次回、第6話で会いましょう。

第6話 2人目の召喚士（前書き）

人形の安否を確かめに行くゼロ。だが、そこで・・・

第6話 2人目の召喚士

「えっと？これじゃない。これでもない。」

人形がティアナの誤射に撃たれる数分前、ゼロはスカリエッティーの探し物を探していた。

「うゝん？どれだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロが、悩みながら探していると、突然目の前に箱が差し出された。

「ガリュー？それか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「よし、よくやったガリュー。偉いぞ。」

探し物を見つけたガリューを褒めるとガリューは喜んでるように見えた。

「それじゃあ、それをドクターに届けて・・・・ん？」

「・・・・・・・・」

突然、ゼロが話を区切ったのでガリューはどうした？という顔をしながら見える。

「あつ悪い。どうやら、人形の方に何かあったみたいだ。」

「・・・・・・・・」

「心配するな。かなり密度の高い人形にしてあるから、簡単に消えたりしない。」

心配したガリューに大丈夫だとゼロは言う。

「それより、それをドクターの所へ頼むぞ。」

「・・・・・・・・」

「うん。行け。」

ガリューは、ゼロの言うとおりに探し物を持ってスカリエッティの所に向かった。

「さて、大丈夫と言ったが、何があったかは気になる行くか。」

ゼロは、人形に何があったのか確かめるために現場に向かった。

「どうですかシャル先生？」

「うん、大丈夫。ちょっと怪我はしちゃってるけど、そんなに大したことはないから。」

気を失っているゼロを抱えスバルは急いでシャルの下に向かい治療をお願いした。そして、幸いなことにゼロの容体は大したことはなかった。

「それで、ティアナは？」

「はい、今は裏手の警備をしています。」

「そう。じゃあ、ここは私に任せてティアナにゼロ君は大丈夫だっ

て言ってきてくれる？」

「は、はい！わかりました！」

スバルは、急いでティアナの下へと走って行った。

「よし！全機撃墜。」

その頃、ヴィータはガジェットを1人で全機破壊し終えた所だった。

「ヴィータ！」

「おお、シグナム。そっちも終わったか？」

「ああ、終わった。」

すると、ちょうどシグナムとザフィーラもガジェットを全機撃墜して戻ってきた。

「召喚士は取り逃がしてしまったな。」

「だが、いるとわかっていれば対策も立てやすい。」

「だな。」

召喚士は、取り逃がしたがいるとわかったただけでも収穫だと思うことにした。

「それで、ティアナとスバルがいないのはなぜだ？」

シグナムが周りを見渡すが、エリオとキャロはいるがティアナとスバルの姿だけが見えなかった。

「・・・ちよつとな。ティアナがやらかしてな。」

ヴィータは少し、言いにくそうにシグナムを見た。

「そうか。まあ今はいい。それより、そこに隠れているのは誰だ？」

「っ！」

「出て来い。来ないなら容赦はしない。」

「わかった。」

出てきたのは、黒いフードを被った男だった。正体は無論ゼロだ。人形の様子を見に来たが、姿が見えなかったのでウィータ達の様子を覗いていたが、運悪くシグナムに見つかった。

「それで、貴様が召喚士か？」

シグナムは、レヴァンティンを起動させゼロに向けた。

「いや、違う。」

ゼロは、声でバレないように声を変えて話した。

「貴様は、スカリエッティの仲間か？」

「そうだと言ったら？」

「どこにいる？」

「言うんでも？」

お互いに相手の出方を見ているが、2人とも高ランクの魔導師、互いに隙がない。だが、それはこの場に2人しかない場合でここには、シグナムの他にヴィータ達もいる。状況は圧倒的にゼロが不利だ。

（さて、どうするか。逃げるにしても相手が多すぎる。フォワードの2人はいいとして、ヴォルケンリッターが3人はきついかな。）

ゼロは戦うことは避けて逃げる事に徹しようとするが、それが難しいとわかるとどうするか考えていた。

「抵抗しないで投降すると言うなら悪いようにはしない。どうする？」

「素直をすることで。」

「しないだろうな。」

それを最後に沈黙が始まった。ゼロはその間に打開策を考えていた。

（人形の話は、後で直接本人に聞けばいいかな。なら、そろそろこの場から脱出するか。）

ゼロは、ゆっくりと両手を合わせた。そして、それを見たシグナム

は警戒を強めた。

「何の真似だ？」

「そろそろお暇しようかなと思ひまして。」

すると、ゼロの周りに複数の魔法陣が現れた。

「させるか！」

「遅いですよ・・・」

シグナムが、ゼロに向かって突撃したが、ゼロの方が速かった。魔法陣からは、植物の蔓が無数に出てきた。

「な、なんだこれは？」

「召喚魔法です。」

キヤロが、ゼロの使った魔法を召喚魔法だと言った。

「き、貴様。やはりさっきの召喚士か！」

「いいえ。召喚は使えますが、さっきのは違います。あれは、別の人物です。」

ゼロは、淡々と答えた。

「それでは、みなさんまた会いましょう。」

「ま、待て！」

ゼロとシグナム達の間、蔓が広がって行き、ゼロの姿を隠していった。シグナム達は蔓を必死に斬って行ったが、増殖する速さが尋常じゃないため結果ゼロを逃がしてしまった。

「逃がしたか。」

「くそ！」

取り逃がした事にヴィータはイラついていた。

「しかし、奴に言う事が本当だとするなら、スカリエッティには優秀な召喚士が2人もいるということか。」

「ふー、何とか逃げられたな。」

シグナム達から、逃げ切ったゼロは一先ず落ち着いて息を整えていた。

「さて、これからどうするか。」

人形の状況が、わからない今、六課に帰るのは危険だと判断したゼロは、どうするか考える。

「何かさっきから考えてばかりだな。」

そんな事を思っていると急に疲れがどっと押し寄せてきた。

「少し休むか。人形には夜にでも連絡をとればいいし。」

ゼロは、一休みのため夜まで眠りにつくことにした。

第6話 2人目の召喚士（後書き）

はい、第6話でした。どうも、T h e a t e rです。

久々の更新です。別にサボっていたわけではないですよ。パソコンを修理にだしていただけです。

えー、今回の話ですが、これと言ったことはあまりないですね。あとすればゼロが、召喚魔法を使ったことくらいですかね。

では次回、第7話で会いましょう。

番外編 妹たちとの出会い1（前書き）

1万PV達成記念です。

まずは、長女のウーノから、どうぞ。

番外編 妹たちとの出会い 1

『ゼロ、ちょっと来てくれないか?』

「何ですか? ドクター?」

ゼロが、スカリエッティと出会ってから数年が経とうとしていた。ゼロとの出会いにより人体と機械の融合と言う技術を劇的に発展させようとしていたスカリエッティ。ここ最近、何かの研究に没頭していたはずが急に呼ばれた。ゼロは不審に思いながらも研究室に向かった。

「入りますよ、ドクター。」

「ああ、入りましたえ。」

ゼロが、研究室のドアを開けた。そして、中にはいつも通りにスカリエッティがいた。だが、今日は1人ではなかった。なぜか中には1人の女性がいた。

「ドクター、彼女は誰ですか?」

「君の妹だ!」

「・・・はっ?」

いきなり妹だと言われゼロは間の抜けた声を出してしまった。それを見たスカリエッティは、目に涙を溜めて必死に笑いを堪えていた。それにムカついたゼロは、ステラをモード2にしてスカリエッティ目掛けて振り下ろそうとした。

「ま、待て！私が悪かったから！」

「次は真面目にやりますか？」

「ああ、約束しよう。」

スカリエッティが、反省したようなのでゼロは、ステラを引っ込めた。そして、スカリエッティはゼロに彼女の事を説明した。スカリエッティによると、彼女の名前はウーノというらしいかった。彼女は、スカリエッティが、ゼロとタイプゼロと呼ばれる戦闘機人を基礎としてクローン培養して創った戦闘機人だそうだ。

「なるほど、そう言う事でしたか。」

ゼロが、スカリエッティの説明を聞いて納得したところでウーノがゼロの前まで来た。そして、両手でゼロの右手を包み込むと優しく微笑んだ。

「初めまして、ウーノと言います。これからよろしくお願いしますね兄さん。」

「あ・・うん。よろしくウーノ。」

ウーノの笑った顔に思わずドキッとしたゼロ。その顔はほんのりと赤くなっていて明らかに照れていた。その様子を見ていたスカリエッティは、さっきと同じ反応をしていた。その後、ゼロの雷が落ちると分かっていながら。

「ごめんね。恥ずかしいところを見せて。」

「ふふっ、別に大丈夫ですよ。」

スカリエッティにお灸を据えた後、2人は隠れ家の中を歩いていた。スカリエッティからウーノの面倒を見てくれと頼まれたゼロ。自分の妹と言われれば断る訳にはいかない。それで、手始めに隠れ家中を案内することにした。

「ここが、訓練場。と言っても相手がいないんだけどね。」

「ごめんなさい。私が、相手できればよかったですけど・・・」

ウーノは、しょんぼりとしてしまった。スカリエッティによればウーノは戦闘機人で身体能力は強化されてるが、あまり戦闘向きでは

ないと言う。どっちかと言えば、情報収集などがむいているそうだ。

「気にしなくてもいいよ。ウーノが悪い訳じゃないんだから。」

ゼロは、ウーノの頭を撫でた。すると、ウーノは顔は赤くなってしまった。

「じゃあ、次に行こう。」

2人は次の場所に向かった。ゼロが向かったところは、キッチンだった。

「キッチンがここね。まあ、利用するのは当然俺1人だけど。」

「ドクターは、利用しないの？」

「あの人は、研究が忙しいとかでいつも携帯食しか食べないから。」

ゼロは、出会った当初の事を思い出す。折角、ご飯を作っても研究が忙しいからと絶対に食べようとしなない。一度、それにキレて無理やり食べさせたこともあったが、まったく効果が無かった。なので今はもう諦めているのだった。

「でも、ウーノが来てくれたからもう寂しくないな。」

「えっ？」

「いつも、1人で作って1人で食べてたから正直寂しかったんだ。だから、妹ができてとてもうれしいよ。」

ゼロが、微笑むとウーノは顔を真っ赤にした。そして、手を自分の胸に当てた。すると、心臓の鼓動がとても速くなっていた。

（な、何・・・この気持ち？胸がドキドキして、兄さんの顔をまともに見れない。）

「ウーノ？どうした。」

「えっ？う、ううん！なんでもない・・・」

突然、黙り込んだと思ったら、今度は慌てたのでゼロは首を傾けた。

「大丈夫か？顔が赤いようだけど・・・」

「へっ!？」

ゼロは、ウーノの前髪を上げ自分の額を合わせた。そして、熱が無いかを確かめた。10秒ほど計ってみたが、どうやら熱は無いよう

なのでゼロは安心して額を離した。

「ってウーノ！」

額を離し改めてウーノの顔を見るとさっきよりも更に顔を真っ赤にしたウーノが口をパクパクさせていた。

「お、おい！ウーノ。どうしたんだ！」

「あ・・・ああ・・・兄さ・・・ん・・・」

そうして、ウーノは気を失ってしまった。そして、ウーノを背負い急いでスカリエッティを呼ぶゼロの叫びが隠れ家中に響いた。

そして、後日。ゼロに甘えまくりのウーノの姿があった。あの後、急いでスカリエッティにウーノを診せた。スカリエッティによるとただ、気を失っただけとわかりゼロはほっとした。そして、次の日からウーノはなぜかゼロにすぐ甘えてきたのだ。ゼロは、妹だから兄に甘えたいだけと思っているが、果たして事実はどうなのやら。そして、そんな2人を見てニヤニヤしているスカリエッティが居たとか。

番外編 妹たちとの出会い1（後書き）

はい、どうもTheaterです。

1万PV達成と言うことで、番外編をやりました。前から、ナンバーズとの出会いをやろうと思っていたので丁度よかったです。

流れ的には、スカリエッティがナンバーズを創る前にゼロに会っていたと言う事です。それから妹と言う形で出会っていきます。

ちなみに、ウーノの性格が違う所は勘弁してください。ナンバーズの性格ってあまりよくわからなかったのでこうなりました。

言い訳を言えば、スカリエッティじゃなくゼロに育てられたのでこうなったと言ふことになってください。

なので大半のナンバーズの性格が変わると思いますのでご容赦ください。次はドゥーエをやるので楽しみにお待ちください。

では次回の番外編で会いましょう。

第7話 一時帰還（前書き）

六課をしばらく離れるゼロ。

第7話 一時帰還

ゼロが、シグナム達から逃げ通した頃、ドールのゼロが目を目を覚ました。

「う、うーん？ここは・・・」

「あっ！目が覚めた。」

「シャマル先生？」

ドールは、ゆっくりと体を起こすと周りを見た。どうやらここは医務室のようだった。

「気分はどう？」

「体中が痛いです。」

スバルを守るために自らスフィアの前に立ったのだから当然のことだった。

「・・・スバルは大丈夫でしたか？」

「ええ、ゼロ君が守ってくれたから怪我はしてないわ。ただ・・・」

スバルは、大丈夫と言ったシャルだが、大丈夫じゃない人が1人だけいた。

「ティアナですか？」

「うん。かなり落ち込んでいるわ。」

「そうですか・・・」

ドールは、それを聞いて立ち上がった。

「ゼロ君？まだ、休んでなきゃ・・・」

「もう、大丈夫です。それより、無事な姿を見せて安心させてやらないと・・・」

「・・・無理はしないようにね。」

「はい。」

ドールは、シャルの許可が降りるとティアナの下へと向かった。

そして、その頃ティアナ達フワードは、合流したなのはとフェイトにこの後の事についての指示を受けていた。

「現場検証は現場班がやってくれるけど、みんなも協力してあげてね。しばらく、待機して何もなければなら撤退だから。」

「「「はい！」」」

スバル、エリオ、キャロが返事をするが、ティアナだけしなかった。その様子から見るにかなり落ち込んでいるようだ。

「で、ティアナは・・・私とお散歩そようか。」

ティアナの様子を見てなのはが散歩に誘った。ティアナは、少し驚いた様子だが、力のない声で了承した。そして、なのはとティアナは、ホテル近くの雑木林を歩いていた。

「失敗しちゃったみたいだね。」

「すみません。一発それちゃって。」

「私は、現場にいなかったし、ヴィータ副隊長に叱られてもうちゃんと反省してると思う。だから、改めて叱ったりしなけど、ティアナはときどき少し一生懸命すぎるんだよね。」

なのはは、少し困ったような顔をして言った。

「それでちょっとやんちゃしちゃうんだ。」

そう言ってなのははティアナの肩に手を置いた。

「でもね。ティアナは1人で戦っているんじゃないよ。集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右全部が味方なんだから。その意味と今回のミスの理由ちゃんと考えて同じ事を二度と繰り返さないって約束できる？」

「・・・はい。」

「なら、私からはそれだけ。約束したからね。」

「はい・・・」

それから、ティアナはなのはと別れた。そして、現場検証の手伝い

をしているスバルの所に戻ってきた。すると、ティアナの姿を見つけたスバルが走ってきた。

「ティア！」

「スバル？」

「はあはあはあ・・・」

ティアナの前まで来るとスバルは上がった息を整えた。

「いろいろごめんね。」

「ううん、全然！・・・なのはさんに怒られた？」

「少しね。」

「そう・・・」

2人は少し、ぎこちなく話す。すると、ふいに2人に声を掛ける人物がいた。

「思ったより大丈夫そうだなティアナ。」

「ゼロさん！」

2人の前にはドールが立っていた。

「ゼロさん！大丈夫なんですか？」

スバルが、大丈夫なのかと聞いた。すると、ドールは笑って答えた。

「ああ、もう大丈夫だ心配かけたな。」

「あ、あの・・・ゼロさん・・・」

ティアナが、気まずそうにドールに話しかける。そして、勇気を振り絞って言う。

「ごめんなさい！ゼロさん！」

そう言い、頭を下げるティアナ。それを見たドールは、少し驚きそしてティアナに言う。

「頭を上げるティアナ。俺は、大丈夫だ。」

「で、でも・・・」

「俺も一応は隊長だからな。新人の失敗をフォローするのも仕事の内だ。」

そう言い、ドールはティアナの頭をぐりぐりと撫でた。

「ぜ、ゼロさん？」

「それよりも、検証の手伝いをしないと。早く行く。」

ドールは、ティアナの背中を押した。

「は、はい！スバル行くわよ。」

「う、うん。」

ティアナは、スバルを連れて現場検証の手伝いに行った。何となくだが、ティアナが元気になったような気がした。

「さてと、そろそろ本体と連絡を取らないと。」

ドールは、本体のゼロに念話で連絡を取ろうとした。

その頃、ゼロはホテル・アグスタから遠く離れた森の中で眠っていた。

〈本体、聞こえるか？こちらドール1。応答願う。〉

「ん？・・・」

突然、頭の中に聞こえた声にゼロは目を覚ました。

〈本体、応答願う。〉

〈ドールか？やっと連絡がついたか。それで、何があった？〉

（ああ、それが・・・）

ドールは、何があったのかゼロに説明した。ティアナが、無理をしてスバルに攻撃を当てそうになったこと、そして自分がそれからスバルを守り、今まで気を失っていたと

へなるほど、そんなことが・・・

へすまない。勝手なことをした。へ

ドールは、予定に無い行動をとった事に対して本体であるゼロに謝罪をした。

へいや、むしろ丁度いい。このことで完全に六課に信用されただろ。

ドールのやったことで機動六課に完全に溶け込めたと思ったゼロ。そして、ゼロはあることを思いついた。

へドール、しばらく六課にはおまえがいてくれ。へ

へなぜだ？へ

突然の事にドールは驚いた。

へおまえ、体に傷があるよな？へ

へああ、すぐに治せるがそれでは、疑われるからな。へ

ドールは、魔力人形であるため傷の修復は簡単だった。しかし、すぐに治しては、何かと不審に思われる可能性があったので傷はまだ治してはいなかった。

「だから、傷が癒える頃まで入れ替わっていよう。」

「へわかった。それで、それまでそっちはどうする？」

「家に帰ってるよ。それじゃあ、よろしくな。」

それを最後に念話を切った。そして、次にゼロはスカリエッティに連絡をした。

『どうしたゼロ？』

「少し、予定外の事が起きてまして。」

ゼロは、スカリエッティにさきほどドールから聞いた事をそのまま伝えた。

『ふむ、わかった。それでは、ゼロ。一時こちらに戻ってきてくれ。』

「わかりました、ドクター。」

スカリエッティとの通信を切り、ゼロは空を見上げた。そして、しばらくしてから、ゆっくりと立ち上がり我が家へと歩き出した。

第7話 一時帰還（後書き）

はい、第7話でした。どうもTheaterです。

しばらく六課は、ドールに任せてゼロは家に帰ります。それに伴いナンバーズ

が出てきます。さあ大変だ。どうしよう！

性格が変わるのは覚悟しているが、ちゃんとやりたいな

では次回、第8話で会いましょう。

第8話 久しぶりの我が家（前書き）

久しぶりに戻った我が家。

そこで、妹たちと騒がしい日々が戻る。

第8話 久しぶりの我が家

「着いたか。」

機動六課をドールに任せ一時帰還をすることにしたゼロ。現在、我が家の前に着いたところだった。

「元気にしてるかなあいつ等。」

妹たちの事を考えながらゼロは家の中に入った。そして、真っ先に向かったのがスカリエッティがいるであろう研究室だった。

「ドクター、ただいま戻りました。」

「あっ兄さん！」

「ゼロ兄様！」

すると、そこにはスカリエッティだけではなくウーノとクワットロがいた。

「ウーノ、クワットロ。元気にしていたか？」

「はーい。それもう元気でしたよ。」

クワットロが、ゼロに近づいて来てゼロの腕を取った。

「クワットロ・・・いきなり兄さんに抱きつかないの・・・」

それを見たウーノがとてつもないオーラを出しながら、クワットロをゼロから引き離れた。

「ウーノ姉様！何をしますの！」

「いきなり、あなたが抱きつくから悪いのよ。」

一気に険悪な雰囲気になった研究室。ゼロは、やれやれと頭を抱える。そして、ゼロは2人をほっというスカリエッティの所まで行った。

「ゼロ、あれを何とかしないのかね？」

「止めてもまたやりますし、ほっときましょう。」

六課に行くまで何度もこういう事はあったのでもう諦めているのだった。

「ああ、それとゼロ。後で話がある。」

「わかりました。」

ゼロは、スカリエッティが話があると言っただけで内容がなんとなくわかっていた。

「それでは、また後できます。」

ゼロは、そう言い残すと研究室を出て行った。

「さて、みんなはあそこかな？」

残りの妹たちがいるであろう場所にゼロは向かった。そして、目的の場所に近づくと声が聞こえてきた。

「はあああ！」

「おっと・・・まだまだ！」

どうやら、残りの妹たちは訓練場にいるらしかった。ゼロが訓練場

を覗くと思った通りみんないた。

「みんな元気そうだな。」

ゼロが、静かにその様子を見てみると、突然、訓練場に叫び声が響いた。

「あああああああ！」

そして、叫び声を上げた娘がゼロに向かって走ってきた。次の瞬間その娘はゼロにおもいきり抱きついてきた。

「ゼロ兄！お帰りっす！」

ゼロに抱きついてきたのは、ナンバーズ11ウエンディだった。

「ウエンディ。いきなり抱きつくなんていつも言ってるだろ。」

「ふふっごめんっす。」

まったく反省していない様子のウエンディ。そして、ウエンディが騒いだことで後の妹たちもゼロに気付いた。

「兄よ、帰ったか。」

「ゼロ兄！お帰り。」

ナンバーズ5チンク、ナンバーズ9ノーヴェが来た。

「チンク、ノーヴェただいま。それと、トーレ、セイン、ディエチもただいま。」

「ゼロやっとな帰ったか。」

「お帰りゼロ兄！」

「お帰り。」

それぞれ、ゼロが帰った事がうれしいようでみんな笑っていた。

「ゼロ、さっそくだが、訓練に付き合ってもらおうぞ。」

「トーレ姉！ずりいぞ。あたしもゼロ兄とやりたいんだ。」

さっきのウーノとクワットロみたいに喧嘩するトーレとノーヴェ。ゼロは、溜息を吐きながら2人を離れた。

「順番に付き合ってやるから喧嘩するな。じゃあ、最初はトーレから。」

そして、トーレとゼロの模擬戦が始まった。

「手加減なんてするなよ。」

「わかってるよ。ステラ、モード2でセットアップ。」

< イエス、マスター >

ゼロは、セットアップしステラを構えた。

「一瞬で終わらせる。ISライドインパルス！」

トーレは、自らの先天固有技能ライドインパルスで一気にゼロの側面に周った。そして、自身の腕に生えたインパルスブレードでゼロを切り裂いた。

「がっ……」

切り裂かれたゼロは口から血を吐き力なくその場に倒れた。そして、それを見ていた妹たちが叫び声を上げた。

「ト、トーレ姉！何やってんっすか！」

「やり過ぎだ！トーレ姉！」

ウエンディとノーヴェがトーレを責める。しかし、それをチンクが止めた。

「ノーヴェ、ウエンディ大丈夫だ。兄はやられていない。」

「「えっ？」」

「さすが、チンク。おまえは、見切ったか。」

どこからかゼロの声が聞こえる。明らかに倒れているゼロが発している声じゃなかった。

「・・・そこか！」

「おっと！」

トーレが、何もないところでブレードを振るとそこからゼロが現れ

た。突然、ゼロが現れたのでノーヴェとウエンディが驚いていた。

「え？なんで・・・」

「おまえたち、兄のレアスキルを忘れたのか？」

「「あっ！」」

チンクにそう言われ2人はようやくわかったみたいだ。トーレに切り裂かれたの人形、ファミリアドールだったのだ。ゼロがした仕掛けは至って単純だった。ステラをセットアップする際に密度の低いドールを創り、それと入れ替わったのだ。トーレもライドインパルスで近づくまで気が付かなかったようで、ゼロがドールとわかったので躊躇いなく切り裂いたのだ。

「しかし、トーレはともかくチンクもわかるようになっていたとは。」

「苦労した。」

チンクは、誇らしげに言った。

「ゼロ、余所見とは余裕だな。」

「なっ！」

ゼロがチンクと話している隙にトーレは高速でゼロに迫ってきた。ゼロは、ステラの柄でそれを防いだ。しかし、ライドインパルスを使えるトーレは次々に攻撃を仕掛けてくる。

（このままじゃ埒があかないな。）

トーレのラッシュになかなか反撃の糸口が掴めないゼロ。どうしたらいいか考えてるとある事を思いついた。

「トーレ！」

「何だ！加減してくれなどと言う気か？」

「愛してる。」

「なっ！」

そう言った瞬間、トーレの動きが止まった。みると、模擬戦を見ていた妹たちも固まっていた。ゼロに愛していると言われたトーレは顔を真っ赤にして口をパクパクさせる。しかし、トーレのそんな様子をお構いなしにゼロはステラをトーレの首筋に当てる。

「はい、俺の勝ち！」

「えっ？・・・なっ！ひ、卑怯だぞ！」

やっと我に返ったトーレ。ゼロに今は無しだと抗議するが、ゼロは受付なかった。

「くううう・・・」

トーレが項垂れているとゼロがトーレの頭を撫でた。

「ごめんって。トーレが強くなっていたから、こんな方法を使ったんだ。」

「本当か？なら、許す。」

これにて、トーレとゼロの模擬戦が終了したのであった。

第8話 久しぶりの我が家（後書き）

はい、第8話でした。どうもTheaterです。

連続更新です。今日は後1話更新しようかと思っています。

ここで、ファミリアドールのことで補足をします。前に人形はゼロが操っていたと言いましたが、自分の魔力を使った場合、ドールにはある程度の自由意思を持たせることができます。ただし、記憶、経験などは共有することとはできません。

そして、密度の高いドールを創るのは、3体までが限界です。それにドールを出している間は、少なからず魔力を消費し続けています。つまり、ドールが六課にいた間ずっと魔力を少し消費しています。

消費する魔力は微量なので魔力切れは起こしません。

では次回、第9話で会いましょう。

第9話 意外な真実（前書き）

ティアナが、がんばる理由。それは兄のためだった。

そして、それに意外な形でゼロが関わる。

第9話 意外な真実

トーレとの模擬戦が終わり、次にノーヴェとやろうとノーヴェの方の向くと何やら不穏な雰囲気漂っていた。

「・・・」

「ノーヴェ・・・」

なぜかゼロをおもいつき睨んでいるノーヴェ。明らかに怒っている様子にゼロは冷や汗をかき始めた。

「ゼロ兄・・・」

「な、なんだ。」

「倒す・・・」

そう言い、ノーヴェは構えた。そして、ゼロとノーヴェの模擬戦が始まった。

結果から言えば、模擬戦はゼロの勝ちだった。トーレならともかく
ノーヴェではまだ、ゼロに勝つのは難しいようだ。

「さてと、それじゃ俺は行くよ。おまえたちはちゃんと訓練してお
けよ。」

「「はい。」」

妹たちにそう言い残すと訓練場を出たゼロ。そして、そのままスカ
リエッティの下へと向かった。

そして、一方ドールの方は、本体のゼロに報告を入れた後、なのは
たちを探し始めた。そして、ガジェットとの交戦の跡地を周ってい
ると目的のなのはを見つけた。そばには、他にフェイトと見知らぬ
男性がいた。

「なのは、フェイト。」

「あっ！ゼロ君。」

「ゼロ！」

ゼロは、なのはたちに声を掛けながら近づいて行った。

「体は、大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫。心配かけた。」

「よかった。」

「えっと・・・なのは。こちらの方は？」

なのはたちと一緒にいた男性がなのはにゼロのことを聞いた。

「あ、うん。こちらは新しく六課に配属なったゼロ・レスティアさんだよ。」

「初めまして、ゼロ・レスティア一等陸尉です。」

「こちらこそ、ユーノ・スクライアです。」

ゼロとユーノは握手をした。

「ユーノ君はね。私とフェイトちゃんの幼馴染なの。」

「なるほど、だから親しげだったんですね。」

「ユーノはね、無限書庫で司書長をやってるんだ。」

フェイトが言った。

「そう言えば、かなり優秀な若い司書長がいると聞いたことがあるな。すごいですね。」

「い、いや。そんな僕なんて・・・」

ゼロに褒められたユーノは照れていた。

「それで、ユーノ先生はなのはとフェイト。どっちが好きなんですか？」

「えっ！」

ゼロはユーノの耳元でそんなことを聞いた。

「ど、どっちで・・・その・・・あの・・・」

ユーノは、慌てていて呂律が回っていなかったが、その視線はなのはに向いていた。

「ふふっなのはですか。」

「ぎくっ」

「がんばってください。ユーノ先生。」

ゼロは、ユーノの肩をポンポンと叩いて応援した。

「ねえ、2人で何を話しているの？」

「何でもありません。何でも。」

「ふん。」

特に興味がないのか深く追求しては来なかった。

「あっなのは。ユーノの護衛交代してもらってもいいかな？」

「うん、了解。」

「エリオ、キャロ。現場検証手伝ってもらっていいかな？」

フェイトは、近くでガジェットの残骸を見ていたエリオとキャロを呼んだ。

「は、はい！」

「今いきます。」

呼ばれた2人は急いでフェイトの下へと来た。

「ゼロもいいかな？」

「もちろんです。」

「なのは、それじゃあまた後で。」

「ユーノ先生、グットラック！」

ゼロは、親指を立てて行ってしまった。

「どういう意味ユーノ君？」

「えっ！いや、わからないな。」

そして、それからみんなで捜査が行われ終わったところには空があかね色に染まりかけていた。機動六課一同は隊舎に戻ってきて今は、休息を得ている所だった。しかし、隊長陣とシャーリーはヴィータに話があると言われ集まっていた。

「訓練中からときどき気になってたんだよ。ティアナのこと。」

ヴィータの話とはティアナの事だった。

「強くなりたいなんてのは若い魔導師ならみんなそうだし、無茶も多少するもんだけど、ときどきちよつと度をこえている。あいつ、ここに来る前に何かあったのか？」

ヴィータは、なのはに聞いた。すると、なのはは難しい顔をした。そして、なのははモニターを操作して1人の男性のデータを出した。

「誰だこいつは？」

「ティード・ランスター。ティアナのお兄さんだよ。」

それを聞いたヴィータはそれとなんとの関係があると言いたげな顔を

した。

「亡くなったんだよ、ティアナが10歳の時にね。」

それを聞いてヴィータたちは黙った。

「当時の階級で一等空尉、所属は首都航空隊、享年21歳。」

「結構なエリートだな。」

「そう、エリートだったからなんだよね・・・」

フェイトが、語り始めた。

「ティード一等空尉が亡くなった時の任務。逃走中の違法魔導師に手傷を負わせて後少しで捕まえらるってところで違法魔導師の仲間らしき人物が来て・・・」

「それで、地上の陸士部隊に協力を仰いで追っていた違法魔導師はその日のうちに取り押さえただけど、仲間らしき人には逃げられて。」

「その件について心無い上司がちょっと酷いコメントをして、一時問題になったの。」

そして、そのコメントの内容を聞いて、ヴィータ達は何とも言えない気持ちになった。そして、今まで黙って聞きたいたドールがその場を後にした。

「・・・」

ドールは、今の話を聞いて本体のゼロの記憶からティードに関する記憶があったので頭の中で再生した。



その日、スカリエッティが、違法魔導師からある物を受け取る取引があった。そして、その物の取引にゼロが行くことになっていた。だが、取引の日、違法魔導師が管理局に追われていると言う情報が入った。仕方なしにゼロはスカリエッティの命令で物の回収に行くことになった。

「まったく、苦勞をかける。」

ゼロは急いで違法魔導師の下へ向かった。

「あそこか！」

ゼロが見ると、違法魔導師が管理局に追われているのが見えた。違法魔導師はすでに逃げる力がほとんど無い状態でいつ捕まってもおかしくなかった。

「しょうがない・・・」

ゼロは、溜息を吐いて違法魔導師を助ける事にした。

「観念しろ！もう、逃げられないぞ。」

「はあはあ、誰が捕まってたまるか！」

違法魔導師は必死に逃げる。だが、ついに追いつめられて絶対絶命だった。

「これで終わりだな。」

ティーダが、違法魔導師を捕まえようとした瞬間

「悪いが、そうはいかない。」

「なっ！」

突然、空からスフィアが降り注いできた。それをティーダは軽く避けた。

「誰だ！」

「お前に言う必要はない。おい！」

「は、はい！」

「物を寄こせ。」

ゼロは、違法魔導師から物を取り上げた。

「あ、あんた！取引相手か？」

「ああ、これが報酬ださっさと行け。」

「助かった。恩に着る。」

そう言って、違法魔導師は行ってしまった。

「くっ！ま、待て！」

ティーダが追いかけようとするが、ゼロがそれを防いだ。

「邪魔をするな。」

「追わせはしない。」

そして、ゼロとティーダが戦闘を開始した。しかし、それはすぐに終わった。ティーダは至るところに傷を負い倒れていた。

「かはっ・・・」

「強いと思ったが、気のせいだったか。」

ゼロは、ステラをティーダに向けた。

「はあはあ・・・頼む・・・助けてくれ・・・俺には・・・守らなきゃいけない妹が・・・いるんだ・・・」

「俺にそんなことは関係ない。じゃあな。」

ゼロはステラを振り下ろした。



「まさか、あいつの言っていた妹ってのがティアナだったとはな・・
・」

本体のゼロの記憶から出てきた意外な事実。

「これも運命と言うやつなのか。」

第9話 意外な真実（後書き）

はい、第9話でした。どうもTheaterです。

今日、3話目です。昼から書いて疲れました。

そして、ゼロがティアナの過去に関わっていると言う意外な真実。
一体ゼロは
何者なんだ？

それと、前の話のあとがきで記憶は共有しないと言いましたが、それはあくまでドールが経験した事や記憶を本体に伝わらないと言うことで本体が経験した
事や記憶は人形を創る時には引き継がれます。

では次回、第10話で会いましょう。

第10話 嵐の前の予感（前書き）

ミスショットを気にして無茶な練習をするティアナ。

それを聞いたゼロは・・・

第10話 嵐の前の予感

「と言うわけだ。」

『なるほど、あの時の・・・』

自室に戻ったドールは、ゼロにティアナの事とティーダの事を話した。

「どうする？」

『ふん・・・しばらくティアナを見張っておけ。』

「・・・？。なぜだ？」

ティアナを見張れと言うゼロの命令にドールは、首を傾げた。

『恐らく、ティアナは、兄の・・・ティーダ・ランスターの意志を継ぐと焦ってるんだろう。たぶん、無茶をして近い内に何か起きるな。』

「何か？」

『ああ、だから無茶をしないよう。見張っておけ。』

ゼロが、そう言うのとドールは可笑しくなって笑い出した。

「くくく・・・」

『何を笑ってるんだ？』

「俺たちは、あいつらの敵だぞ。なのに、敵の心配か。それとも、罪滅ぼしのつもりか？」

ドールの言う事はもつともだった。敵でありながら、その身を心配するゼロ。普通ならあり得ない事だ。

『まさか、仮初めとは言え今は、機動六課の隊長補佐だ。少しは手伝ってやるさ。』

「わかったよ。任せろ。」

『ああ、よろしく。』

通信を切るとドールはすぐに行動に出た。部屋を出て、ティアナがいるであろう場所に向かった。案の定、ティアナはドールの思った場所にいた。

「はあ！はあ！はあ！」

なのはに午後の訓練は無しと言われたはずなのに、1人で黙々と自主練をしていた。少し離れた所からその様子を見ていたドール。すると、ふいに肩を叩かれた。

「旦那、何してるんですか？」

「ヴァイスか。」

ドールが振り向くとそこには、機動六課ヘリパイロットのヴァイス・グランセニックが立っていた。

「お前と同じだよ。で、どのくらいやってるんだ？」

「そうですね。休みなしで、4時間ってところですかね。」

ヴァイスが、そう答えるとドールは、溜息を吐きそうになった。本体の言うとおり、無茶をしていたようだったからだ。

「無論、俺も止めたんですけどね。聞く耳持たんって感じで・・・」

ヴァイスが、やれやれと言う感じで言った。それを聞き、ドールはティアナの方に歩き出した。

「はあ、はあ、はあ・・・」

休みなしで4時間ずっと訓練していたティアナ。さすがに、疲労の色が見える。だが、ティアナは訓練を止めようとしていなかった。

「ティアナ。」

「えっ？」

ティアナが、声のした方を見ると、そこにはドールが立っていた。

「ゼロさん？」

「午後の訓練はなかっただろう。なのに1人で自主練か。」

「はい・・・」

ティアナは、少し俯き加減で返事をした。

「ミスショットの事なら、気にするなと言ったはずだが・・・」

ドールは、ティアナを諭すように言う。

「そんなふうは無理やり詰め込んだって、何にもなんねえぞ。」

「それでも!」

ティアナは、ドールの言葉を遮って言う。

「それでも、詰め込んで練習しないとうまくななんないんです。凡人なもんで。」

そう言って、ティアナは練習を再開した。

「凡人か・・・あまり、無茶はするなよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ドールは、ティアナを止めるのを諦めその場を後にした。

「いいんですかい?」

「おまえの言うとおりに言っても無駄だった。とりあえず、ティアナがこれ以上、無茶をしないように見張るくらいしかない。」

ドールは、ヴァイスにそう言って部屋に戻って行った。

（本体の言う通り、あれじゃ近い内に何か起きるな。）

ドールは、本体の確信めいた言葉が現実には起きるような気がしていた。

第10話 嵐の前の予感（後書き）

はい、第10話でした。どうも、Theaterです。

次くらいで、ゼロは六課に戻したいなと思っているこの頃です。

いい加減、人形で進めるのも限界に近づいているので、できたら次回、ゼロを

六課に戻します。

では次回、第11話で会いましょう。

第11話 記憶と裏（前書き）

それは、懐かしい夢。

そして、裏の真実。

第11話 記憶と裏

ドールから、ティーダ・ランスターの事に関する通信が来る数時間前。

「ドクター、入りますよ。」

ゼロは、研究室のドアの前から、スカリエッティに話しかけた。

「ああ、入りたまえ。」

スカリエッティから入る許可を得たゼロは研究室の中に入った。中には、先ほどと同じようにウーノとクワットロもいた。

「それでは、ゼロ。さっそく始めようか。」

「はい。」

ゼロは、頷き奥の方の部屋に移動した。そして、そこには調整用のポットがいくつも並んでいた。ゼロはそのポットの一つの中に入った。

「では、これからゼロの定期調整を始める。」

ゼロは、調整が始まり目を閉じた。そして、しばし深い眠りに就いた



「レスティア一佐。総員、戦闘準備完了いたしました。」

「わかったわ。ご苦労様。」

「はっ！」

長く伸びたブロンドの髪をなびかせながら、1人の女性管理局員、ルナ・レスティアが眼前の敵を眺めていた。目の前には、数百はいると思われる機械兵たち。

「平和の道は長いわね。」

ルナは、目を閉じ大きく息を吸って吐いた。そして、キッと目を開いて叫ぶ。

「総員！突撃！」

ルナの掛け声に管理局員たちが、一斉に突撃して行った。数百の機械兵に対して管理局は30人しかない。客観的に見れば勝つのはまず不可能に思われる。

しかし、局員に恐れはなかった。なぜなら、ここにはルナ・レスティアがいたからだ。

「私も行ってくる。」

「お気をつけて。」

本来、指揮官であるはずのルナが前線に出るのは、よほどの事が無い限りありえない。それなのに、ルナが前線に出るのは訳がある。それは、彼女のレアスキルにあった。

「ファミリアドール！」

ルナは両手を横に広げてそう叫ぶと一瞬のうちに影の使い魔の大群が姿を現した。その数はおよそ機械兵と同等だった。

「行くぞ！」

ルナと使い魔の大群は、機械兵に向かって突撃をする。使い魔のレベルは、Aクラスとほぼ同じ。ただの機械兵を相手にするには十分なほどだ。

「はああああ！」

次々に機械兵を倒していくルナ。その姿は、さながら戦場に舞う戦乙女と言った感じだった。そして、1時間ほど経過した頃、戦場に機械兵は一体も立ってはいなかった。

「今回も快勝でしたね。レスティア一佐。」

「・・・そうね。」

戦いに勝利したはずだが、ルナの顔を晴れてはいなかった。ただ、黙って戦いが終わったその光景を眺めていた。



（ルナ・・・）

調整ポットの中でゼロは、深い眠りから目覚めた。ポットに入ってから大体、2時間ほど経っていた。

「起きたかねゼロ。調整は終わったよ。」

「はい、ドクター。」

ゼロは、調整用ポットから出てきた。

「どうだね？調子は？」

「特に問題はありません。」

手や足を動かしたりしてみたが、特に異常は見られなかった。

「それは、よかった。では、さっそくだが頼みたいことがある。」

「はい。」

スカリエッティは、空間モニターを出した。そこには、管理局員の

男が映っていた。

「この男は？」

「この男は、レオン・ロックハート二等陸佐。陸士103隊の部隊長です。」

一緒にいたウーノが説明に入った。

「この男は、クライアントと対立している人物らしいのですが、最近になってクライアントの周りを探っている様子があるようです。」

「つまり、弱みを握ろうとしているってこと。」

そばで聞いていたクワットロがおもしろそうに言った。

「そこで、クライアントからこの男を始末してくれないかと依頼がきています。」

「頼めるかなゼロ。」

「わかりました。」

ゼロは、迷わず了承した。

「目標は、現在隊舎から地上本部へと移動しているようです。」

「了解。では、行ってきます。」

ゼロは、転移魔法を発動させ行ってしまった。



「ふん、何とかレジアスの裏が掴めないか・・・」

部下の運転する車に乗り、地上本部へと向かっている陸士103隊の部隊長レオン・ロックハート。

「おい、例の調査はまだわからんか？」

「すみません。未だ掴めていません。」

「急げ！何としてもレジアスの裏を掴むのだ！」

運転している陸士103隊の諜報員のマーク・レイリーにレジアスの調査を急がせた。レオンは、なかなかレジアスの尻尾が掴めない歯痒さに苛立っていた。そして、後少しで地上本部と言うところで車がいきなり急ブレーキをかけた。

「な、なんだ！いきなり！」

「す、すみません。しかし、あれを・・・」

「ん？」

車の中からマークが指差した先には、黒いフードを被った男が立っていた。

「なんだあいつは？おい。」

「は、はい。」

マークは、車から出てフードの男の下まで行った。

「ちょっと！そのあなた。車道にいるなんて危ないですよ。早く退いて！」

マークが、そう言って注意するがフードの男はピクリとも動かなかった。

「ちょっと、聞いてるんですか？」

「あの車に乗っているのは、レオン・ロックハート二等陸佐で間違いないか？」

フードの男は、マークの言葉を遮り、言った。

「えっ？ ああ、そうですが・・・」

マークがそう言うと、フードの男はその横を通り抜けようとした。

「ま、待ちなさい！」

マークは、フードの男の腕を掴んだ。しかし、その手をすぐに離れた。

「えっ？」

いや、離されたと言った方が適切かもしれない。フードの男の腕を掴んでいたマークの右腕は、マークから離れていたのだから。

「うわあああああああ！」

血飛沫が上がる右腕を押さえてマークは、悲痛の叫びを上げた。

「腕が・・・僕の腕が・・・」

右腕を押さえて膝をついたマーク。必死に痛みに耐えていると腕を切断したフードの男がマークの目の前に来た。

「あ・・・あああ・・・」

恐怖で身動き1つできないマーク。次の瞬間、マークの一生が幕を閉じた。

「な、なんだ。あいつは・・・」

車の中で今の一部始終を見ていたレオン。急いで車から外に出た。

「貴様！何者だ！」

「お前に答える義務はない。」

「くっ！」

レオンは、デバイスを起動させようとする。しかし、それは叶わなかった。

「何だ？体が言う事を聞かない・・・」

レオンの体はまるで何かに縛られているかのように自由がきかなかった。

「貴様・・・何をした・・・」

「それも、答える義務はない。」

フードの男は、自らのデバイスを振り上げた。

「く、くそーーーー！」

フードの男のデバイスは、レオンの命をいとも簡単に奪った。そし

て、仕事を終えたフードの男、いやゼロ・レスティアはフードを脱いだ。

「任務完了。」

ゼロは、無表情で機械的に言うとその場から姿を消した。

第11話 記憶と裏（後書き）

はい、第11話でした。どうも、Theaterです。

今回は、ちょっとだけゼロの過去をやりました。

正確にはゼロではなく元となった人物の過去ですけどね。一体、彼女は誰なんだ。どうしてゼロは生まれたんだ。

この辺は、まだ明らかにしません。ぶっちゃけ考えてないだけだったりして

そして、ゼロの裏の顔。全然キャラが違いますよね。表とはえらい違いだ。本当はもっと格好よくしたいですけど、そこまでの腕がない・・・

では次回、第12話で会いましょう。

番外編 妹たちとの出会い2（前書き）

今回は、ナンバーズの次女、ドゥーエです。

番外編 妹たちとの出会い2

『兄さん、少しよろしいですか？』

「どうした？ウーノ。」

訓練場で1人練習をしていたゼロにウーノから通信が来た。

『ドクターが、お呼びです。』

「またか・・・何か嫌な予感がする。」

ゼロは、気が進まないまま研究室に向かう事にした。

「ドクター、来ましたよ。」

ゼロは、研究室のドアを開けて中に入った。

「ん？」

中に入ると、そこには見知らぬ女の子がいた。少し、高い背に若干霞んだ金髪。ゼロの事を見るとニヤリと笑いそばに寄ってきた。

「あなたが、ゼロ？」

「あ、ああそうだよ。」

「ふん。」

女の子は、ゼロの周りを回りながら、いろいろ観察している様子だった。

「えっと・・・何かな？」

「んん。」

女の子は、一周し終わると、ゼロの正面に立ち、ニコツと笑って一言。

「不合格！」

「えっ？」

女の子は、そう言うど研究室を出て行ってしまった。研究室に取り残されたゼロは訳が分からず？を浮かべた。

「はははは、いや実に面白い物を見せてもらったよ、ゼロ。」

奥の方から、スカリエッティが出てきた。

「ドクター、あの娘は誰ですか？」

「うん、彼女はナンバーズ2、ドゥーエだ。君とウーノの妹だよ。」

スカリエッティの言葉にゼロは、溜息を吐く。

「あなたは一体、何人妹を造る気ですか・・・」

「私の計画のために必要だからね。」

「はあ、それにしても、不合格ってなんですか？」

ゼロは、ドゥーエの言った不合格の事が気になっていた。

「ごめんなさい。兄さん。」

「ウーノ。」

なぜか、スカリエッティの後ろにいたウーノが謝ってきた。

「ドゥーエは、兄さんを試しているんです。」

「試す？」

「はい。本当に私たちの兄に相応しいかどうかを。」

ウーノの説明を聞き、ゼロは笑った。

「ふふっ、なるほど。わかった、じゃあ、ドゥーエに早く認めてもらわないと。」

ゼロは、そう言う研究室を出て行った。

「ドゥーエ！どこに行った？」

「あら、何かしらゼロ？」

ドゥーエを探していたゼロ。家の中を探していると思いのほか早く見つかった。

「ウーノから聞いたよ。俺を試してるんだって？」

「へえ、聞いたんだ。それで、どうするの？」

ドゥーエは、怪しい笑みを浮かべて聞いてきた。

「何としても認めてもらうさ。」

「ふん。それなら1ついい考えがあるわ。15分したら研究室に来て。」

「わかった。」

ドゥーエは、そう言って研究室の方に行ってしまった。

「さて、どんな事をやるんだか・・・」

ゼロは、ドゥーエの言う通り、15分の時が過ぎるのを待った。

「そろそろだな。」

ドゥーエが、去ってから15分が経ち、ゼロは再び研究室に向かった。

「入りますよ。」

ゼロが、研究室のドアを開けた。すると、そこにあり得ない光景が広がっていてゼロは驚愕してしまった。

「「お待ちしてました、兄さん。」」

「ウーノが2人？」

そこには、ウーノが2人いたのだ。

「な、なんで・・・」

「ドゥーエのISだよ。」

スカリエッティが、ゼロのそばに来た。

【IS】

正式名称、インヒューレントスキル。戦闘機人が有する、魔力以外の力を原動力とした特殊技能の総称。

「IS・・・」

「ドゥーエの使う、ISは、ライアーズ・マスク。自身の体を変化させる変身偽装能力だよ。」

スカリエッティは、自慢げに言ってきた。

（変身能力か・・・だとすれば・・・）

ゼロは2人のドゥーエを見て言う。

「つまり、どちらがドゥーエかを当てればいいんだな？」

「「そうよ。」」

2人のウーノは、声をユニゾンさせて言う。

（一見ただけじゃ、まったく同じだな。さて、どうするか・・・）

ゼロは、どうすれば見分ける事ができるか考えた。

「うゝん・・・」

「分からない」

「かしら」

「兄さん。」

挑発するように言ってくる2人のウーノ。

（くっ！どうすれば・・・あ！そうだ。）

ゼロは、何かを思いついたようだった。しかし、ゼロはまだ知らなかった。この作戦を実行した事を激しく後悔することになることを。

「ウーノ！」

「何かしら？」

「最近、老けたな。」

その時、研究室の時間が止まった。そして、2人のウーノの片方が明らかに怒っているのをゼロは見逃さなかった。

「そつちが、ドゥーエだ。」

ゼロは、啞然とした顔をしているウーノの方を指さした。

「正解よ。」

ウーノの姿から、元の姿に戻ったドゥーエ。

「俺の勝ちだな。」

「そうね。」

ドゥーエは、少し悔しそうな顔をした。

「それじゃあ、俺の事を認めてくれるな。」

「それより、あっちはいいの?」

「えっ?」

ドゥーエは、ゼロの後ろを指さした。ゼロは後ろを振り向くとそこは、修羅がいた。

「兄さん・・・私の事そんなふうに見ていたんですね・・・」

「い、いや。違うぞウーノ。あれは、見分けるために言ったただけで・・・」

「でも、普段からそう思ってないと、そんなことは思いつかないですよね・・・」

ウーノからとてつもないオーラが漂っていた。

「お仕置きです。」

「いやーーーーーーー!」

ゼロは、ウーノに連れていかれた。

「ふふっ。」

その光景を見てドゥーエは、笑っていた。

「どうだね、ゼロは?」

「認めてあげてもいいわ。」

ドゥーエは、クスクスと笑いながら言った。

「これからよろしくね、兄さん？」

番外編 妹たちとの出会い2（後書き）

はい、番外編でした。どうも、Theaterです。

今回は、ドゥーエとの出会いをやりました。

ウーノの時と違いドゥーエは最初から認めていたわけじゃなかったようです。

やっぱり恒例の通りキャラが、違いますね。

まあ、ドゥーエは本編にすでに登場してますし、こんなもんですね。

最後のあたり、ドゥーエよりのウーノの方が目立っていたのはどういう事なん

でしょうかね。実際に修羅化したウーノって怖いと思います。

では、次回の番外編で会いましょう。

第12話 予定変更(前書き)

事件の捜査をするフェイトの代わりにライトニングの

訓練をすることになったドール。

第12話 予定変更

一夜が明け、今朝早く作戦室に隊長陣、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、ドール、そして部隊長のはやてが集まっていた。

「はやてー、こんな朝早くからなんだ？」

朝早い呼び出しにみんな不思議な顔をしていた。その中でヴィータは、眠そうな目を擦りながら、まだ半分寝てるかのようにだった。

「うん・・それがな。昨夜、管理局員が殺害される事件が起こったんよ。」

「なっ！」

はやての言葉にみんなが動揺する。そのおかげか、さっきまで眠そうにしていたヴィータも完全に目が覚めたようだった。

「どういうことだよ、はやて！」

「それに関しては、フェイトちゃんからや。フェイトちゃんお願いや。」

「うん。」

フェイトは、前に立ちモニターを操作して1人の男性局員のデータを出した。それを見た一同は誰だ？と言う顔をしていた。

「この人は？」

「レオン・ロックハート二等陸佐、今回の事件の被害者だよ。」

モニターを操作しながらレオンについての説明に入るフェイト。

「ロックハート二佐は、昨夜、陸士103隊の隊舎から地上本部に向かう予定になっていた。」

はやてを始めとする隊長陣はフェイトの説明を真剣な表情で聞いていた。ただ、1人を除いて。

「それで、同じ103隊のマーク・レイン陸曹の運転する車で地上本部に向かった。そして、その途中で襲われたと考えられるみたい。」

「フェイトちゃんその、一緒にいたレイン陸曹はどうなったの？」

なのはは、フェイトに聞く。それによって全員がフェイトに注目す

る。すると、フェイトは黙って首を横に振った。それで、どうなったのかは言うまでもない。

「犯人に関する手掛かりは見つかったのか？」

シグナムが、続いて聞く。

「現場には、何一つ無かったみたい。」

犯人は、よほど手慣れた者なのか、手掛かりになるような物は何もなかった。

「そんでな、今朝、全管理局員に警戒するよう通達があったんよ。」

「警戒？」

「そうや。」

はやてが、言うには今回の事件は、ロックハート二佐個人に対する恨みの犯行か、それとも管理局全体に対する恨みの犯行が分かっていない。

それによって、全管理局員に警戒態勢を取るよう通達があったということらしい。

「せやから、みんなも注意してや。」

「おう、わかったぜ。」

「了解しました、主。」

「うん、はやてちゃん。」

ドール以外のみんなが返事をした。

「それと、ゼロ。」

「はい？」

黙っていたドールにフェイトが、話かけてきた。

「私も、この事件の捜査をする事になったから、ライティングの事
お願いしてもいいかな？」

「はい、もちろんです。」

フェイトは、ゼロにライティングの事をお願いしてきた。それも、
当然のこと事件の捜査に出ればエリオとキャロの訓練を見る時間が、
かなり減ってしまう。

その為、ゼロにだけ押し付けるのは心苦しいが、仕方なしにお願いすることにした。

「それじゃあ、話もこれで終わりや。みんな解散！」

はやての一声でひとまず、解散になった。そして、なのは、ヴィータ、ゼロの3人は、朝の訓練のため訓練場に来た。すると、訓練の時間にはまだ早いにも関わらずフォワードの4人は揃っていた。

「みんな、早いね。」

なのはが、フォワードの4人に声を掛けた。すると、軽くアップトレーニングをしていた4人は、なのはたちの所まで走ってきた。

「」「おはようございます！」「」

「おはよう、みんな。」

挨拶を済ませ、さっそく訓練に入る。そして、今日はスターズとライトニングに別れそれぞれ訓練をすることになっている。ドールは、エリオとキャロを連れて、訓練に入る。

「じゃあ、2人ともアップはしたと思うけど、とりあえず隊舎の周

りを一周してきて。」

「はい！」

ドールの指示でエリオとキャロは、2人仲良く走り出した。

「じゃあ、今のうちにだな。」

「ああ。」

ドールの後ろから声が聞こえたと思うと、そこにはゼロがいた。今朝、はやてから召集がかかるより前にゼロからドールに通信が入っていた。

数日、六課の事はドールに任せて置く予定だったのだが、急に予定を変更してゼロが六課に戻るようになったのだ。その時、妹たちが少し、ぐずったのは言うまでもない。

「それで、俺のいない間の事は？」

ゼロは、ドールから自分がいない間の事を聞く。主にそれと言った事はなかったが、フェイトからライトニングの事を任された事くらいだとドールが言う。

「なるほど、わかった。それじゃあな。」

ゼロが、指をパチンツと鳴らすとドールは光の粒となって消えた。
そして、その直後にエリオとキャラロがランニングを終え戻ってきた。

「ゼロさん、終わりました。」

「ました。はあはあ・・・」

戻ってきた2人をゼロは見た。すると、エリオは余裕な感じだったが、キャラロが息を切れさせていた。

「キャラロは、もう少し体力をつけないとダメかな。」

「は、はい・・・はあはあ・・・」

それから、10分ほど小休止をして、訓練を開始する。しかし、ゼロは悩んでいた。これまで人に教えると言う事をあまりしたことがないゼロ。

ここに来る前、妹たちには、少し教えたこともあるが、それでも管理局員に教えるようなものではない。なので、ゼロができることはたった1つしかなかった。

「訓練だけど、俺が教える時は、模擬戦をしてもらう。」

「模擬戦ですか？」

ゼロが、訓練内容としたのは模擬戦だった。その全容は、まずエリオとキャロの2人でゼロと戦うと言うもの。前衛がエリオ、後衛がキャロと言った感じで、2人のコンビネーションを上げる事を目的とした内容だ。

「今日は、最初だし軽く行くぞ。」

「はい！」

そうして、ゼロ対エリオ&キャロの最初の模擬戦が始まった。

第12話 予定変更（後書き）

はい、第12話でした。どうも、Theaterです。

無理矢理にゼロを六課に戻しました。話の前後が変になっているので謝罪します。

これからの話ですが、魔王が出てくるまで、しばらくだらだらとやりたいと思います。

では次回、第13話で会いましょう。

第13話 ゼロの訓練1（前書き）

ゼロとエリオ&キャロの訓練が始まる。

第13話 ゼロの訓練1

朝の訓練、そこでゼロとエリオ&キャロの初めての模擬戦が始まっていた。

「さあ、どこから来ていいぞ。」

ゼロが、挑発するようにエリオとキャロに向かって言う。それに対してエリオとキャロはと言うと、まったく動けずにいた。今日、初めてゼロと対峙したエリオとキャロ。そこで、初めてゼロのすごさがわかった。

（すごい、まったく隙がない。）

エリオは、ゼロを観察しながらそう思う。そして、どう攻めるかも同時に考えていた。

へキャロ、どうする？

へただ、突っ込むだけじゃダメだと思う。

念話でエリオとキャロは、どう動くかを相談する。しかし、いつまでも動かないエリオとキャロに業を煮やしたゼロが言う。

「来ないならこっちから行くぞ。」

ゼロは、中腰に構え、足に魔力を集中させる。そして、ゼロは視線をキャロに合わせ、魔力を一気に解放させた。

それは、まさに一瞬の出来事だった。エリオが、ゼロから目を離さず見ていたはずだった。しかし、ゼロは一瞬のうちにキャロの後ろに移動し、キャロの頭をポンポンと叩いていた。

「ほら、どうした？本番なら、キャロは大怪我してるぞ。」

ゼロの言ったことエリオは悔しそうな顔をする。まだ、六課に来て間もないエリオにとっていくら、なのはの教導を受けているとは言え、ゼロの動きが見えるようになるのはまだ早い。

それは、エリオ自身もわかっている事だ。だが、それでも悔しいのものは悔しいのだ。

「ゼロさん！もう1回お願いします。」

エリオは、ゼロにもう1回とお願いしてきた。その、真っ直ぐな目を見てゼロは思わず、微笑む。

「ああ、良いぞ。」

そして、再び模擬戦が始まった。

「はい！今朝の訓練はここまで。」

訓練が始まってから、2時間が過ぎた頃、なのはが訓練の終了を告げる。そして、ゼロと模擬戦をしていたエリオとキャロはと言うと。

「ううう・・・」

「はう・・・」

かなり落ち込んでいた。結果を言えば、あれから何回もエリオとキャロはゼロに挑戦したのだが、1回も勝つどころか、一発も当てることすらできなかった。

ゼロが、見るに2人のコンビネーションは、悪くないと言っているものだった。しかし、何がダメかと言えばまだ、経験が少ない事だろうとゼロは思っていた。

「そう、落ち込むなってエリオ、キャロ。」

2人が、あまりにも落ち込んでいるので、ゼロは慰めた。

「でも、一発も当てる事ができませんでした・・・」

なぜ、エリオとキャロがこんなに落ち込んでいるのかと言うと。普通で言えば、2人がゼロに勝つ事はまず、できないと言っている。なので、ゼロは条件をつけて模擬戦をしていたのだ。

その条件とは、レアスキルの使用を禁止、そしてデバイスを使わないと言うものだった。これだけの条件の下でも一発も当てる事ができなかった。これほど落ち込んでいるという訳だ。

「ほら、エリオ。いつまでの落ち込んでないで、シャワー行くぞ。」

「は、はい！」

ゼロは、エリオの背中をバシッと叩くと汗を流すためにシャワーに向かった。

「ゼロさん。」

「何だ？」

「ゼロさんは、どうやってそんなに強くなったんですか？」

ゼロとエリオは、2人でシャワーに入る。

そしてゼロが、髪を洗っていると、エリオがそんな事を聞いてきた。ゼロは、エリオの質問に対して考え出した。

「そうだな・・・あえて言うなら、守りたいものがあつたからかな。」

「守りたいもの？」

ゼロは、エリオにそう答えた。そしてエリオは、そんなゼロの答えを守りたいものが気になってゼロに聞くことにした。

「その、守りたいものって何ですか？」

「んー、内緒。」

ゼロは人差し指を口元に持っていていき内緒と言って教えようとはしなかった。

そして、シャワーを出たゼロとエリオは女性陣が出てくるのを待っていた。しかし、女性陣のシャワーは、長くなかなか出てこなかった。

「遅いですね・・・」

「女の子ってのは、こういうもんだよ。」

なかなか出てこない女性陣を待っているのをエリオは飽き始めていた。それをゼロが、女の子はこういうものだと言って待っていた。

「お待たせ。」

「お待たせしました。」

それから、10分ほどして、女性陣が出てきた。ちなみにここにいるのは、ティアナ、スバル、キャロの3人でなのは、ヴィータの隊長陣は、別のシャワー室に行っている。

「それじゃあ、行くか。」

全員揃ってところで、みんなで朝ごはんを食べに食堂に向かい始めた。

そして、食堂に着くとそこには、六課の隊員やスタッフが結構いたが、そんなに混んではいなかったたので、席を取るのには苦労しなかった。

「それでは、いただきます。」

ゼロとフォワードの4人は、席に着き朝食を摂り始めた。4人掛けの席にフォワードの4人が仲良く座り、その隣の席にゼロが1人で座っていた。

「それにしての相変わらず、すごい量だな。」

ゼロは、フォワードの4人の席を見て呆れていた。そこには、山盛りの料理が大量に並んでいた。

そして、それを消費しているは、スバルとエリオだった。山盛りの料理を次々に完食していく光景にゼロは圧倒される。

（戦闘機人やクローンってあんなに食べるものだっけ・・・）

自分自身も戦闘機人であるはずのゼロが疑問に思うほど、その光景は驚愕のものだった。

「よく、そんなに食べられるな？」

「このくらい全然ですよ。それより、ゼロさんはそれだけで足りるんですか？」

ゼロが、食べているのは、トースト一枚に牛乳と言うシンプルなものだった。確かに成人男性で朝ごはんがこれだけと言うのは、少々少ないと思われる。

「んー、本当は、朝は食べない派なんだけどね。」

「ダメだよ、ちゃんと食べないと。」

そこに、トレイを持った、なのはたちがやってきた。ゼロの座っていた席なのは、フェイトが座り、そこに隣の席にはやて、シグナム、ヴィータ、シャルが座った。

「男の子がそれしか、食べないなんて力がでないよ。」

「こういう、体質なんです。」

なのはの言う事にゼロは、そう返した。

「それに、あれを見てるとそれだけで、お腹いっぱい・」

「ああ・・そだね。」

ゼロの視線の先には、スバルとエリオがいた。それを見た、なのは納得した様子だった。そして、それからみんなが朝食を食べ終え

て、各自仕事に向かうのであった。

第13話 ゼロの訓練1（後書き）

はい、第13話でした。どうも、Theaterです。

ゼロが、エリオとキャロを鍛えています。敵なのがいいのかこれで？

とりあえずは、こんな展開であと数話・・・いや、1話かな？で行きたいと思っています。

では次回、第14話で会いましょう。

第14話 ゼロの訓練2（前書き）

ゼロとエリオ&キャロの訓練の風景

第14話 ゼロの訓練2

初めての模擬戦訓練から数日。

模擬戦を繰り返すに連れてエリオとキャロに少しずつ成長が見られてきた。一戦に一度はゼロに攻撃を当てる事ができるようになってきていた。

「はああ！」

「遅いっ！」

突進してきたエリオの手首を掴みゼロは、そのままエリオを組み伏せた。ゼロは、組み伏せたまま頭を押さえてつけた。

「エリオ君！」

それを少し離れたところで見ていたキャロ。後方支援が担当のキャロは、直接戦闘には出ない。だが、キャロには、頼もしい相棒がいる。

「フリード！」

「キュクルー！」

キャラの指示でフリードが、ゼロの下へと飛んでいく。

「何をするつもりだ？」

フリードは、ゼロの目の前に来るとその場で停止して、口をクワツと開いた。その動きを見たゼロは嫌な予感がした。

「おい・・・まさか・・・」

「フリード！ブラストフレア！」

「やっぱり！」

ゼロの予感の通り、キャラは目の前でブラストフレアを撃つ気だった。そばにはエリオもいるのにと考えていたゼロは、エリオの方を見ると

< S o n i c M o v e . >

「あっ！」

ゼロが、フリードに気を取られ腕の力が緩んだ隙をついてエリオは、ソニックムーブを使って脱出していた。ゼロは、しまったと思

ったが、すでに遅くもう一度、フリードの方を見ると、ブラストフレアを撃つ寸前だった。

「ファイア！」

「くっ！」

ほぼ零距离と言っていい間合いでゼロにブラストフレアが放たれた。もちろん、ゼロが大怪我しないようにキャロも加減をしていたが、それでもほぼ零距离で放たれたブラストフレアを受ければさすがのゼロでもと思うキャロ。

「やったかな？」

「うん。さすがのゼロさんでも・・・」

ソニックムーブで脱出したエリオがキャロの下へと戻ってきた。そして、2人でブラストフレアで燃え盛っている場所を見ていた。

「はあああ！」

「「えっ！」」

突如にして、炎が一瞬にして消えた。そして、その中心にいたの

はバリアージャケットが所々焦げていたゼロだった。

「キャロ、ちょっとやり過ぎだ。」

「え、ごめんなさい。」

さすがのゼロも今の戦法は、危険だとキャロに注意をした。そして、それからまた何度か模擬戦をした後、今度は全体訓練の時間になったのでゼロの訓練はここで終わった。

「さてと、ここ最近、エリオとキャロの事を見ながら、ティアナを見ていたが・・・」

ゼロは、エリオとキャロの訓練をしながら、ティアナの事をしつかりと見ていた。ここ最近、見ている分には、特にこれと言って何か起きてはいなかった。

だが、ゼロは思っていた。真面目に訓練は受けてはいるが、何かあるんじゃないかと・・・

「まあ、適度には見ておけばいいか・・・」

そう思い、ゼロは隊舎の中に入って行った。

そして、書類仕事でもしようと思いきやデスクに向かっている途中にフエイトがいた。

「フェイト隊長。」

「あ、ゼロ。隊長はやめてって言ったでしょう。」

「仕事中なんで許してください。」

ゼロは、仕事とプライベートで呼び方を変えていた。仕事中は、呼び捨てはしないで隊長と呼んでいた。しかし、それ以外でも隊長と呼んでいることも多いが……

「エリオとキャロの事、任せきりでごめんね。」

「いえいえ。2人ともかなり素質いいですし、教えがいがあったいいですよ。」

正直にゼロはそう思っていた。模擬戦を重ねていくたびに成長していくエリオとキャロ。まだ、数日しか経っていないのに、ハンデありとはいえ、自分に一発当てる事ができるようになってきたのだから。

「そういえば、捜査の方はどうですか？」

「うん。相変わらず進展なし。」

例の管理局員への襲撃事件の捜査をしているフェイト。進展は相変わらずないとのこと。しかもフェイトが捜査をしているのはこの事件だけではない。

スカリエッティの事も同時に捜査しているので、敵ながら変に関心してしまうゼロであった。

「体壊さないでくださいよ。」

「ふふっ、心配してくれるんだ。大丈夫だよ、ありがとう。」

フェイトは、そう言って行ってしまった。フェイトを見送ったゼロは当初の目的地デスクに向かった。

「さてと、始めますか。ステラ、補佐お願い。」

< 了解しました >

ステラに手伝ってもらいゼロは、仕事を始めた。

< マスター、そこ違います >

「ん？ ああ、ごめん。」

ゼロよりデバイスの方が、結構優秀だった。それから、何度もステラに指摘を受けて何とか片付いた。そして、ゼロは訓練の事が気になって訓練場に向かった。

「お、ゼロ。」

「どうですか、ヴィータ副隊長、訓練の状況は？」

訓練場に着くとヴィータが、訓練の様子を見ていた。

「今は、なのはを相手にやっているところだ。」

なのは対フォワードは、ときどきやっている訓練だ。リミッター付きのなのはとはいえ、フォワード陣に対してまだまだきつい部類に入る。

「お、戻ってきた。」

「終わったみたいだな。」

ゼロが、来て間もなくなのはとの戦闘が終わったようだ。見るに4人ともかなり疲れている様子だ。

「お疲れ様。大丈夫か？」

「あ、ゼロさん。」

「大丈夫です・・・」

口では、そう言うがかなり疲れていてみんなフラフラしている。

「頑張った。頑張った。」

ゼロは、4人の頭を順番に撫でて行った。

／／／／／／／／

微笑ましいこの光景。だが、まだゼロは知らなかった。この先、あんな事が起きるなんて

第14話 ゼロの訓練2（後書き）

はい、第14話でした。どうも、Theaterです。

今回は、エリオ&キャロの訓練の2回目でした。

ちよつとエリオとキャロを強くし過ぎたかな・・・ハンデがあるからって2

人だけでゼロに一発当てるなんて

まあ、それは何とかなるとして、次回がすごいことになりそうです。なのは対スバル&ティアナの戦い。俗に魔王降臨ですけど、これはゼロにか
なり頑張ってもらおうと思います。少し、ネタばれをするならかなりキレます。

では、少しネタばれをしたところで次回、第15話で会いましょう。

第15話 伝わらない想い（前書き）

やりすぎるなのはにゼロが鉄槌を下す。

第15話 伝わらない想い

「さうて、午前中のまとめ2on1で模擬戦をやるよ。まずは、スターズからやろうか。バリアージャケット準備して。」

「はい！」

今日の午前の訓練の最後にスターズとライトニングに別れなものと模擬戦をやることになった。

「エリオとキャロのは、あたしとゼロと一緒に見学だ。」

「はい！」

ゼロ、ヴィータ、エリオ、キャロの4人は離れたところから、模擬戦を見る事なる。この時、ゼロは少しだけ胸騒ぎがしていた。そして、スターズの2人を見ると、バリアージャケットを着て準備万端だった。

「やるわよ、スバル！」

「うん！」

やる気に満ちているティアナとスバル。本来なら、喜ばしいところ

なんだがゼロの不安は増すばかりだった。
そんなところに、ゼロたちが見ている廃ビルの屋上のドアが開いた。

「ああ、模擬戦もう、始まっちゃってる？」

「フェイトさん！」

事件の捜査で忙しいはずのフェイトが来た。

「私の手伝おうと思ったんだけど・・・」

「今は、スターズの番。」

「本当は、スターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね。」

「ああ、なのはもここ最近、訓練密度濃いくからな。少し、休ませねえと・・・」

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、みんなの陣形考えたり。」

それを聞いたゼロは、呆れていた。弟子も弟子なら師も師だなど。ティアナの無茶ぶりはどうやらなのはに似ているようだ。

（そんな2人が、ぶつかったら一体どうなるんだ？）

模擬戦を見ながら、ゼロはそんな事を思っていた。

「お、クロスシフトだな。」

ビルの下を見ると、ティアナがなのはに向けてクロスファイアを放った。

「なんか、切れないな。」

「コントロールは良いみたいだけど。」

なのはは、追尾してくるクロスファイアを難なく躲していく。すると、前にウイングロードが伸びてきた。

その上を全速で走ってくるスバルを見たなのはは、スバルに向けてアクセルシューターを放つ。しかし、スバルはプロテクションで止める。そして、反撃になのはに向けて拳を放った。だが、それはなのはのプロテクションによって防がれる。

スバルの攻撃を防いだなのははおもいきりスバルを吹っ飛ばした。

「こら、スバル。ダメだよ、そんな危ない軌道！」

「すみません！でも、ちゃんと防ぎますから！」

「ん、ティアナは？」

スバルに気を取られているとティアナの姿がなかった。周りをよく見回す。すると、遠くのビルの屋上がピカッと光ったと思うと、なのはに頬にレーザーポイントが当たる。

「砲撃？ティアナが。」

見学組もティアナの予想外の攻撃に驚いていた。

（スバルの無茶と思える突撃・・・そして、ティアナの砲撃・・・）

ゼロは、模擬戦の様子を冷静に観察する。そして、この先の展開を考えていた。

その間に模擬戦はすでに次の展開に進んでいた。また、スバルがなのはに同じように突っ込んで行ったのだ。だが、さっきと同じようになのはは、当然それを防ぐ。

「あっ！」

「ティア！」

なのはが、スバルの攻撃を防ぎながらティアナの砲撃を注意して見るとティアナの姿が光となって消えるのが見えた。

「シルエットか・・・じゃあ、本物は・・・」

見学しているゼロは、本物のティアナを探した。周りのビルや道路、その他いろいろ探したが、その姿はなかった。

「どこだ・・・もしかして・・・いた！」

いくら探しても姿がないティアナ。そこでもしやと思いゼロは、スバルの出しているウイングロードを探した。すると、ティアナがウイングロードを走っているのを見つけた。

「バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける。」

ティアナは、スバルがなのはを抑えている間にウイングロードを駆け抜け、なのはの真上に到達した。そして、魔力刃でなのはのバリアを切り裂く作戦だったようだ。

「一撃必殺！てええええええ！」

なのはの真上から一直線に落下していくティアナ。勝利を確信していたが、しかし・・・

「レイジングハート・・・モードリリース。」

< All right. >

何を思ったかなのはは、レイジングハートを待機状態に戻した。そして、そのままティアナが突っ込んだ。

その際に起きた爆発で3人の姿が見えなくなった。そして、だんだんに煙が晴れてきて姿が確認できるようになった。

「おかしいな。2人ともどうしちゃったのかな？」

「えっ？」

煙が完全に晴れるとそこには、スバルに拳を左手で止め、ティアナの魔力刃を右手で掴んでいるなのはの姿があった。

その光景を見て、ティアナとスバルは驚愕していた。

「頑張っているのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ。練習の時だけ言う事聞いているふりで、本番でこんな危険な無茶するんなら、練習の意味ないじゃない。」

魔力刃を掴んでいる右手から血が滴り落ちる。

「ちゃんとさ、練習通りやろうよ。ね？」

「あ・・・あの・・・」

光が無い瞳でそう問いかけるなのは。それを見たスバルは、ある意味で恐怖していた。

「私の言ってること、私の訓練・・・そんなに間違ってる？」

「くっ！」

< Blade erase. >

魔力刃を解除して、ティアナはなのはから離れた。

「私は、もう誰も傷つけないから！無くしたくないから！」

「ティア・・・」

「だから、強くなりたいんです！」

ティアナは、必死に訴えた。だが・・・

「少し、頭冷やそうか・・・」

「あっ！」

「クロスファイア。」

「ファントムブレイツ」

「・・・シュート。」

無情にも、なのははティアナにクロスファイアを打ち込んだ。

「ティア！ あっ？ バインド！」

「じっとして。よく見てなさい。」

クロスファイアを受けて無防備な状態のティアナになのはは、追撃を撃とうとしていた。

「な、なのはさん！」

スバルの叫びも空しく、なのはは撃った。

「ティアアアアア！」

なのはの追撃でティアナは完全に堕ちたと誰もが思った。なのはのそばにいたスバルは、涙を流し膝をついた。

見学組も黙ってその様子を見ていた。だが、その場には5人いるはずなのになぜか4人しかいなかった。

「まったく、馬鹿ばかりだ。」

ティアナがいた場所の煙が晴れた。すると、そこにはティアナを庇うように立っているゼロの姿があった。

「なのは隊長。ちょっとやりすぎですよ。」

「ゼロ君・・・邪魔しないでもらえるかな。」

「できません。明らかに過剰攻撃ですよ。今のは。」

ティアナに追撃が当たる前にティアナの前に立ちクロスファイアを防いだゼロ。そして、なのはにやり過ぎだと指摘する。

しかし、なのはは聞く耳持たんと言った態度で返してきた。

「邪魔するなら、ゼロ君も頭冷やしてもらおうよ。」

なのはは、ゼロに向かってクロスファイアを撃ってきた。だが、ゼロはそれを軽く防いだ。

「なのは隊長。ちょっと動かないでください。」

「えっ・・・なっ！」

ゼロは、なのはをドールマスターで動きを封じた。そして、気絶寸前のティアナを抱え、スバルの下へと飛んだ。

「よっと。大丈夫かスバル。すぐ外してやるから。」

スバルのところまで来ると、スバルに拘束していたバインドを外した。

「じゃあ、行くよ。」

ティアナと一緒にスバルも抱え、ゼロは見学組の所まで連れて行った。

「フェイト隊長、ヴィータ副隊長、2人をお願いしますね。」

「おまえは、どうするんだ？」

「ちょっと、お仕置きにね。」

未だ、ウイングロードの上で身動きができないままじっとしているのはを睨めつけながらゼロが言った。そして、ゆっくりとゼロはなのはの下へと飛んで行った。

「お待たせしました、なのは隊長。」

「ゼロ君。許さないよ・・・」

「許してくれなくていいです。実を言うと俺もかなり怒ってるんですよ。」

なのはを鋭い目で睨み付けて言った。

「ドールマスター解除。これで動けますよ。」

「ん・・・」

ドールマスターが解除され、なのはは動けるようになった。動け

るようになるとなのはは、ゼロから間合いを取った。

「覚悟してもらおうよ。」

「俺が、負けるとでも。」

「私はリミッターがあるけど、それはゼロ君もでしょ。Aランクじゃ私には勝てないよ。」

「魔力だけが、実力じゃないですよ。」

「すぐに終わらせる。」

互いにデバイスを起動させ、相手の動きを見る。中距離～遠距離が主体のなのにとってゼロはやり辛い相手と言える。ゼロは、ミッドチルダ式だが、近距離を主体にしている攻撃が多い。しかも、フェイトほどではないが、スピードがある。

（懐に入られないようにする。）

なのはが、そんな事を思っているが、ゼロにとってそんなことは関係なかった。

「行くよ!」

< Accel Shooter. >

ゼロに向かってアクセルシューターを撃つのは。

十数のスフィアがゼロに向かっていく。しかし、ゼロはプロテクションを張る様子も避ける様子の無くその場で止まっていた。だが、徐に右手を前に出し、余裕の笑みを浮かべた。

「ドールマスター・・・」

突如にしてアクセルシューターが、その動きをピタッと止めた。その予想外の出来事になのはは驚きを隠せないでいた。

「どうして・・・」

「前にも言いましたよね。ドールマスターは、無機物にも有効だって。だから、当然、魔力だって操れるんです。」

「あっ！」

「だから、どんな魔力攻撃でも俺には、意味がありません。はい、返します。」

ゼロは、アクセルシューターをなのはに向けて逆に返した。

「くっ！」

自分で放ったアクセルシューターを自分で受ける事になってしまったのは。プロテクションで防いだのでそれほどのダメージにはならなかった。

「なのは隊長。1つ聞きます。」

「何かな？」

「ティアナが、何であんな無茶な事をしたか、わかっていますか？」

「わかるよ。だけど、だからあんな無茶をしいってわけじゃない。」

それを聞いて、ゼロの怒りがMAXになった。

「そうですか・・・それがわかっていて、何もしなかったんですか・・・ステラ、モード2。」

< 了解しました >

ステラをモード2にしてなのはに向ける。

「もういいです。次で終わらせます。」

なのはへの怒りが頂点に達したゼロは、もう手加減など忘れていた。その姿は、まるで裏のあの姿のように冷たいオーラを放っていた。

第15話 伝わらない想い（後書き）

はい、第15話でした。どうも、Theaterです。

今回は、微妙でした。

いまいち、なのはへ怒りを向けるのが難しくて、無理矢理な感じになってしま

いました。

本当は、この話で終わらせるつもりだったんですが、長くなってしまいそうな

のでなのはを堕とす直前で終わらせました。

次回は、結構なのはを圧倒的に倒しますのでその辺でまた、無理矢理な感じに

なってしまいかもしれないので先に言うておきます。

では次回、第16話で会いましょう。

第16話 堕ちたエース（前書き）

ゼロとなのはの戦いに決着がつく。

第16話 堕ちたエース

「もういいです。次で終わらせます。」

なのはにステラを向け、冷たい目でそう宣言するゼロ。それに対して、なのはと言うとその言葉が気に入らないらしくクツと言う顔をしていた。

「ゼロ君。さすがに笑えないよ。」

「行きます。」

なのはの言葉など無視をして、ゼロはなのはに向かって飛んだ。最初に牽制がてら、スフィアを4つ出し、なのはに向かって放った。

「そんなの効かない。」

なのはは、それを軽々と躲した。

「効くとは思ってません！はああ！」

なのはが、スフィアを躲している隙を狙って、ゼロはなのはの後

ろを取った。そして、ステラで横一閃に薙ぎ払う。

「くっ！」

< Flash Move. >

だが間一髪、高速移動魔法によってなのはは、危機を脱した。

「惜しい・・・」

口でそう言うが、ゼロはまったく悔しいとは、思っていない。むしろ、簡単に終わってしまったては詰まらないと思っていた。

「はあはあはあ・・・」

ゼロから、距離を取って息を整えているのは。

（今のは、危なかった。少して、気を抜けば負ける。）

今の攻撃によってなのはの考えは変わった。ゼロの言う通り、下手をすれば今ので終わっていたかもしれない。

「すく、ふうく」

深呼吸をして、自らを落ち着かせる。そして、眼前のゼロを見る。余裕を見せているのか、なのはが息を整えるまで、まったく攻めてこなかった。だが、なのはにとってそれは、勝機だった。

（ゼロ君は、私に簡単に勝てると思って油断している。なら、その隙を突く。）

< Accel Shooter. >

なのはは、アクセルシューターを最大同時操作できる32発を自分の周りに出した。それを見たゼロは、ステラを構えた。

（まず、最初に）

32発中の10発をゼロに向けて放つ。ゼロは、当然防御の態勢を取った。しかし、10発のスフィアはゼロには当たらなかった。

「な、何だ？」

ゼロは、自分の周りを見て驚いた。10発のスフィアが、まるで

球を描くように縦横無尽にゼロの周囲を回っていた。

それは、まさにスフィアの檻と言った感じでゼロを閉じ込めていた。そして、なのはは残りのスフィアで同じように2重3重に檻を作りゼロの動きを封じた。

「これでゼロ君は、身動きできないね。」

「この程度で動きを封じたつもりですか？」

「問題ないよ。少しでもその場から動かないようにするだけでいいんだから。」

そう、なのはの真の狙いは、別にあった。スフィアは、ただの罠。ゼロを数分でもその場から動かないようにすればいいだけだった。

「これで終わり、私の勝ちだよ。」

なのはは、レイジングハートをゼロに向けて、勝利宣言をした。

「ディバイン！・・・バスター！」

なのはが、最も得意とする砲撃魔法、ディバインバスターがゼロに向かって放たれた。

「くっ！」

スファイアの檻のおかげで回避するのは、不可能。残された手段は、プロテクションで防ぐのみ。ゼロは、すぐにプロテクションを展開した。

だが、ゼロ自身そんなものが効果が無いとすぐに思い知らされた。ゼロに取って予想外の事が起こったからだ。ゼロがプロテクションを展開した直後、それまでゼロの周囲を回っていたスファイアが、一斉にゼロ目掛けて飛んできた。そして、その衝撃でゼロのプロテクションが破壊された。

「なっ！」

プロテクションが、破壊されディバインバスターから身を守る術がなくなった。そして、次の瞬間にはゼロは、ディバインバスターに飲み込まれていた。

「終わったな。」

「うん・・・」

今の戦いを静かに見守っていたヴィータ、フェイトにエリオとキヤロ。残りの2人はと言うと、ティアナは、先ほどのなのはのクロスファイアによって気を失っていて、スバルはそんなティアナのそ

ばでうずくまっていた。

「ゼロもよくやった方だけどよ。なのはに、勝てなかったな。」

「そう・・・だね。」

フェイトは、元気がない声で頷く。

「終わったかな・・・」

ゼロにディバインバスターが、決まってこれで勝ったと思ったなのは。ディバインバスターによって巻き起こった煙が徐々に晴れて行く。

「えっ！」

「結構効きますね・・・」

そこには、多少ダメージを負っただけで、全然元気なゼロの姿があった。

「嘘・・・」

なのはは、驚愕していた。手加減はしなかった。それも防御なしでくれば間違はなく気絶する威力だったはずだ。

「それでは、今度はこっちから行きます。」

ゼロは、ステラを構えた。

「飛^{ひてん}天……翔^{しょうげき}戟！」

飛ぶ斬撃、それが適切な表現だろう。だが、それはフェイトが使うハーケンセイバーとは、まったく違う。魔法で形成された魔力刃を撃ち出すハーケンセイバーと違い、飛天翔戟は純粹な斬撃を飛ばす。故に非殺傷設定など無意味。

「あっ！」

< Protection >

レイジングハートが、プロテクションを自動展開をした。だが、それは意味がないこと。

「きゃあああああ！」

飛天翔戟は、なのはのプロテクションをまるで紙をはさみで切るかのように簡単に切り裂いた。そして、その衝撃でなのはは、地面へと落ちて行った。

「なのは！」

フェイトが、叫ぶ。そして、一目散になのはの下へと飛び出そうとする。

「待て！」

だが、ヴィータがそれを止めた。

「ヴィータ！離して。なのはが！」

「落ち着け！よく見ろ！」

「えっ？」

ヴィータに言われ、フェイトはなのはの落ちた場所を見た。

「う、ううう・・・」

なのはは、無事だった。だが、大丈夫とは言える状態ではなかった。

「それで、終わりですか？」

ゼロが、上空からなのはに向かって言った。まるで、絶対的な強者が弱者を見下ろすように。

「くっ・・・」

なのはは、何とか立ち上がった。そして、上にいるゼロを見上げる。さっきの一撃、プロテクションが切り裂かれたとは言え、バリアージャケットのおかげで何とか致命傷にはならなかった。しかし、なのはにとっては大きなダメージになっている事には変わりはない。

「ふっ！」

氣力を振り絞り、再び空へと上がる。

「さすが、エースオブエースと言ったところですね。でも、終わり

です。」

「それは・・・まだ、わからないよ！」

「ん！」

突如にしてゼロの自由は奪われた。

「バインド？それにこれは・・・」

ゼロは、なのはのバインドによって動きを封じられた。それもただのバインドではない。通常では考えられないほど、何重にも重ね掛けされていた。

「あの短時間でよくこれほどのバインドを・・・」

「結構無理したよ。でも、これで本当に終わりだよ。」

なのはの前に魔力が集まっていく。それは、先ほどまでゼロが使用した魔力も同様に集束されて行った。今から、放つのはなのは最強の集束型砲撃魔法。

「全力全開！スターライトブレイカー！」

ピンク色の閃光が放たれる。ゼロは、その光景を静かに見ていた。まるで、ゆっくりと時間が流れるかのようにゼロには永く感じられた。

そして、ピンク色の閃光はゼロを飲み込んで行った。

「はあはあはあ・・・勝った・・・」

最強の砲撃魔法を使い、これで完全に勝ったと確信するなの。だが、悪夢はここから始まった。

「はあはあ・・・えっ！」

なの。はが、ふいに上を見る。

「並の魔導師なら、今ので終わっていたな。だが、本当の終わりはこれからだ。」

どうやってバインドを解き、どうやってスターライトブレイカーを回避したのか。なの。のは頭の中はそれでいっばいだった。だが、ただ1つの真実は、ゼロがそこにいると言うことだ。

「おわりだ。」

ゼロは、ステラを振り上げ急降下をしてきた。

「あっ！」

< P r o t e c t i . . >

「崩天牙戟。^{ほうてんがげき}」

レイジングハートが、プロテクションを張るより速く、ゼロがなのはを斬った。ステラ自体に非殺傷設定がされているとは言え、上空から急降下の力を乗せた一撃は、いくらバリアージャケットがあったとしても防げるものではなかった。

「かはっ！」

「俺の勝ちだ。」

口から血を吐きなのはは、力なく落ちていく。それをゼロは、黙って見ていた。こうして、エースオブエースは、地に墜ちた。

第16話 堕ちたエース（後書き）

はい、第16話でした。どうも、Theaterです。

何か、すごいことになりました。ゼロがなのはを堕とす事になるとは……

それと、なのはをかなり強い設定にしすぎたかなと少し反省です。これから、ゼロはどうなるんでしょうね。

では次回、第17話で会いましょう。

第17話 大切なもの（前書き）

昼の騒動が落ち着いたのも束の間、波乱はまだ終わらない。

第17話 大切なもの

「うゝん・・・あれ？」

「あ、起きたティアナ。」

「シャル先生・・・えっと・・・」

ティアナは、今の状況がわからないようでキョロキョロした。

「ここは、医務室よ。昼間の模擬戦のこと覚えてる？」

「・・・はい。」

ティアナは、俯き加減で頷いた。

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、体にダメージは無いと思うんだけど。どこか痛いところある？」

「いえ・・・大丈夫です。」

そう言って、ティアナは時計に目をやった。

「えっ！9時過ぎ！えー夜！」

「すごく熟睡していたわよ。死んでるんじゃないかって思うくらい。最近、ほとんど寝てなかったでしょう。溜まっていた疲れが一気にきたのよ。」

「そうですか・・・」

何とも言えない気持ちになるティアナ。

「ティアナが、目を覚ましたし、後はゼロ君がどうなるかね。」

「えっ？ゼロさんどうかしたんですか？」

ここで意外な人の名前が出てきたのでティアナは、首を傾げてシヤマルに聞いた。

「うん・・・ティアナ。模擬戦の時、なのはちゃんの攻撃からゼロ君が守ってくれたのは覚えてる？」

「え？・・・あっ！」

それまで覚えていなかったが、シヤマルに言われ思い出した。とどめの一撃を受ける直前に誰かが自分の前に立って守ってくれたのを。

「たぶんティアナはそこで気絶してしまったから、その後、何があったのか知らないでしょ。」

「ええ。」

「実はね。」

シャルは、ティアナが眠っている間に何があったのかすべて話した。ゼロが、なのはと本気で戦闘を行った事、そしてなのはがゼロによって撃墜されたこと。

「そんな・・・」

自分が、気絶している間にそんな事が起こっていたのかと驚いていた。

「それで、なのはさんは？」

「大丈夫よ。命に別状はないわ。ただ、ちょっとダメージが大きかったけど、私が治療したしもう回復してると思うわ」

シャルは、苦笑しながらそう言った。

（なのはちゃんは、大丈夫だけど・・・問題はゼロ君ね。）

「ゼロ君。とりあえず、ゼロ君にはしばらくの間、謹慎してもらおうわ。」

「わかりました。」

ティアナが、目を覚ます数時間前。ゼロは部隊長室にいた。理由は無論、昼の戦闘に関してた。あの後、なのはを撃墜して下に降りると、ヴィータ、そして、騒ぎを聞きつけたシグナムによってゼロは拘束された。

そして、すぐにはやての下へと連れて行かれ、ティアナが目覚めます頃まで取り調べを受けていたのだ。いくら、新人の事を心配したからと言って、仲間に大きな怪我をさせてしまいそうなほどの攻撃を行ったゼロには重い処分が下されるはずだった。

しかし、今回の事に関しては、なのはにも責任の一端があると考えられ、ゼロの処分は自室での無期限の謹慎ということになった。

「じゃあ、もう行ってええで。」

「失礼します。」

ゼロは、一礼すると部隊長室を出て行った。

「ふう〜。」

重苦しい緊張状態から解放され、はやては一息吐いた。

「大丈夫ですか？はやてちゃん・・・」

「大丈夫や。ありがたいリン。」

「それで、これからどうしますか主。」

部隊長室には、はやてとリン他にシグナム、ヴィータ、が一緒にいた。無論、ゼロが何か仕出かさないかの見張りの為にいたのだが、今は、ゼロも反省している様子だったので自室に戻るのには、見張りを付けることはしなかった。

「さて、どうしたもんな・・・」

「今回の事は、ゼロにかなりの非があると思いますが・・・」

「うーん、そうは言ってもな。」

はやては、かなり悩んでいた。確かにシグナムの言う通り、ゼロはやり過ぎた。下手をすればなのは魔導師生命を絶ってもおかしくないくらいだったから。

しかし、どうにもはやてにはゼロをそこまで責める気にはなれなかった。理由ははやて自身にも分からない。ただ、何となくそう感じてしまっているのだ。

（何なん？この感じ・・・）

「なのは大丈夫？」

「うん。大丈夫だよフェイトちゃん。」

なのはは、現在自室のベッドで休んでいた。シャルマルに治療をしてもらい、もうほとんど回復していた。

「さっき、ティアナが目を覚ましてね。スバルと一緒に謝りに来たよ。」

「そう・・・でも、ごめんね。監督不行き届きで・・・フェイトちゃんやライトニングの2人まで巻き込んで・・・」

「ううん。私は全然。」

フェイトは、全然とフォローする。

「ティアナとスバル、どんな感じだった？」

「やっぱりまだ、ご機嫌斜めだったかな。」

「そっか・・・あつ、それとゼロ君はどうなったの？」

「えっと・・・ゼロは・・・」

フェイトは、言い難そうに言葉を詰まらせたが、素直に言うことにした。

「とりあえずは、無期限の謹慎と言う事になったみたい。」

「そうなんだ・・・」

「うん。」

「ゼロ君には、悪い事をしたな・・・」

「なのは、そんなに・・・えっ？」

突如、隊舎中に警報が鳴り響いた。理由は海上にガジェットが出現したことだった。すぐに、隊長陣が作戦会議の為、集まった。だが、敵の狙いがいまいち掴めなかった。

ガジェットが、現れた海上にはレリックの反応はおろか、海上施設も何もない場所だった。そこをガジェットは、旋回飛行を続けていたのだ。これらの事から、はやては敵がこちら側の戦力を探るのが目的と判断した。

そして、すぐに隊長陣とフォワードをヘリポートへ集合させた。

「今回は、空戦だから出撃をするのは、私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の3人だよ。」

「みんなは、ロビーで待機ね。」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ。」

「「「はい！」」」

「・・・はい。」

ティアナは、まだ昼の模擬戦を引きずっている様子で元気がない返事だった。

「あ、それからティアナ。ティアナは、出動待機から外れていようか。」

なのはの言葉にティアナの心臓がドクンとする。それを聞いたスバル、エリオ、キャロも同様に驚きを見せた。

「その方がいいな。そうしとけ。」

「今夜は、体調も魔力もベストじゃないだろうし・・・」

「言う事を聞かない奴は使えないってことですか・・・」

俯いてティアナが言う。

「自分で言ってる分からない。当たり前のことだよ、それ。」

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だってちゃんとサボらずにやっています。」

「ん。」

たまらず、ヴィータが前に出ようとする。しかし、なのはがそれを制止する。

「それ以外の場所での努力まできちんと教えられた通りじゃないとダメなんですか！私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もキャラみたいなレアスキルも無い。少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなてなれないじゃないですか！」

「くっ！」

ティアナが、言い終わるのと同時にそばにいたシグナムがティアナの襟を掴んだ。ティアナは一瞬なにが起こっているのかわからなかった。だが、次の瞬間シグナムが拳を振り上げるのが目に映った。ティアナは殴られると思い目を瞑った。

しかし、いつまで経っても痛みが来ない。不思議に思いティアナはそっと目を開いた。

「えっ？」

「まったく、嫌な予感がして来てみれば・・・」

そこには、シグナムの拳を受け止めているゼロの姿があった。

第17話 大切なもの（後書き）

はい、第17話でした。どうも、Theaterです。

ゼロは謹慎処分ということになりました。現実だったらもっと重いのが来るとはおもいますが。

それと、なのはの怪我ですが、当初はもっと重体にしようかなと思って書いて

いたのですが、書いている最中になのはが、出勤できないとあの話

を語る時に本人いるちゃんと気付いてしまい。急遽、なのはには出勤してもらうためにダ

メージが大きいがもう回復したと言う無理矢理な展開にしました。

次回ですが、無論あの話語る場面になりますが、ちょっとだけすごい展開に

しようと思っています。今までの展開から察しがつく人がいるとおもいます。

たぶん・・・居ればいいな。

では次回、第18話で会いましょう。

第18話 過去と縁（前書き）

なのはの過去を知ったゼロは・・・

第18話 過去と縁

「ゼロ！貴様、なぜここにいる！」

「嫌な予感がしたもので・・・」

ティアナの襟を掴んでいるシグナムの手を解き、シグナムをティアナから遠ざける。

「ヴァイス！もう、出られるか？」

「乗り込んでいただけりやすぐにでも！」

「だそうです。隊長さん達、さっさと行ってください。」

ゼロは、冷たい瞳でなのは達に言った。それに対して、なのは達は黙ってヘリに乗り込んだ。そして、ヘリはなのは達を乗せ現場へと飛び立って行った。

「ゼロ、お前は命令違反をした。わかっているな。」

「ええ。」

「あ、あのシグナム副隊長！」

シグナムが、ゼロを連れて行こうとすると、スバルがそれを引き留めた。

「何だ？」

「命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアの物言いとか、それを止められなかった私は、確かにダメだったと思います。だけど、自分なりに強くなろうとするのとか、きつい状況でも何とかしようと頑張るのってそんなにいけないことなんでしょうか！？自分なりの努力だとかやっちゃいけないんでしょうか？」

スバルは肩を震わせながら、シグナムに問いかける。周りのみんなもそれを黙って聞いていた。すると、突然に後ろから声が聞こえてきた。

「自主練習は良い事だし、強くなる為の努力は、とてもいい事だよ。」

「シャーリさん・・・」

声の主はシャーリだった。

「持ち場は、どうした？」

「メインオペレートは、リイン曹長がいてくれますから。何かもう、みんな不器用で見えていられなくて。みんなちよっとロビーに集まって。あたしが、説明するから、なのはさんの事となのはさんの教導の意味を。」

それから、その場にいたみんなは、シャーリーの後に続いてロビーに集まった。そこには、知らせを受けてシャルもいた。そして、なぜかゼロも一緒にその場にいた。シグナムが、一端ゼロを部屋に連れて行こうとすると、シャーリがゼロも一緒にと言ってきたので、ここにいると言う事だ。

「昔ね、1人の女の子がいたの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった。」

シャーリは、モニターを操作して、1つの映像を出した。そこには、1人の少女の姿が映っていた。よく見るとその少女は、幼い頃のなのはだった。

「友達と一緒に学校へ行って、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずの子だった。・・・だけど、事件は起こった。魔法学校に通っていた訳でもなければ、特別なスキルがあった訳でもない。偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかったっただけのたった9歳の女の子。そして、魔法と出会ってからわずか数ヶ月で命掛けの実践を繰り返したの。」

映像には、幼いなのはが激しい戦いをする場面が、流れた。すると、どこかで見たことがある金髪の少女がなのはと戦っているシーンがあった。

「これって・・・」

「フェイトさん・・・」

それから、なのはとフェイトが、出会い、戦う原因となった事件。P・T・事件の話がされた。母親の命令で、ロストログアを集めるように言われたフェイト。偶然に魔法に出会い、探し物の手伝いをする事になったなのは。そんな、2人のお出合いの物語を。

その中で、なのはが集束砲を撃つ姿を見た時、フォワードの4人は驚きを隠せなかった。唯でさえ、集束砲は体に負担を掛ける魔法だ。それをたった9歳の女の子が使っていたのだ当然であった。それを見たティアナが、何か思うような表情をした。

そして、話しはもう1人の少女との出会いに移る。闇の書事件。今でこそ仲が良いなのは達とヴォルケンリッター。だが、出会いは敵同士だった。自らの主を守る為に戦う騎士。真実を知り、止める為に戦う少女たち。そんな圧倒的な力を持つ騎士に敗北をした少女。もっと強くなりたい。その強い願いで手に入れた新たな力、カトリッジシステム。まだ、安全性が確かでなかった頃。体に無理が掛かるのは承知で力を解放し、戦った。

そんな、壮絶な戦いの話を黙って聞いているフォワードの4人。

「だが、そんな事を繰り返して体に負担が生じないはずがなかった。

「事故が起きたのは、入局2年目の冬。」

シャルが、悲しげな顔をして言う。

「異世界での捜査任務の帰り。ヴィータちゃんや部隊の仲間と一緒に出掛けた場所で、ふいに現れた未確認体。いつもののはちゃんなら、きっと何の問題も無く味方を守って、墮せるはずだった相手。だけど、溜まっていた疲労。続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせちゃった。その結果がこれ。」

シャルが、モニターを操作してある映像を出した。そこには、酷い怪我をしたなのはの姿だった。

「なのはちゃん、無茶して迷惑かけてごめんなさいって。私たちの前では笑ってたけど、もう飛べなくなるかもとか、立って歩くこともできなくなるかもって聞かされて、どんな思いだったか・・・」

その映像を見て、また驚愕するフォワードの4人。

「無茶をしても、命を賭けても譲れない戦いというのは確かにある。だが、お前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を賭けてでも、どうしても撃たねばならない状況だったか？」

「あっ・・・」

「訓練中のあの技は、一体誰の為の、何の為の技だ。」

ティアナは、俯いてしまう。

「なのはさんは、みんなにさ、自分と同じ思いをさせたくないんだよ。だから、無茶なんてしないでいいように、絶対絶対みんなが元気に帰ってこれるようにって・・・本当に丁寧に一生懸命考えて教えてくれてるんだよ。」

シャーリーの言葉に4人は何も言えなくなってしまった。

「くくく・・・」

だが、唯一1人だけ、シグナム、シャマル、シャーリーの言葉が理解できていない者がいた。

「ゼロ？どうした？」

「はっははははははは！」

「ゼロさん。」

「ゼロ君・・・」

突然、ゼロが笑い出したのでその場にいたみんながゼロの方を見た。

「まったく、どんな話かと思ったら、実にくだらない。」

「な、何！」

「自分と同じ思いをさせたくない？だから、丁寧に一生懸命に考えて教えている？実にくだらない。」

「貴様・・・何のつもりだ！」

シグナムが、ゼロの襟元を掴んで引き上げた。

「なのは隊長は、教導官として未熟ということですよ。」

ゼロは、平然として顔で言う。

「無茶をしないように、教え子が大怪我しない為に、一生懸命になるのは認めましょう。だけど、それが相手に伝わらないんじゃない意味がない。シグナム副隊長たちのように、付き合いが長い訳じゃない

んです。ちゃんと言葉にしないと自分の気持ちは伝わりませんよ。」

「くっ！」

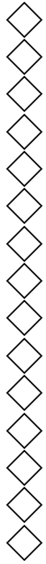
シグナムは、ゼロを離した。

「それじゃあ、俺はこの辺で。」

ゼロは、ロビーを出て行った。そして、自分の部屋へと向かった。部屋へ向かう途中にゼロは、さっきの映像を思い出していた。

（まさか・・・あの時の魔導師が、高町なのはだったとは・・・生きていたとは・・・）

そんな事を考えている間に部屋に着いた。ゼロは、部屋に入るとそのままベットに横になり目を瞑った。そして、昔の記憶を思い出す。



その日、ゼロはガジェット？型と？型を連れて、ある世界に来ていた。

「ドクターが、言っていたのはこのあたりか・・・」

ゼロは、スカリエッティに命令され、ガジェット？型の稼働テストに来ていた。テストの内容は、任務で来ている管理局員の襲撃。

「さてと・・・魔力が強いのが、2人か。」

管理局員の魔力を探り、強さの度合いを調べた。その結果、強いのは2人と判明した。

「あの、白いのと赤いのだな。魔力だけやたらと高いが、実力はどうかな？」

ゼロは、管理局員たちを見て、不敵に笑う。そして、右手を挙げて、管理局員たちを差す。

「行け！」

ゼロの合図にガジェット？型と？型が一斉に管理局員たちに向かって行った。

「な、何だ！」

「ヴィータちゃん！」

突然の襲撃に管理局員たちは、驚いていた。いくら、強い魔導師がいても突然の襲撃を受ければ、容易く壊滅に追い込めるとゼロは思っていた。

しかし、その考えは甘かった。ゼロの考えとは逆に、ガジェットは次々に破壊されて行っていた。

「結構やるな。？型がもうほとんど壊された。だけど・・・」

管理局の魔導師によって破壊されていくガジェット。ゼロは、予想外な展開に関心していた。だが、管理局員が倒しているのは、？型だけ。まだ、？型は姿を現していない。果たして、管理局員に？型が、倒せるのかなとゼロは思っていた。

そんな時、ゼロはある事に気づいた。白いバリアージャケットを着た魔導師の動きがどこかおかしいのを。

「あの動き・・・終わったな。」

ゼロが、そう呟いた瞬間、白いバリアージャケットの魔導師が、光学迷彩で姿を消していた？型の刃に胸を貫かれている光景が、目に映った。力なく倒れて行く魔導師。そばで、それを見ていたであろう仲間の赤いバリアージャケットの魔導師が叫んでいるのが聞こえる。

その赤い魔導師は白い魔導師を守るように？型を破壊した。そして、急いで白い魔導師の下へと駆け寄って行く姿が見られた。

「さて、どうなったかな。」

一通り、戦闘が終わった頃を見計らない、ゼロは管理局の魔導師の下へと近づいて行った。そばまで来ると赤い魔導師は白い魔導師を抱きかかえ何度も呼びかけていた。

「その子は、助からないよ。」

「誰だ！」

突然、声を掛けられたことに赤い魔導師は、振り返った。すると、そこには黒いフードで顔を隠した男が立っていた。

「そこにある残骸の持ち主だよ。」

ゼロはそう言って、壊れたガジェットを指さした。

「お、お前が・・・なのは・・・」

「やったのは、その機械人形だ。俺が、直接手を下した訳じゃない。」

「うるせえ！お前がやったんだ！お前が！」

赤い魔導師は、物凄い形相でゼロを睨み付けた。

（ダメだな。完全に冷静さを失っている。こんなのを相手にする暇はないな。）

ゼロは、踵を返した。

「ま、待て！」

「何か？」

「このまま、逃がすと思ってんのか！」

「目的は、果たしたので用はないです。それじゃあ、縁があればまたどこかで。」

「ま、待ちやがれ！」

ゼロは、そのまま吹雪の中に消えて行った。



「縁があればか・・・ここには、何かと縁がある奴が多いな。」

ティアナに続き、今度はなのはとヴィータ。機動六課のメンバーは、ゼロと何かしら繋がっているようだった。これは、偶然？それとも必然？

「この分だと、まだ縁のある奴がいるかもしれないな。・・・そういえば、あいつ似てるな。あの時の魔導師に。」

第18話 過去と縁（後書き）

はい、第18話でした。どうも、Theaterです。

と言う事で、なのはの過去にゼロが関わっていました。ここまで来ると誰かが

死ぬ場面には必ずゼロが関わっているような感じになりますね。

なのはは、死んでませんけど。

さて、最後に何か意味深な事を言っていました。あと1人ゼロが関わって

る事件があります。まあ、それは今は秘密と言う事で。たぶん、ギンガが出て来る頃に・・・

では次回、第19話で会いましょう。

第19話 六課の休日（前書き）

1日休みになったある日。新人たちは、街へ出かけた。

第19話 六課の休日

「はあゝ、暇だな・・・」

あの事件から、早くも2週間が経過していた。そして、あの日の夜を境にティアナとなのはが、和解したと耳にした。何でも、なのはがティアナにちゃんと自分の考えを話したんだそうだ。ティアナは、それを理解し、今では前のように訓練に励んでいるらしい。

「ううゝ」

ティアナとなのはが、和解したのは良い事だ。だが、まだ解決していない事があった。そう、ゼロの謹慎は未だに解けていないのだ。あれから、ティアナやなのはが部屋に来て、仲直りしたと話に来た。ゼロも、なのはに一応ごめんと謝った。それから、今日まで一日に何人か入れ替わりで部屋に来て話相手になってくれた。

「はあゝ」

だが、みんなも訓練や仕事で忙しい。だから、どうしても暇な時間が出てしまう。

「事務仕事くらい、させてくれてもいいのに・・・」

「ゼロさくん。入るですよ。」

そんな時、部屋の外から声が聞こえてきた。声の主は、返事も聞かずにドアを開けてフワフワと飛んで入ってきた。

「何かようですか？リイン曹長。」

「はいです。はやてちゃんが、呼んでますよ。」

「部隊長が？わかりました。行きましょう。」

リインから、はやてが呼んでいると言う事で、部隊長室に向かうことになった。

「それで、部隊長が呼んでいる理由は何ですか？」

「わからないですう。リインは、呼んできてって言われただけですう。」

「そうですか・・・」

リインも理由を知らないらしい。だったら、一体何のようなのだろうか。こんな朝早くに呼び出すほどの事ってなんだ？

「さあ、着いたですよ。はやてちゃん！ゼロさん連れてきたですよ。」

そうこう言っている間に部隊長室の前まで来ていた。リインは、中にいるはやてにゼロを連れてきたことを言いながら中に入ってしまった。

「失礼します。」

ゼロも続いて中に入る。すると、デスクに座っているはやてが険しい顔をしていた。

「部隊長。お呼びでしょうか。」

「うん。呼んだで。」

険しい表情を一切変えず、はやてはしゃべる。その、様子にゼロはただごとではないと思った。

（何だこのはやての異様な表情は？まさか、六課を辞めろとか言い出すんじゃない？）

「ゼロ君。実はな・・・」

「はい・・・」

緊張の瞬間。ゼロは、喉をゴクリと鳴らす。はやては、真剣な表情でゼロを見つめる。そして、ついにその時が来た。

「ゼロ君の謹慎を解くことになったんや。」

「・・・・・・・・えっ？」

一瞬、はやてが何を言ったのか、ゼロは理解できなかった。

「えっと・・・今何て？」

「だから、謹慎を解くことになったんや。」

どうやら、聞き間違いではないらしい。はやては、謹慎を解くとはつきり言った。

「その、うれしいですけど。なぜです？」

「それはな。なのはちゃんとティアナが、頼みにきてん。ゼロ君の謹慎を解いてほしいってな。」

はやての言うには、ここ最近、なのはとティアナが、俺の謹慎を解いてほしいとお願いに来ていたそうだ。しかも、2人と一緒にスバル、エリオ、キャロにフェイトまで、お願いして来たそうだ。さすがにそこまでされたら、はやても無下にはできず、こうして謹慎を解くことにしたそうだ。

「せやから、今日から仕事に復帰してもらおうで。」

「わかりました。」

「うん。それじゃあ、朝ごはん食べにいこか。なのはちゃんたちも、そろそろ訓練終わる時間やし。」

「そうですね。行きましょう。」

ゼロとはやては、朝ごはんを食べに食堂に向かう。

「リインを置いて行かないでくださいですう」

危うく、存在を忘れられ置いて行かれそうになったリインは、2人の後を追いかける。

「みんな、おはようさん。」

「あ、はやてちゃん。」

「おはようございます。八神部隊長。」

食堂に着くと、そこにはすでに、訓練を終えたフォワードの4人となのはとフェイト、それにヴォルケンリッターがいた。

「あっ！ゼロさん。」

そして、はやての後ろにいたゼロにスバルが気付いた。その声に他のみんなもゼロの姿に気づく。

「ゼロ君。」

「ゼロ。」

「ご迷惑掛けてすみません。今日から、復帰することになりました。」

ゼロは、みんなに報告した。

「よかったね、ゼロ君。」

「はい。」

それから、みんなで朝食を摂りはじめた。すると、テレビから政治関連のニュースが、流れるのが聞こえた。そして、画面には、地上本部総司令のレジアス・ゲイズが映っていた。

『魔法と技術の進化と進歩。すばらしいものではあるが、しかし、それがゆえに我々を襲う危機や災害も10年前とは比べられないものになっている。兵器運用の強化は、進化する世界の平和のためである。』

レジアスの演説に六課の面々がテレビに集中する。

『首都防衛の手は、未だにたりん。非常要請に対しても、我々の要請が通れば、地上の犯罪も発生率で20%、検挙率においては35%以上の増加を初年度から見込むことができる。』

「この、おっさんはまだ、こんなこと言ってんのな。」

「レジアス中将は、古くからの武闘派だからな。」

「あつ、ミゼット提督。」

「ミゼットばあちゃん？」

レジアスの後ろのほうに、3人の地位の高そうな人が座っていた。

「キール元帥とフィルス相談役も御一緒なんだ。」

「伝説の3提督。そろいぶみやね。」

その3人とは、はやての言った通り、時空管理局の伝説の3提督と呼ばれる人たちだ。

本局統幕議長ミゼット・クローベル、武装隊榮譽元帥ラルゴ・キール、法務顧問相談役レオーネ・フィルス。3人は、時空管理局黎明期の功労者として伝説となっている。

「でも、こうして見ると、普通の老人会だ。」

「もう、ダメだよヴィータ。偉大な方達なんだよ。」

「管理局の黎明期から今の形まで、整えた功労者さんたちだもんね。」

なのはたちが、3提督を偉大な方達と尊敬しているような感じだが、1人だけその3人を睨み付けるように見ている者がいた。

（偉大な方達・・・功労者か・・・なら、なぜ助けられなかった。）

「ん、ゼロ君。どうしたの？」

「え、あ、何でもありません。」

ゼロは、なのはに何でもないと言うと、朝食の続きを摂りはじめた。

それから、朝食を食べ終わり、みんなは仕事に向かった。その時に、なのはから今日は、フォワードの4人は、お休みと聞かされた。何でも、これからティアナとスバル、エリオとキャロの2組に分かれて街へお出かけだそうだ。

そして、ゼロは今、なぜかライトニングの2人の見送りに来ていた。

「ハンカチ持ったね？IDカード忘れてない？」

「えっと、大丈夫です。」

現在、エリオは、フェイトに着付けを直してもらいながら、キャロを待っている状態だ。

「あ、お小遣い足りてる？もし、足りなくなったら大変だから・・・」

（何、この親ばかり？大方の事情を知ってるけど、これは行きすぎじゃ・・・）

フェイトの親ばかりにゼロは、呆れ気味だった。

「あ、あのフェイトさん。その、僕もちゃんとお給料を頂いてますから。」

「あ、そっか・・・」

「大丈夫です。ありがとうございます。」

「とりあえず、エリオは、男の子だしキャロより2ヶ月年上なんだから、ちゃんとエスコートしてあげるんだよ。」

「はい！」

「エリオくん！」

そんな時、ちょうどキャラが準備を終えてきたようだ。

「ごめんなさい。お待たせしました。」

「はあ、キャラ良いね。可愛いよ。ねえ。ゼロ。」

「そうですね。可愛いよキャラ。」

「えへへ。ありがとうございます。」

「さてと、仕事しますか。」

エリオとキャラを見送った後、ゼロは1人デスクに向かい仕事を始めた。だが、始めて早々に溜息を吐きたくなる状況になる。

「はあ、何でこうなるの？」

溜息を吐いている原因はまさかの出来事だった。何と謹慎している最中のゼロの仕事がそのままになっていたのである。

「誰か、やっておいてくれなかったのか。」

ゼロが、受け持っているものは、特に急ぐようなものでは無いものばかりなので、誰も手を付けていなかった。しかも、居なかった時の分もそのまま、溜まっていたのでとんでもない量になっている。

「これを1人でやるのか・・・鬱だ。」

愚痴を溢しながら、1人仕事を片付け始めるゼロだった。

第19話 六課の休日（後書き）

はい、第19話でした。どうも、Theaterです。

今回は、日常？的な話になりました。

無事にゼロの謹慎も解けてよかった。よかった。そして、次回はいよいよナン

バーズも出てくるのかな？

出てきたら出てきたで、いろいろ大変そうですね。主にゼロの立ち位置が

では次回、第20話で会いましょう。

第20話 休日の終わり（前書き）

短い休みが終わり。事件へと変わる。

第20話 休日の終わり

「ゼロさん。お願いします。」

「ゼロ。お願い。」

（何？この状況は・・・）

ゼロは、困惑していた。溜まりに溜まった仕事を片付けていると、いきなりシャーリーとフェイトが来てお願いと頭を下げてきた。

「えっと、まず頭を上げて。事情を説明願います。」

「えっとですね。実は・・・」

シャーリーが、頭を上げて訳を話した。そして、お願いの理由に至って簡単だった。それは、エリオとキャロのデートを見守ってほしいと言う事だった。

「話しはわかりました。でも、なぜです？」

「や、だって、2人だけでお出かけなんて、やっぱり心配だし・・・何があるかわからないし・・・」

（親ばかキターーーーーー）

いくら、2人がまだ、小さいからって過保護過ぎじゃない。それに、どう見たってシャーリーは、面白がっているようにしか見えない。

誰が見ても100%そうだと断言できるようすにゼロは、溜息を吐かずにはいらなかった。

「ねえ、ゼロ。お願い。」

ゼロの手を両手で包んで、うるうるとした上目使いをしてきたフエイト。不覚にも、ドキッとしてしまったゼロ。

「でも、仕事が大量にありますし・・・」

「それなら、私が代わりにやっておくから。ねっ」

「ううう・・・」

正直に言えば、そんな面倒なことは、やりたくないが、このフェイトをどうにかできる自信がゼロにはなかった。

「わかりました。やります。」

「本当！ありがとうございます！」

「それじゃあ、これ今日の予定表です。ステラに送りますね。」

シャーリは、そう言っ、エリオとキャロの今日の予定表のデータをステラに送った。

「何？この予定・・・」

予定表を見たゼロは、呆れていた。それを、とても10歳の子供がするような事ではないものばかりだったからだ。

「10歳の子に何をそんな期待してんの？」

「良いじゃないですか。うまくいけばそれで。」

「はあ、それでは、行ってきます。」

「エリオとキャロの事お願いね。」

気が進まないまま、ゼロは、エリオとキャロの後を急いで追いかけた。

その頃、エリオとキャロの2人は、レールウェイに乗っていた。

「そう言えば、キャロの竜ってフリード以外にもう、一騎いるんだよね？」

「うん。ヴォルテール、黒くてすごく大っきな竜。フリードは、私が卵から育てただけけど、ヴォルテールは、アルザスの土地に着いている古い守護竜なの。だから、私の竜って言うよりは、私がヴォルテールの横で力を貸してもらっているというか・・・そんな感じ。」

「そっか。フリードみたいに紹介してもらえたらうれしいけど、そんなに偉大な竜なら、わざわざ来ってもらって挨拶だけって訳にもいかないよね。」

「うん、大きさも大きさだし。ヴォルテールの力を借りるのは、本当に危険な時だけだから。でも、いつかきつと、紹介するよ。フリードもね、エリオ君のこと本当に友達だと思っているみたいだから。」

「あは、うれしいな。」

「ヴォルテールとも、きつと仲良くできると思う。」

エリオとキャロは、フェイトが心配するほど、子供ではなかったみたいだ。2人仲良く休日を堪能していた。



そして、時間は再びゼロへと戻る。
フェイトのお願いにより、エリオとキャロを追いかけているゼロ。
予定表を見ながら、2人を探していた。

「今の時間なら、たぶん公園にいるはずなんだけど・・・」

< マスター >

「ん？どうしたステラ？」

< Dr. スカリエッティから、通信です >

「ドクターから、わかったつないで。」

ステラが、通信をつなぐと空間モニターを映し出した。もちろん、人目に付かない場所へ移動して

『やあ、ゼロ。調子はどうだい?』

「変わりないですよ。それより、どうしました?」

『実はね、少しお願いがあつてね。』

(また、お願い・・・今度は何だ・・・)

立て続けのお願いにゼロは、多少嫌気が差していた。

『レリックに関して何だが。』

「レリック?」

『そう、それが・・・』

「ん? ドクター、ちょっと待って!」

『どうしたかね?』

「管理局からの通信です。これは、キャロから?」

『こちら、ライトニング4。緊急事態につき現場状況を報告します。サードアベニューF23の路地裏にてレリックと思しき、ケースを発見。ケースを持っていたと思われる小さな女の子が1人。』

『女の子は、意識不明です。』

『指示をお願いします。』

キャロは、六課にいるのはたちに指示を仰いだ。

「スバル、ティアナ。ごめん、お休みは一旦中断。」

『はい！』

『大丈夫です。』

「救急の手配はこっちです。2人はそのまま、その子とケースを保護。応急手当をしておいて。」

『『はい！』』

「全員、待機態勢。席を外してる子たちは配置に戻ってな。」

『はい。』

「安全確実に保護するよ。レリックもその女の子もや」

「はいです。」

はやての指示で、六課隊員が配置につく。

「それと、ゼロ。今どこにいる？」

『公園です。』

「なら、すぐにエリオとキャロに合流して。」

『わかりました。』

フェイトに指示を受けてゼロは通信を切った。

「ドクター、女の子って例の・・・」

『ああ、そう言うことだ。すでに、ルーテシアとナンバーズにも動いてもらっている。君もうまくやってくれたまえ。』

「了解。」

そう言って、スカリエッティとの通信を切った。

「さてと・・・行きますか。」

ゼロは、急いでエリオとキャロの下へと向かった。

その頃、エリオとキャロは、女の子に応急手当をした後、応援が来るのを待っていた。

「ん・・・」

「・・・」

「エリオ！キャロ！」

「スバルさん、ティアさん。」

すると、そこにスバルとティアナが、走ってきた。

「この子か。また、随分ボロボロに・・・」

「地下水路を通って、かなり長い距離を歩いて来たんだと思うんです。」

「まだ、こんなに小っちゃいのに。」

「はい・・・」

「ケースの封印処理は？」

ティアナは、エリオに聞く。

「キャラがしてくれました。ガジェットが、見つける心配はないと思います。それから、これ。」

エリオが、ケースを持ち上げて見せた。

「ケースがもう、1個あった？」

ケースを見ると、ここにあるケースの他にもう1個あったよ
うな跡があった。

「今、ロングアーチに調べてもらってます。」

「うーん。隊長たちとシャル先生、リイン曹長がこっちに向かってくれてるそうだし。とりあえず、現状を確保しつつ、周辺警戒ね。」

「「はい。」」

『そう、レリックが・・・』

「それが、小さな女の子が持ってた言うのも気になる。」

はやては、現在、聖王教会、教会騎士団長カリム・グラシアに通信をしていた。

「ガジェットや召喚士が、出てきたら、市街地付近での戦闘になるべく迅速に確実に片づけなあかん。」

『近隣の部隊にはもう？』

そして、カリムのそばには、フェイトの義兄で、なのは、はやてと古い付き合いのクロノ・ハラオウンがいた。

「うん。市街地と海岸線の部隊には、連絡したよ。」

『ああ。』

「奥の手も、出さなあかんかもしれん。」

『そうならない事を祈るがな。』

そして、一方、現場になのはたちが到着していた。すぐに、女の子をシャルが診察する。

「うん。バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし。心配ないわ。」

「はい。」

「よかった。」

「ごめんね。みんな、お休みの最中だったのに・・・」

フェイトは、申し訳なく言う。

「いえ。」

「平気です。」

「ケースは、このままへりで運ぶから、みんなは、こっちで現場調査ね。」

「」「はい！」「」

「それじゃあ、ゼロ君。この子をへりまで抱いてってくれる。」

「わかりました。」

「あつ、ガジェット来ました！」

それから、少ししてガジェットの反応がきた。

「地下水路に10基ずつのグループで総数。16・・20!」

「海上方面、12機体が5グループ。」

「多いな。」

「どうします?」

「そうやな・・ん?」

はやてが、悩んでいると、通信がきた。

『スターズ2からロングアーチへ。こちら、スターズ2。』

通信してきたのは、ヴィータだった。

『海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かっている。それから、もう1人。』

『108部隊。ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうなんです。参加しても、よろしいでしょうか?』

「うん。お願いや。ほんなら、ヴィータは、ラインと合流。協力して海上の南西方向を制圧。」

『南西方向、了解です。』

「なのは隊長とフェイト隊長は、北西部から。」

『『了解。』』

「ヘリの方は、ヴァイス君とシャル、それにゼロ君に任せてええか？」

『お任せあれ。』

『しっかり守ります。』

『了解です。』

はやては、みんなに指示を出す。

『ギンガは、地下でスバルたちと合流。別件の話も聞かせてな。』

「はい。」

ギンガは、急いで地下へと向かった。

「さて、みんな！短い休みは堪能したわね。」

「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合入れて行こう！」

「「はい！」」

こうして、束の間の休日が終わった。

第20話 休日の終わり（後書き）

はい、第20話でした。どうも、Theaterです。

ナンバーズでませんでした。

まあ、予想通りと言うか何と言うか……。それより、ついにヴィ
ヴィオが出

て来たのに全く存在感がない。まあ、この先に活躍が控えているで、
今は我慢
だ！

それと、ゼロはヘリに乗せる事にしました。地下に行かせるとルー
テシアと会

う事になってしまい、その辺がややこしくなりそうなので、こうな
りました。

たぶん、ゼロの見せ場はあまりないと思うので、大人しくしてても
らいたいと
思います。

では次回、第21話で会いましょう。

番外編 妹たちとの出会い3（前書き）

ナンバーズ3の登場。

番外編 妹たちとの出会い3

「で、何のようですか？」

ゼロは、スカリエッティに呼び出されていた。だが、すでにこのやり取りは、3回目。ゼロも、何となくわかっていた。

「ああ、妹を紹介しようと思ってね。」

「やっぱり、それで今回はどんな子ですか？」

「うん。入ってきたまえ。」

スカリエッティに、呼ばれ1人の女の子が入って来た。

紫の髪をショートカットにしている、2人の姉と比べると、戦闘向きと言うのが一目でわかるくらいの整った体をしていた。

「彼女は、ナンバーズ3。トーレだ。」

「トーレだ。」

「ゼロだ。よろしく。」

ゼロが、差し出した手をトーレが握った。すると、その瞬間トー

レが、ニヤツと笑みを浮かべた。

「どうした？ トーレ。」

「ゼロ。お前、かなり強いな。私と戦え。」

「えっ！ 何で。」

いきなりの勝負を申し込まれ、戸惑うゼロ。だが、トーレはやる気満々な様子だった。

「さ、やるぞ！」

「えっと・・・ドクター？」

「うーん。トーレ、君のISはまだ、調整中だよ。それでも、やるかね？」

「当然！」

トーレは、何が何でも、ゼロと戦いたいようで、自身のISが未調整でも、構わないらしい。

「わかった。相手になるよ。」

「そうではなくてはな。」

こうして、ゼロVSトーレの真剣勝負が始まった。

そして、一同は訓練場に移動した。

「兄さん。頑張れ」

「ファイト。兄さん。」

観客にウーノとドゥーエが応援に来ていた。どちらも、新しい妹より、兄であるゼロの事を応援していた。

「さあ、始めようか。ゼロ。」

「ちょっと待て。ルールを確認する。まず、戦闘方法は、互いに素手だ。で、決着は、相手を戦闘不能にするか、ギブアップさせるか

だ。」

「いいだろう。」

ゼロの提案したルールにトーレは、合意した。そして、ゼロとトーレは、互いに構えた。

「行くぞ！」

次の瞬間。トーレが、ゼロに向かって飛び出した。それをゼロは、動くことなく待ち構えていた。

「はああ！」

トーレは、右ストレートを繰り出した。

「ん！」

「なっ」

ゼロは、避ける事もしないで、そのまま受けた。トーレは、ゼロが避けるなり、受け止めるなりするだろうと思っていた。だが、トーレの攻撃は、ゼロの左頬をとらえていた。

「なぜ、避けない。」

「とりあえず、どのくらいの力か、試したかったんだ。」

「何だと・・・」

ゼロの言葉にトーレは、怒りを覚えた。

「まあ、それなりに強いが、俺には及ばないな。」

ゼロは、トーレの右手を掴んだ。そして、片手一本でトーレをおもいっきり投げ飛ばした。

「わあああ！」

トーレは、訓練場の壁まで飛ばされ、激突した。

「かはっ！」

「おっと。ちょっとやりすぎたか？」

「何を・・・まだ、これからだ！」

トーレは、口元の血を拭い態勢を整えた。そして、ゼロを見て次の攻撃をどうするか考えた。

（さて、どう行く。ただ正面から行けば、さっきの二の舞。なら！）
「ん？」

トーレは、さっきと同じように正面からゼロに向かって行った。そして、一気にゼロと距離を詰めて近接戦闘に持ち込んだ。そこからゼロとトーレの激しい拳と蹴りのラッシュが繰り広げられる。

トーレのその判断は、ある意味正しい。ゼロも、どちらかと言えば、近距離攻撃が主体のスタイルだが、素手での戦闘は、あまり得意な方でない。

（くっ！やり難いな。）

「ほら、どうした？防戦一方になってるぞ！」

完全にくつつかれ、離れる事ができない。それどころか、トーレがノッてきて、ゼロを圧倒するほどになってきていた。

「これで、終わりだ！」

トーレが、戦いを終わらせるため、必殺の一撃を放ってきた。その拳は、確実にゼロの鳩尾を狙っていた。いくら、ゼロでも零距离でそんな所を攻撃されれば、ただではすまないだろう。そして、無情にもトーレの拳は、ゼロを打ち抜いた。

「ふん。大したことなかったな。」

ゼロを強いと聞いていたトーレだったが、こんな呆気なく終わるようではとガッカリしていた。だが、戦いはまだ、終わっていないかった。

「確かに、大したことないな。」

「なに！」

トーレは、信じられないと言った顔をしていた。それもそのはず、急所を打ち抜き、気絶したと思っていたゼロが、まるで何ともないと言うかのように平気な顔をしていた。

「どうしてだ・・・」

「自分で考えろ。」

トーレにそう言うと、ゼロは中腰に構え、右手に魔力を集中させた。

「おい！待て。素手の勝負と言っただろ！」

「素手だよ。けど、魔力を使っただけじゃないって言ってないし。」

確かに、ゼロがルールを確認した時、魔力を使っただけじゃないとは言っていない。

「アクセルムーブ。」

ゼロは、素早くトーレの懐に潜り込み、強力な一撃を放った。

「グフッ」

トーレは、自分よりもはるかに強力な一撃を受けて、倒れ込んだ。

「う・う・うん。」

「起きたか？」

「わ、私は・・・ゼロ？」

「ああ、俺だよ。」

「何故、お前の顔がこんなに近い・・・・・・へっ！」

あれから、1時間ほどして、トーレが目を覚ました。そこで、トーレは不思議に思った。何で、ゼロの顔が自分の顔にこんなに近いのだろう。そして、周りをよく見てみた。すると、とんでもない事になっていた。

「ゼゼゼゼゼ、ゼロ！お前何を！」

「何って・・・ああ、膝枕の事か？」

そう、トーレはゼロに膝枕をされていたのだ。

「くっ！」

「あ、待てって。まだ、寝てろ。」

「わっ！」

急いで、起きようとしたが、ゼロに抑えられてしまった。

「うううう・・・」

「はいはい。よしよし。」

トーレは、悔しさでいっぱいだった。負けただけではなく、こんな子供扱いされたことに。これが、ナンバーズ3、トーレとの出会いだった。

余談だが、トーレが膝枕をされている光景を見て、ヤキモチを妬いている姉2人が居たとか居ないとか。

番外編 妹たちとの出会い3（後書き）

はい、番外編でした。どうも、Theaterです。

今回は、何と言うか・・・駄文だったね
書いてて、ここまで酷いとは思わなかった。これを教訓に次はちゃんとやりま
す・・・・・・・・たぶんね。

それと、次の番外編から、妹たちは何人か一気に出します。正直、
1人1人出
すのはメンドイ。

では、次回の番外編で会いましょう。

第21話 地下水路の戦い（前書き）

フォワードたちの戦いが今始まる。

第21話 地下水路の戦い

なのはたちと別れ、ヘリの護衛として、残ったゼロは、例の女の子を見ていた。

（この子が、ドクターの言っていた子か・・・）

「ん？どうしたのゼロ君？」

「い、いえ。何でもありません。」

ぼーとしていたのをシャル言われ、ゼロは慌てて何でもないと言って、誤魔化した。

「もう、ちゃんと聞いてなきゃダメよ。」

「はい。」

現在、ギンガが、ティアナ達と合流しようと、しながら自分が追っていた事件の詳細を話していた。それをゼロは、ヘリの中で聞いていたのだ。

それで、ギンガによれば、事故現場には、ガジェットの残骸と壊れた生体ポットがあり、その近くに何か重い物を引きずったような跡があったそうだ。そして、それを辿っている最中に、この事件の連絡を受けたようだ。

『それと、この生体ポット少し前の事件でよく似た物を見た覚えがあるんです。』

『私もな・・・』

『人造魔導師計画の素体培養器。これは、あくまで推測ですが、あの子は、人造魔導師の素体として、造り出された子供ではないかと・・・』

「人造魔導師って？」

そして、その頃。フォワードの4人は、地下水路を移動しながら、今の話を聞いていた。

「優秀な遺伝子を使って、人口的に生み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる。それが、人造魔導師。」

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしても、いろんな部分で無理が生じる。コストも合わない。だから、よっぽどうかしてる連中でもないかぎり、手を出したりしない技術のはずなんだけど・・・」

「あっ！」

< A movement reaction percepti
on, at the Gadget Drone. >

その時、キャロのケリユケイオンにガジェットの反応が、あった。

「来ます！小型ガジェット6機！」

それを聞いて、4人は警戒態勢を取った。

「スターズ1、ライティング1、共に2グループ目を撃破。順調で

す。」

「うん。」

「スターズ2とリイン曹長も1グループ目を撃破。」

ここまでは、順調だった。隊長陣が、海上のガジェットを次々に撃破して。だが、順調だったのは、ここまでだった。

「あれは・・・」

そこに来たのは、ガジェットの増援だった。ヴィータとリイン、なのはとフェイト、それぞれの場所にさっきと同じくらいの数が、飛来してきた。

「この反応・・・」

そして、その上空には、1つの人影があった。

「ふふっ。クワットロのインヒューレントスキル、シルバーカーテン。嘘と幻のイリュージョンで、まわってもらいましょう。」

そこから、戦局が大きく変わった。ロングアーチが、ガジェット
の航空反応が、以上に増大し、誤認ではないかと確認するが、すべ
て実機と出た。

「幻影と実機の構成編隊。」

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちよつとキリがないね。」

「ここまで、派手な引き付けをするってことは・・・」

「地下かへりに主力が向かっている。」

なのはたちは、仮説を立てた。海上のガジェットは、ただの囷。
真の目的は、地下水道かへりの方ではないかと。

「なのは。私が、残って、ここを抑えるからヴィータと一緒に。」

「フェイトちゃん？」

「コンビでも、普通に空戦してたんじゃ、時間が掛かり過ぎる。限定
解除すれば、広域殲滅でまとめて墮とせる。」

「それは、そうだけど・・・」

「何だか、嫌な予感がするんだ。」

「でも、フェイトちゃん・・・」

『割り込み失礼・・・』

なのはとフェイトが、そんな相談をしていると、突然割り込み通信が入った。

『ロングアーチからライトニング1へ。その案も、限定解除申請も部隊長権限で却下します。』

「はやて!」

「はやてちゃん! 何で、騎士甲冑?」

割り込みをしてきたのは、はやてだった。そして、はやては何故か騎士甲冑を着ていた。

『嫌な予感、私も同じでな。クロノ君から、私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ。ちゅうことで、なのはちゃん、フェイトちゃんは、地上に向かってゼロ君と一緒にヘリの護衛。ヴィータとリインは、フォワード陣と合流。ケースの確保を

手伝ってな。』

「了解！」

『君の限定解除許可が出せるのは、現状では僕と騎士カリムの一度
ずつだけだ。承認許諾の取り直しは難しいぞ。使ってしまったいい
のか？』

ところ変わって聖王教会。はやては、クロノに限定解除の許可を
求めている。

「使える能力を出し惜しみして、後で後悔するんはいややからな。」

『場所が、場所だけにSSランク魔導師の投入は、許可できない。
限定解除は、3ランクのみだが、それでいいか？』

「S・・・それだけあれば十分や！」

『はあ』

クロノは、溜息を1つ吐いた。

『八神はやて、能力限定解除3ランク承認。リリースタイム120分。』

「リミットリリース！」

はやての限定解除がされ、はやてに魔力が戻っていく。そして、はやての周囲が、白くまばゆい光で照らされていった。

「よし。久しぶりの広域遠距離魔法。行ってみようか。」

「ん？」

「どうしたの？ゼロ君。」

「何か・・・巨大な魔力反応が・・・」

ヘリで移動途中、海上の方で巨大な魔力反応を感じたゼロ。

「魔力反応。敵なの？」

「いえ。たぶん、この魔力は、部隊長のだと思います。」

「はやてちゃんの？でも、どうして・・・」

「確認しますね。ロングアーチへこちら、ライトニング5。」

ゼロが、ロングアーチへ通信を入れた。そして、ロングアーチからの返答はこうだった。

海上でガジェットが、幻術と実機の混戦編隊で増援してきた。そして、嫌な予感がすると、はやてが言って、隊長陣を地下水路とヘリに向かわせるために、自らが前線に出ることになったと。その為に能力限定解除の許可を得て、3ランクリリースしたそうだ。

「だそうです。」

「そういうことね。なら、ここになのはちゃんとテストロッサちゃん来るのね。」

「そう言うことですな。（八神はやてまで、出て来たか・・・これは、ヤバいかもしれないな。）」

ゼロは、内心落ち着かない気持ちでいた。

（うーん。念のため、ドールを放っておいてよかったな。）

その頃、フォワードの4人は、無事にギンガと合流できていた。
そして、レリックが入ってるケースを探す。

「あっ！ありました！」

数分、探しているとキャロが、ケースを発見した。

「ん？何この音？」

キャロが、ケースを発見すると同時に何か、ドンドンと言う音が聞こえてきた。そして、その音は真っ直ぐキャロへと向かった。

「きゃあああ！」

「てやああ！」

その音は、キャロに向かって、数発の魔力弾を撃った。だが、運よく直撃は避けられ、その直後にエリオが音の正体を弾き飛ばした。

「何だ？」

最初は、姿を消していたのか、見えないでいた音の正体が、姿を現した。現したその姿は、人でない者だった。その者は、ルーテシアの召喚虫ガリューだ。

「あっ！」

そして、それに気を取られている隙にケースをルーテシアが拾った。そして、キャロが取り返そうとルーテシアに近づいて行くと。

「邪魔・・・」

キャロに向かってルーテシアは、魔力弾を放った。

「あつ、きゃああああ！」

咄嗟にキャロは、プロテクションで魔力弾を防ぐが、至近距離で放たれた為、プロテクションは砕け、吹き飛ばされてしまった。

「キャロ！くっ！わあああ！」

吹き飛ばされたキャロを受け止めようとするエリオだったが、勢いがあり過ぎた為、一緒に飛ばされ柱に激突した。

「・・・」

「うおおおお！」

ガリユーが、エリオとキャロに追撃をしようとする。だが、それをスバルが、防いだ。

「はあああ！」

そして、ギンガもガリユーに一撃を浴びせて、2人から遠のかせた。

「こらー！その女の子！それ、危険な物なんだよ。触っちゃダメ、こっちに渡して。」

「・・・！」

ルーテシアは、そんな言葉は無視しようとしたが。

「ごめんね、乱暴で。でも、これ本当に危ない物なの。」

幻術で姿を消していたティアナが、ルーテシアの首元に魔力刃を突き付けていた。

「残念だけど。それは、できないよ。」

「えっ？きゃあああ！」

それは、突然の事だった。突然ティアナの横で声がしたと思うといきなり、ティアナは吹っ飛ばされた。

「だ、誰だ！」

「名乗るほどの者じゃありません。」

ティアナを吹っ飛ばした奴は、全身を黒い服で、顔をフードで隠している男だった。そして、その男はルーテシアのそばまで行った。

「大丈夫か？ルー。」

「まったくもう・・・私たちに黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ。ルールもガリューも。」

「アギト・・・それに・・・」

へストップだよルー。今俺は、管理局側にいる。名前は言わないでね。それとここにいる俺は、ドールだから。▽

今ので分かるように、フードの男の正体は、ゼロのファミリアドールの分身だった。

へうん。わかった。▽

「さてと、やりますか。アギト。」

「おうよ！烈火の剣精アギト様が相手だ。お前ら、まとめてかかってこいや！」

第21話 地下水路の戦い（後書き）

はい、第21話でした。どうも、Theaterです。

久しぶりにドールが、出てきました。次回いよいよフォワードとのバトルが始まります。

でも、ドールマスターを使うわけには、いかないし。かと言ってデバイスも無い状態ですし、一体どうやって戦うんだドールよ。

それと、今まで分身人形を造る技名がありませんでしたが、適当に考えた結果

“リプロダクション”にしました。意味は、複写や増殖と言ったものがあるようなので良いかなと思ったので。

あと、動きを封じる時や操る時などに使った技は、“スレッド”にしました。意味は糸です。

では次回、第22話で会いましょう。

第22話 捕縛された人形（前書き）

地下水路から脱出し、いきなりピンチに。

第22話 捕縛された人形

「はっ！」

アギトが、スバルたちに向かって、炎を飛ばした。

「くっ！」

「わっ！」

だが、何とかスバルたちは、それを避けることができた。

「ん！」

「・・・」

アギトの炎が、巻き起こした土煙の中をガリユーが突っ込んできた。

「はああ！」

そして、ギンガがそれを迎え撃った。そして、威力はお互いに同

等だった為、どちらもダメージは無く互いに間合いを取った。

「なんの！」

アギトは、さらに炎の弾を撃ってきた。スバルたちは、それを避けながら柱の陰に隠れた。

「ティア、どうする？」

「任務は、あくまでケースの確保よ。撤退しながら、引き付ける。」

「こっちに向かつてるヴィータ副隊長とリイン曹長にうまく合流できれば、あの子たちも止められるかも。だよね？」

「そう。」

「よし。なかなかいいぞ。スバルにティアナ。〜」

これからの動きを確認していると、急に念話が聞こえてきた。

「へ〜ヴィータ副隊長！〜」

念話の相手は、現在こっちに向かっていたヴィータだった。

「私も一緒です。2人とも、状況をよく読んだナイス判断ですよ。」

「ヴィータ副隊長、リイン曹長、今どちらに？」

ヴィータと行動を共にしていたリインもその場にいた。リインは、ティアナとスバルのこの状況下での判断を褒めた。

そして、エリオが2人が今どこにいるのか聞いた。

「ん？ルール。何か近づいて来てる。魔力反応、でけえ！」

「この、魔力は・・・ヴィータとリインか・・・意外と早かったな。」

ドールとアギトが、ヴィータとリインが近づいて来ているのを感じ取った。

「アイゼン！」

< Gigantform >

「行くぞ、リイン！」

「はいです！」

「おりゃあああ！」

ヴィータは、地下水路の壁を叩き壊した。それにより、その場にいたフォワードたちとルーテシアたちは、何事かと焦った。

「捕らえよ、凍てつく足枷。」

そして、リインが壁を壊した際にできた瓦礫の山から飛び出してきた、ルーテシアとアギトに狙いを定めた。

「フリーレンフェッセルン！」

リインは、氷の捕縛魔法を使った。それにより、ルーテシアとアギトと周りの水分が瞬時に凍結され氷の中に閉じ込められてしまった。

「ぶっとべー！」

「・・・」

リインに続いて、ヴィータも飛び出してきて、ガリユを吹っ飛ばした。

「おお、待たせたな。」

「みんな、無事でよかったです。」

「それは、どうでしょうね。」

1人、ドールだけはリインの捕縛魔法もヴィータの攻撃も、受けずにその場で、立っていた。

「お、お前はあの時の！」

「久しぶりですね。」

ヴィータが、ドールを見て驚いていた。それは当然の事だ。そこにいたのは、ホテル・アグスタであった召喚士だったのだから。

「今度こそ逃がさねえぞ！」

「残念ですけど、それはできませんよ。」

「何！っておい！待て！」

ドールは、そう言うのと転移魔法を使って、その場を離脱してしまった。

「くっ！逃がすか！」

「ヴィータちゃん！待ってください。」

「何だよ、リイン。」

ドールを追うとすると、リインに呼び止められた。

「逃げられたです。」

リインは、そう言い捕縛魔法を解いた。すると、そこには捕らえられたはずのルーテシアとアギトは居ず、かわりに大きな穴が空いていた。

「何！」

ヴィータは、すぐにガリユを吹っ飛ばした方を見た。すると、そこには同じように穴があいており、ガリユの姿はなかった。

「くそ！・・・って何だ！」

逃がした事を悔しがっていると、今度は突然地鳴り起きた。

「大型召喚の気配があります。たぶん、それが原因で・・・」

「ひとまず、脱出だ。スバル！」

「はい！ウイングロード！」

スバルは、ヴィータに言われ、ウイングロードをヴィータが空けた穴に螺旋状に伸ばした。

「スバルとギンガが先に行け。あたしは、最後に飛んでいく。」

「はい！」

スバルとギンガは、言われた通りウイングロードを先行した。

「キャロ。レリックの封印処理お願いできる。」

「あ、はい。やれます。」

「ちょっと考えがあるんだ。手伝って。」

「はい！」

脱出を前にティアナは、キャロにレリックの封印処理を頼んだ。
何か考えがあるらしく、さっそく封印に取り掛かった。

「ダメだよ、ルール。これは、まずいって。埋まった中からどうやってケースを探す？ あいつらだって局員とはいえ、潰れて死んじやうかもなんだぞ。」

「あのくらいのレベルなら、これくらいじゃ死なない。」

リインの捕縛魔法を抜けて、地上に出たルーテシアたち。ルーテシアは、そこで、地震を起こすことができる召喚虫、地雷王を召喚していた。

「ルーの言う通りだ。この程度では死なない。」

そして、転移魔法で離脱したドールも、そこにいた。

「ケースは、後でクワットロとセインに頼んで探してもらう。」

「よくねえよ、ルール！あの変態医師とナンバーズ連中と関わっちゃダメだって、ゼストの旦那も言ってただろう？あいつら、口ばかりうまいけど、実際ところ、あたしたちの事なんて、せいぜい実験動物くらいにしか・・・」

「そんな、つもりは無かったんだけど・・・」

「あっ！ゼロは、違う！ゼロは、あいつらと違って信用しているよ！」

「そうか、それはありが・・・」

ドールが、言い終わる直前にどーんと大きな音がした。

「やっちゃまった・・・」

どうやら、完全に地下水路が崩れてしまったようだった。

「ガリユー、戻っていいよ。アギトとゼロのドールが居てくれるから。」

「・・・」

ガリユーは、ルーティアの言う通り戻った。

「地雷王も・・・ん？」

ルーテシアは、地雷王も戻って良いと言った瞬間、地雷王の体中にチェーンバインドが掛けられた。

「な、何だ？」

「どうやら、来たみたいだな。ルー、こっち。」

「えっ？」

ドールは、ルーテシアの手を引っ張り自分の方へ引き寄せ飛んだ。すると、直後にルーテシアのいた場所に魔力弾が、通った。

「この！オラ！」

そして、すぐにアギトが反撃に炎弾を撃った。それに続いて、ルーテシアとドールも飛びながら、魔力弾を撃ち反撃に出た。だが、それらは全て、避けられてしまった。

「よっと。」

ドールは、ルーテシアを抱えながら、地面に降りた。

「つと・・・」

だが、降りた直後、ドールとルーテシアにエリオが、ストラーダが向けた。一方、アギトはリインのフリジットダガーに囲まれていた。

「ここまでです。」

「くっ！」

リインは、ルーテシア、アギト、ドールの3人にリングバインドを掛けた。そして、アギトは、ゆっくりと地面に降りて行った。

「子供苛めてる見てえで、良い気分はしねえが、市街地での危険魔法のように公務執行妨害、その他諸々で、逮捕する。」

「ちなみに、子供と言うのは、私も含まれるのですか？」

「んなわけねえだろ！」

ドールの言った冗談に、結構本気でキレたヴィータだった。

第22話 捕縛された人形（後書き）

はい、第22話でした。どうも、Theaterです。

今回は、まあこれと言って特に何も言う事はありませんね。

それと、ナンバーズがなかなか出て来なかったですけど、次回は今度こそ出てきます。

では次回、第23話で会いましょう。

第23話 奇跡の生還（前書き）

へりは、一体どうなるのか？

第23話 奇跡の生還

ある廃ビルの屋上に2人の女の子がいた。1人はメガネを掛け、髪を2つに結んでいて、もう1人は、長い髪を1つに結んでいて、何か棒状の物を持っていた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「うん。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく、見える。」

そこにいたのは、ナンバーズ4のクワットロとナンバーズ10のディエチだった。ディエチは、左目のスコープでヘリを見ていた。

「でも、良いのかクワットロ、撃ちやって？ ケースは、残せるだろうけど、マテリアルの方は、破壊しちゃう事になる。」

「ふふ。ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃くらいでは死んだりしないから、大丈夫だそうよ。」

「ふーん。」

ディエチは、頷くと棒状の物を覆っていた布を取った。そして、現れたのは、ディエチの固有武装イノームスカノンだった。

「ん？」

『クワットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさん、それと何故か、兄さんのドールが、捕まっているわ。』

「ああ、そう言えば、例のチビ騎士に捕まっていましたね。」

ナンバーズ1のウーノから通信がきた。

『今は、セインが様子を覗ってるけど・・・』

「フォローします？」

『お願い。』

クワットロにフォローを頼むとウーノは通信を切った。

〈セインちゃん？〉

〈はいよ、クワ姉。〉

〈こっちから、指示を出すわ。お姉様の言う通りに動いてね。〉

〈うーん、了解〉

そして、一方、捕まったルーテシアたちは、ヴィータたちにいる
いろ聞かれていた。

〈はぁい、ルーお嬢様、お兄様。〉

〈クワットロ・・・〉

〈どうした？何か用か？〉

そこへ、突然クワットロから念話きた。

〈何やらピンチのようで、お邪魔でなければ、クワットロがお手伝
いします。〉

〈お願い・・・〉

〈はぁい！では、お嬢様、クワットロの言う言葉をその赤い騎士
に・・・〉

クワットロは、とても怪しい顔でルーテシアに言った。

「ん！」

「ゼロ君？今度はどうしたの？」

「高エネルギー反応・・・」

ゼロは、何処からか高エネルギー反応を感じ取った。そして、目を瞑り、ヘリの周囲の気配を探った。

（何だ？このエネルギー反応は・・・どこかで覚えがあるような・・・あっ！）

ゼロは、高エネルギー反応が、どこかで覚えがあるような感じがあった。そして、記憶を辿って行くうちに、ある事に思い当たる。

（まさか・・・ヘヴィバレルか！冗談じゃない、いくら俺でもあれを受けたらただじゃすまない。こうなったら・・・）

ゼロは、ヘヴィバレルを何とかしようとする事を始めた。

「インヒューレントスキル…ヘヴィバレル発動。」

「逮捕はいいけど。」

ディエチは、自らのISを発動させ、ヘリに狙いを定めた。そして、そのそばでクワットロが、ルーテシアに言葉を伝えていた。

「逮捕はいいけど・・・」

ルーテシアは、クワットロの言った通りの言葉を復唱した。

「大事なヘリは、放っておいていいの？」

「な！」

「あ！」

その言葉にヴィータたちは、驚きの声を上げた。

「後12秒。11、10。」

「ああ、お嬢様。もう、一言追加いいですか？」

クワットロは、ルーテシアに言葉の追加を頼んだ。

「あなたは、また守れないかもね。」

「くっ！」

その一言にヴィータが絶句する。そして、あの雪の日の記憶が蘇ってきた。

「発射。」

そして、ヘリに向かってヘヴィバレルが発射された。それを見ていたロングアーチのオペレーターたちやヘリの護衛に向かっていたのはとフェイト、そして、海上にいるはやても、誰もがその光景を黙って見ている事しかできないでいた。

「くっ！間に合え！」

ゼロが、動くが無情にもヘヴィバレルはヘリに着弾した。

「砲撃・・・ヘリに直撃・・・そんなはずない。状況確認？ジャミングが酷い。」

ロングアーチが、ヘリの状況を確認しようとするが、確認できない。

「そんな・・・」

「ヴァイス陸曹とシャル先生、それにゼロさんが・・・」

砲撃が、ヘリに直撃したと聞いたティアナたちは、啞然とした顔をしていた。そして、その横では、ドールが、何かを感じ取った。

「ん？・・・ルー。」

「何？」

「お別れです。また、会いましょう。」

ドールが、ルーテシアにそう告げると、体がだんだんと透けて行って、最後に光の粒子になって消えた。

「えっ！消えた？」

「てめえ！」

ヴィータが、ドールが消えた直後、ルーテシアに掴みかかった。

「ふ、副隊長、落ち着いて！」

「うるせえ！おい！仲間がいんのか？どこにいる？あいつは、どこに消えた？言え！」

「ん！」

ヴィータが、ルーテシアを問い詰めていると、ギンガがエリオの後ろに何かが居るのを見た。

「エリオ君！足元に何か！」

「えっ？あっ！」

「いただき！」

突然、地面から女の子が飛び出してきて、エリオが持っていたケースを奪った。そして、そのまま地面に潜って行った。

「くそ！」

その女の子を追うとみんなが、ルーテシアから目を離した。

へルーお嬢様、ナンバーズ6番セインです。私のISディープダイバーで、お助けします。フィールドとバリアをオフにして、じっとしててくださいね。く

へうん。く

「よっと。」

「なっ！いっ！」

ルーテシアが、じつとすると、足元からセインが出てきてルーテシアに抱きついた。そして、ヴィータたちがそれに気付いたが、一瞬遅く逃げられてしまった。

「アギトは？」

「ああ、アギトさんなら、さっきの一瞬で離脱しました。さすが、良い判断です。」

そう言って、セインとルーテシアもその場から、離脱した。

「反応ロストです・・・」

「くそ！ ロングアーチ、ヘリは無事か・・・あいつら、墜ちてねえよな？」

「うふふのふふ。どう、この完璧な計画？」

「黙って。今、命中確認中。」

クワットロが、鼻歌を歌いながら計画の完璧さに酔っていた。対してディエチは、ヘヴィバレルが着弾した後のヘリの様子を覗いていた。着弾した際の煙がヘリを覆っていたが。だんだんと晴れて行き、その姿が現れようとしていた。

「あれ・・・ヘリの姿ない。」

煙が、完全に晴れるが、ヘリの姿がどこにもなかった。

「嘘でしょ。まさか、ディエチちゃん、跡形もなく消し飛ばしちゃったの？」

「そんなわけないだろう！フルパワーで、撃ったわけじゃないんだから、跡形もなくななんて。」

クワットロとディエチが、そんな事を言い争っていた。すると、どこからか声が聞こえてきた。

「ロングアーチ及びスターズ、ライトニングへ、こちらライトニング5。ヘリへの砲撃を回避することに成功。」

「え、ゼロ君！どこに？」

「なのは！上！」

ゼロの声が聞こえてきたが、ヘリの姿を確認できないでいたのは。すると、フェイトが空を見上げて言った。

なのはは、言われた通り、空を見上げるとそこには、遥か上空にヘリが飛んでいたのだ。



「はあ、死ぬかと思った・・・」

「私も・・・」

ヘリを操縦していたヴァイスと女の子を見ていたシャルは、ぐったりとしていた。

「間一髪でしたね。」

「ゼロ君。一体何をしたの？」

「ただの転移魔法ですよ。」

そう、ゼロがやったのはただの転移魔法だった。ヘヴィバレルが当たる寸前にゼロは、転移魔法を発動させ、ヘリを回避させていた。しかし、ヘヴィバレルが発射されるまでの僅かな時間では、このヘリの質量を転移させるほどの術式を完成させる事は非常に難しいことだった。なので、ゼロはあえて、転移座標を無視して、とにかく回避する事に集中した。

それによって、結果ヘリは元居た場所から、遙か上空に転移したのだ。

「でもそれって、場合によっては、とんでもない所に転移していたって事も考えらるんじゃない？」

「そうですね。もしかしたら、いきなり地面とか、転移してすぐ目の前にビルがあって激突とかあったかもしれないですね。」

「……」

「ま、結果オーライですよ。」

そんな恐ろしい事を何事もないような感じで話すゼロにシャマルは、少し恐怖した。

第23話 奇跡の生還（後書き）

はい、第23話でした。どうも、Theaterです。

へりは、無事でした。まあ、当たり前かな。

でも、転移魔法で回避するって、可能なんですかね。瞬間移動とかと違って、

あんな短い時間で発動するとか。

では次回、第24話で会いましょう。

第24話 敗北のナンバーズ（前書き）

ケースを奪われたフォワードたち、だが・・・

第24話 敗北のナンバーズ

「あらゝ」

「避けられた！マジで！」

遙か上空で飛んでいるヘリを見て、あり得ないと言った顔をしていた、クワットロとディエチ。

「計画、失敗かしら・・・あら？」

すると、クワットロとディエチがいる廃ビルの屋上に金色の魔力弾が飛んできた。2人は、魔力弾が当たる寸前に、別の廃ビルに飛び移った。

「見つけた！」

「あっ！こっちも！」

「速い！」

飛び移って、安心したのも束の間。そこには、素早くフェイトが、来て2人を捕縛しようとする。しかし、捕まるわけにはいかない、クワットロとディエチは、さらに逃走をした。

「止まりなさい！市街地での危険魔法使用及び殺人未遂の現行犯で逮捕します。」

フェイトは、2人を飛んで追いながら、自分の周りにスフィアを展開した。

「今日は、遠慮しておきます！IS発動シルバーカーテン。」

対して、クワットロは空を飛びながら、ディエチはビルの間を跳びながら、逃げていた。そして、クワットロは、自らのISを発動させ、自分とディエチの姿を消した。

「あっ！はやて！」

「位置確認。詠唱完了。発動まで後4秒。」

「了解。」

フェイトは、何故かその場から離れて行った。

「離れた？何で？」

「まさか・・・」

クワットロは、何か嫌な予感がして、上空を見た。すると、そこには、巨大な魔力の塊のような物があった。

「広域空間攻撃！」

「うっそ〜ん。」

その正体は、はやてが、誇る広域殲滅魔法の1つ。

「遠き地にて、闇に沈め。デアボリック・エミッション」

次の瞬間、はやてのデアボリック・エミッションは、一気に範囲を広げて行き、クワットロとディエチを飲み込もうとした。

「「あああああああ！」」

飲み込まれないよう、必死に逃げるクワットロとディエチ。途中から、クワットロがディエチを抱えて飛んだ。

< They never surrender. Judged

t o h a v e i n d a n g e r o f e s c a p e . >

「ん！」

だが、2人が逃げた方向には、フェイトが先回りしてた。

< Knock out by buster. After that, arrests it. >

そして、その後ろには、なのはがいた。クワットロとディエチは、完全に包囲され、絶体絶命のピンチに陥った。

「ディエチ、クワットロ、じっとしている！」

「「あっ」」

「IS発動ライドインパルス。」

そこに、ディエチとクワットロに話しかける者がいた。紫髪のシヨートカットにISを使う。それらが、該当する者は限られてくる。

「トライデント・・・スマッシュャー！」

「エクセリオン・・・バスター！」

フェイトとなのはは、カートリッジをロードし、ディエチとクワットロを挟み込むように、砲撃魔法を撃ちこんだ。

「やった！」

「ビンゴ！」

その様子を見ていた、ロングアーチの面々は歓喜の声を上げた。

「じゃない、避けられた！」

「直前で救援が入った。」

「アルト。追って！」

「は、はい！」

「ふう、トーレ姉様、助かりました。」

「感謝・・・」

「ぼーと、するなさっさと立て。馬鹿者共め。」

「ほんと、馬鹿者だな。」

「えっ？」

ナンバーズ3トールのおかげで、何とか窮地から脱することができたクワットロとディエチ。安全圏まで逃げたところで、一旦止まる。そこで、クワットロとディエチは、トールに感謝した。そして、トールがさっさと立てと言ったところで、後ろからいきなり声が聞こえた。

「ぜ、ゼロ兄・・・」

「ゼロ兄様・・・」

「よう。クワットロにディエチ。」

そこに居たのはゼロだった。ステラを肩にトントンと叩きながら、座り込んでいるクワットロとディエチを見ていた。

「さっきは、よくもやってくれたな。」

「えっ、さっきって・・・まさか・・・」

「そうだよ。ヘリに乗ってたんだよ!」

「ああ、痛い痛い! やめてゼロ兄・・・」

「やめてください! 痛いです、お兄様!」

ゼロは、クワットロとディエチの頭をグリグリとした。そして、しばらくした後、2人を解放した。

「まったく。」

「で、何でお前がここにいる?」

「一応、心配して来てやったんだが・・・いらなかったか?」

ヘリの中から、クワットロとディエチが、ピンチになっているのを見ていたゼロ。助けようにも、今は管理局の人間を演じている。表だって助けるわけにもいかず、黙って見ていることしかできなかった。

しかし、そんな時、2人を助けて逃げるトーレの姿を見た。それを見たゼロは、犯人を追うと言ってヘリから、ここまで来たのだった。

「うう・・・酷いよゼロ兄・・・」

「本当です・・・」

「先に酷い事をしたのは、お前らだろ。それにディエチはともかく、クワットロ。お前、俺がへりに乗ってる事知ってたろ？」

「えっ！」

ゼロに言われ、クワットロはギクツとした。どうやら、凶星のよ
うでクワットロは、そっぽを向いて、聞こえないと言う態度に出て
いた。

「えっ！ そうなのクワットロ！」

「さあ、何の事やら」

ディエチが、クワットロに聞くとクワットロは、慌けて見せた。

「まあ、いいけど。それで、レリックは結局どうなったんだ？」

「レリックなら、お嬢と一緒にセインが回収した。」

「ああ、セインも来てたのね。いつも間にか、ドールが消えててル
ーとアギトがどうなったのか気になってたから、よかった。」

「なら、私たちはそろそろ行くぞ。」

「うん。他の連中にもよろしく言ってくれ。」

トーレたちとゼロは、そこで別れた。

そして、ゼロはヘリに戻って、引き続き護衛の役目をした。その後、ヴィータ達がレリックを奪われ、任務失敗で落ち込んでいるかと思っていたが、何とレリックが奪われていなかったとゼロは聞いた。

何でも、ティアナのシルエットで、レリックに細工をしていたらしい。

「それじゃあ、あいつら今頃、空っぽのケースを開けて、驚いているのかな？」

ゼロは、妹たちが空のケースを開けて、目を丸くしているのを想像して、少しだけ笑ってしまった。そして、例の女の子はと言うと、聖王病院に運ばれ、手当てを受けているそうだ。

「あの子が、こっちにいらなくなると・・・面倒なことになりそうだな。」

この先、訪れるであろう戦いにゼロは、溜息を吐きそうになる。

第24話 敗北のナンバーズ（後書き）

はい、第24話でした。どうも、Theaterです。

今回は、これと言ったことはありません。

では次回、第25話で会いましょう。

第25話 人形使いの意外な特技（前書き）

なのはの代わりにヴィヴィオの相手をするようになったゼロ。

第25話 人形使いの意外な特技

生まれた時の事なんて覚えてないし。人間で言う親、マイスターが誰かなんて事私は知らない。ただ、静かにたぶん随分長い間、眠ってただけ。

気が付けば、白い部屋で実験動物。

自分が、何の為に生まれたのが、わかってただけに辛かった。生まれた意味を何一つ果たせないまま、死ぬ自由さえ無く、苦しいまま。いつか、心と体が壊れて終わるんだって思ってた。

それが、変わったのは。

何か酷くごつごつした手の平と小さな女の子、そして、冷たい目をした奴が、あたしの前に現れてから。

「何だ？」

「置いてっちゃうの？」

「あれは、古代ベルカ式、レプリカではない純粹の融合機だ。火災に気づいてやってくる局員が、見つければ、丁重な保護を受けるはずだ。」

「そこでも、また実験動物？」

「見つける局員次第だな。良い奴に見つかれば、幸せになれるだろ

うし、悪い奴に見つかれば、実験動物だろうな。」

「この連中にほど、酷いものではない。そう、思いたいかな。」

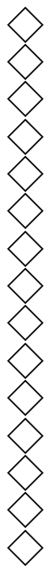
男と青年は、互いに溜息をもらす。

「ゼスト、ゼロ、連れてってあげよ。」

女の子は、融合機の子を拾い上げた。

「いいのか？」

「うん。この子もきっと、私たちと同じだから。」



「はっ！」

まだ、日が昇り切っていない明け方、アギトは目を覚めました。

「うう、くそ！嫌な夢だ。」

アギトは、ルーテシアの懷から飛び出し、空へと上がって行った。

（あんな夢を見たのも、あいつらのせいだな。）

昨日のヴィータたちの事を思い出す。

（氷結魔法を使っていた、変なばってんマークを着けてた白い融合機。たぶん、あいつのロードは、赤い騎士。あいつは、ロードのいない融合機の寂しさなんて、知らねんだろうな。くっ！）

リインの事を考えていると何かイライラしてきた。

「くっそー！何かムカつく！あの、ばってんチビめ！今度会ったら、絶対燃やしてやる！」

「マテリアルか・・・プロジェクトF、人造魔導師・・・どこまで、命を弄ぶ気なんだ・・・」

ゼロは、隊舎の廊下を歩きながら、呟いていた。

「はぁ、あんな小さな女の子が、鍵とはな。世界は、いつまで経っても・・・ん？」

ゼロは、何かに気付いた。

「みんな、集まって何を？」

ゼロの行く手には、なのはとフォワードが、集まっていた。ゼロは、何かと思い近づいて行った。すると、泣き声が聞こえてきた。

「あれは、マテリアル？」

泣き声の主は、例の女の子だった。ゼロは、咄嗟に隠れ、気配を消した。

「何をやってんだ？」

ゼロは、その様子を見てみた。女の子は、なのはにしがみ付き、行っちゃやだと言って泣いていた。なのはとフォワードの4人は、どうしたらいいか分からず、あたふたしている。

すると、そこへフェイトとはやてから通信が入った。フェイトとはやても、その状況を見て？を浮かべていた。そして、フェイトとはやては、すぐになのはの下へとやってきた。

「エースオブエースにも、勝てへん相手は居るもんやね。」

へフェイトちゃん、はやてちゃん、あの助けて・・・

「スバル、キャロ、とりあえず離れて落ち着こか。離れて休め。」

「あ、はい・・・」

そこへ、フェイトが女の子に近づいて行った。そして、視線を女の子に合わせて、うさぎのぬいぐるみを手に取った。

「こんにちは。」

「えっ？」

「この子は、あなたのお友達？」

「ヴィヴィオ、こちらフェイトさん。なのはさんの大事なお友達。」

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

フェイトは、やさしく話しかける。

「ん．．．」

へとりあえず、病院から連れて来たんだけど、何か離れてくれないの。＼

へふふっ、懐かれちゃったのかな。＼

へそれで、フォワード陣に相手してもらおうと思ったんだけど．．．
＼

なのはは、フォワード陣を見る。

へへへすみません．．．＼＼＼

へふふっ、いいよ任せて。＼

フェイトは、自分が何とかすると言った。

「ねえ、ヴィヴィオは、なのはさんと一緒にいたいなの？」

「うん。」

「でも、なのはさん大事な御用で、お出かけしなきゃいけないのに、ヴィヴィオが我儘言うから、困っちゃってるよ。この子も、ほら。」

フェイトは、うさぎのぬいぐるみに困ったポーズをさせた。すると、突然ふしぎな事が起こった。

《うん。私も困っちゃうな。》

「「「えっ・・・」」」

うさぎのぬいぐるみは、突然動き出した。

《ヴィヴィオは、なのはさんを困らせたい訳じゃないんだよね。だから、私と一緒に良い子で待ってよ。》

ぬいぐるみは、そう言ってヴィヴィオの頭の上に乗った。

「えっ！何で、ぬいぐるみが勝手に動いてんの？」

「何で？どうして？」

「はあ、ゼロ君居るんやろ。」

「バレてましたか・・・」

ゼロが、苦笑しながら出てきた。

「ゼロさん・・・ああ！ゼロさんのレアスキル！」

「その通り、ドールマスターだよ。ほら。」

ゼロは、手を動かして、ぬいぐるみを自分の肩まで移動させた。

「あっ！」

ヴィヴィオは、ぬいぐるみを追いかけて、ゼロの下まで来た。ゼロは、フェイトと同じように目線を合わせると、やさしくヴィヴィオの頭を撫でた。

「ねえ、ヴィヴィオ。なのはさん、これからお仕事があるんだ。だから、お兄ちゃんと一緒に遊ばないかな？」

「一緒に？」

「そう、一緒に。もちろん、この子も一緒に。」

ゼロの肩で座っていたぬいぐるみが、ヴィヴィオの頭に飛び移った。

「わぁ、うん！」

ヴィヴィオは、すでに涙を引っ込めて、眩しいくらいの笑顔を見せていた。

「では、隊長方、今のうちに。」

「うん。ありがとうゼロ君。」

ヴィヴィオの相手をゼロに任せ、なのはたちは聖王教会に向かった。

「ごめんね、お騒がせして。」

「いや、ええもん見せてもらったよ。」

「うん。」

聖王教会に向かうへりの中、なのはは、さっきの事を謝った。

「でも、ゼロ君があんな事するんなてな。意外やわ。」

「そんなことないと思うけど、ゼロって結構優しいところあるし。」

「それで、あの子はどうでしょうか？何なら、教会に預けとくんでもええけど。」

「平気。帰ったら、私がもう少し話して、何とかするよ。」

「そうか？」

なのはが、ヴィヴィオを何とかすると言い出した。

「今は、周りに頼れる人が居なくって、不安だと思うから。」

「それじゃあ、エリオ、キャロ手伝ってもらっていい？」

「「はい！」」

なのはたちが、行った後、ヴィヴィオの相手をエリオとキャロに手伝ってもらおうとゼロが、2人に頼んだ。

「それと、ティアナ、スバル。」

「はい？」

「悪いけど、エリオとキャロの分の仕事を引き受けてもらっているかな？」

「はい！いいですよ！」

「ぜ、ゼロさん！そんなことしてもらおう訳には・・・」

「そうですよ。」

ゼロの発言に慌てるエリオとキャロ。

「いいって、エリオ、キャロ。おもりを押し付けちゃう代わりだから。ねっ」

「で、でも。」

「ほら。さっさと行った行った。」

スバルに背中を押されて、ゼロの後ろを付いて行った。

「それで、ゼロさんどこに行くんですか？」

「うーん。とりあえず俺の部屋に行こう。たぶん、ヴィヴィオが喜んでくれそうな物があるし。」

そういう事で、一同はゼロの部屋に向かい始めた。

第25話 人形使いの意外な特技（後書き）

はい、第25話でした。どうも、Theaterです。

ドールマスターでこれをやってみたかったです。ちょうど、Vidのクリ

スみたいな感じに動かすのを。

ちなみに、声なんですけど、表向きは魔法で変えて話していると言う事にして

おいて実際は、戦闘機人なんで声帯をコントロールして変えていることしたいと思っています。

そして、次回はゼロの子守りの様子をやりたいと思います。ヴィヴィオが喜ん

でくれそうなものとは一体何なのか？

えー、あまり大したことはないので、期待はしないでください。

では次回、第26話で会いましょう。

第26話 六課設立の理由（前書き）

六課設立の理由が明らかに

第26話 六課設立の理由

「はい、到着。」

エリオとキャロ、ヴィヴィオを連れて、ゼロは自分の部屋に来た。

「どうぞ、中に入って。」

ゼロに促されて、エリオとキャロは、部屋の中に入った。ちなみに、ヴィヴィオはと言うとゼロの腕の中にいた。

ここに来る途中、最初はゼロと手を繋いでいたヴィヴィオだったが、ちょうどロビーからゼロの部屋までの中間地点で突然ヴィヴィオが抱っこしてと言いだした。ゼロは、どうしようか迷ったが、ヴィヴィオが涙目になってきたので、仕方なく抱っこしてあげたという訳だ。

「わー、綺麗な部屋ですね。」

「そうでもないよ。」

ゼロは、否定するが、実際はかなり綺麗な部屋だった。だが、実を言うと、綺麗にしていると言うよりは、あまり部屋に物が無く、さっぱりしていて、ゼロも寝る以外はあまり部屋にいないので、簡単な掃除で済んでしまうのだ。

「それで、ゼロさん何をして遊ぶんですか？」

「うん。ちょっと待ってね。」

ゼロは、目を瞑り精神を集中させる。そして、頭の中でイメージを固める。描くイメージは、動物たちの楽園。ゼロはゆっくりと目を開け息を吸い込んだ。

「ドールマスター“エデン オブ スタッフドール”」

ゼロは、高らかな声で言う。すると、部屋にあるクローゼットが、急にガタガタと震えだした。そして、次の瞬間、バーンと勢いよく扉が開いたと思うと、そこからたくさんの方が飛び出してきた。エリオたちは、それをよく見た。

「えっ！ぬいぐるみ？」

飛び出してきたのは、大量のぬいぐるみ達だった。犬に猫、その他いろんな種類の動物たちが、部屋中に溢れ返っていた。

「わー、すごいすごい！」

「すごいです。」

そんなぬいぐるみたちを見て、ヴィヴィオとキャロは、目を輝かせていた。そこは、やっぱり女の子と言う事で、こういうのが好きなんだなと思うゼロだった。

「さあ、みんなで遊ぼう。」

ここから、この部屋は、夢の中のような幻想的な空間と化した。



そして、一方なのはたちは、聖王教会へと到着していた。

「高町なのは一等空尉であります。」

「フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官です。」

「いらっしやい。初めまして、聖王教会 教会騎士団 騎士カリム・

グラシアと申します。どうぞ、こちらへ。」

カリムに案内され、なのはたちは席へ移動した。そして、そこには先客が先に座っていた。

「失礼します。」

「クロノ提督、少しお久しぶりです。」

「ああ、フェイト執務官。」

「ふふ、2人ともそんな固くならないで、私たちは個人的にも友人だから。いつも通りで平気ですよ。」

「っと騎士カリムが、仰せだ。普段と同じで・・・」

「平気や。」

カリム、クロノ、はやての3人が言う。

「じゃあ、クロノ君久しぶり。」

「お兄ちゃん元気だった？」

「お！それは、止せ。お互いもう、いい歳だぞ。」

「兄妹関係に年齢は関係ないよ、クロノ。」

フェイトにお兄ちゃんと呼ばれ、頬を赤くするクロノ。それを、カリムとはやてが、横で笑っていた。

「んっさて、昨日の動きについてのまとめと改めて機動六課設立の裏表について、それから今後の話や。」

「すうすうすう・・・」

「ヴィヴィオ、寝ちゃいましたね。」

「はしゃぎ過ぎて疲れたんだろ。」

現在、ヴィヴィオはたくせんのぬいぐるみに囲まれながら、ゼロのベッドで眠っていた。

「何か、こうして見るとほんと普通の子供ですよね？」

「うん。」

「そうだな。」

眠っているヴィヴィオは、本当に普通の子供のようだった。そんな、ヴィヴィオを見て、エリオは思った。

（この子が、人造魔導師素体だとするなら、知識や言語がはっきりし過ぎてる。人口受精児なら、こうはならない。たぶん、記憶があるんだ元になった人物の・・・）

「エリオ君？どうかした？」

「あっ！ごめん。なんでもない。（プロジェクトFは、どこかでまだ続いてる。）」

ぼーとしていたエリオにキャラが、話掛けると慌てた様子で、何でもないと言った。

（ヴィヴィオを見てたって事は、プロジェクトFの事でも考えてたかな？）

エリオの考えている事をまるで見透かしているかのように、当て

るゼロだった。

「ん？（通信？レジアスから。）」

「ゼロさん？ゼロさんもうかきました？」

「いや、通信が入ったね。ちよつとごめんね。」

ゼロは、2人に見えないように部屋の外に出た。そして、周りに誰もいないのを確認してから、通信を繋いだ。

「はい、ゼロ・レスティア一等陸尉です。」

『遅いぞ！ゼロ。』

「すみません、レジアス中将。少し立て込んでいます。」

『ふん、まあいい。それより、仕事だ。』

レジアスは、モニターを切り替えて、ある場所を印した地図を出した。

「ここに何か？」

『ここに、今地上を騒がせている犯罪者共がいる。主には、質量兵

器の密売。他にも、違法な薬やらをばら撒いているらしい。』

「なるほど、それで私は何を？」

『始末しろ。いつも通りにな。それと、こいつもだ。』

モニターが、また切り替えられ、今度は1人の男が映し出された。そこで、ゼロは驚いた。何せその映っている男は管理局の制服を着ていたからだ。

「この男は？」

『ライル・グランド、階級は、少将。表向きは、地上、海、空に顔が広い、仁徳者と言われている男だ。だが、そいつの素顔は、犯罪者共を裏で操って私腹を肥やすゴミだ!』

レジアスは、デスクを両手でドーンと叩いた。

『いいか。1人残さず始末しろ!』

「了解。」

それを最後に通信は切れた。

「はあ、人をゴミ呼ばわりできる立場か？ レジラス。」

ゼロは、溜息を1つ吐いて、部屋の中に入った。

「エリオ、キャロ、ごめん！」

「えっ？ どうしたんですか、ゼロさん？」

「これから、地上本部に行かなきゃいけなくなったんだ。だから、ヴィヴィオの面倒をお願いしていいかな？」

「そうなんですか？ もちろん、いいですよ。ね、キャロ？」

「うん。大丈夫ですよゼロさん。」

「ありがとうございます。それじゃあ、行ってきます。」

「「いってっらしい。」」

そして、その頃。聖王教会のなのはたちは、六課設立の理由を話すところだった。

「六課設立の表向きの理由は、ロストログア…レリックの対策と独立性の高い少数部隊の実験例。知っての通り、六課の後見人は、僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親で上官リンディ・ハラオウンだ。それに加えて、非公式ではあるが、彼の3提督も設立を認め、協力の約束のしてくれている。」

「「あ！」」

なのはとフェイトは、3提督が出てきて驚いていた。

「その理由は、私の能力と関係あります。私の能力“プロフェーティン・シユリフテン預言者の著書”」

カリムが、古い紙の束のような物を束ねていた紐を解くとそれは、カリムの周りに飛び散った。

「これは、最短で半年。最長で数年先の未来。それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行う事ができます。2つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に1度しかできません。」

カリムは、その中の2ページをなのはとフェイトの前に移動させた。

「預言の中身も古代ベルカ語で解釈によって意味が変わる事になる難解な文章。世界に起きる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば、的中率も実用性は、割とよく当たる占い程度。つまり、あまり便利な能力ではないんですが……」

「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかはどうかは別にして、有識者による予想情報の1つとしてな。」

「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップが、この手のレアスキルとかお嫌いやからな。」

「レジアス・ゲイズ中将だね？」

「そんな騎士カリムの予言能力に数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている。」

クロノは、カリムを見た。カリムは、頷き1枚のページを読む。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇える。死者たちが踊り、復讐にとりつかれた人形使いによって、なかつ大地の法の塔は空しく焼け堕ちる。それを先駆けに数多の海を守る法の船も砕け堕ちる。」

「そ、それって……」

「まさか・・・」

なのはとフェイトは、予言のある部分を聞いて、目を見開く。

「人形使って・・・ゼロ君のこと？」

「私も驚いてるんよ。ゼロ君に最初あの能力を見せられて時、まさかってな。」

「で、でも！まだ、これがゼロだって決まったわけじゃないんだよ。」

「わかってるよ。けどな、今のところ疑わしいには変わらないんや。」

ゼロを信じたいフェイト。信じたいが、不安を捨てきれないはやて。

「でも、これだけははっきりしているわ。ロストログアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅とそして、管理局システムの崩壊。」

第26話 六課設立の理由（後書き）

はい、第26話でした。どうも、Theaterです。

ゼロが、またはやてに疑われました。と言うか、今までずっと疑われていたんじゃない？

予言に関しては、大きく変えず、原作に一文を足した程度にしました。まあ、ただ単に考えるのが、面倒だっただけですけど・・・

次回は、久々に裏ゼロが出てきます。たぶん、無双するんじゃないかと思えます。期待はせずにお待ちください。

では次回、第27話で会いましょう。

第27話 前兆の大事件（前書き）

それは、前兆か、それとも・・・

第27話 前兆の大事件

「この辺りかな？」

いつものフードを被り、モニターを見ながら、周りを見渡すゼロ。そこには、人はおろか、動物の姿さえ見られず、周りのビルは、朽ち果て今にも崩れそうなものである。

「廃棄都市区画・・・か。確かに隠れて何かをするならもってこいの場所だな。」

今まで、この場所に犯罪者が、巣食っていると言う情報はなかった。レジアスによると、今回のターゲットは、数年前から活動をしていた事がわかったが、何故今まで隠れ通せたのか。

「そのカギが、ライル・グランドっていう事か・・・」

隠れ通せていた理由。それは、こう考えれば全てが繋がる。廃棄都市区画を管理している者が手引きしているのではないか？

レジアスは、そう考え独自に秘密裏にライルを探った。だが、ライルは中々尻尾を出さなかった。そこで、レジアスはスカリエッテに依頼し、再びライルを探った。その結果、ライルと犯罪者グループが繋がっている決定的な証拠を掴んだ。

「それで、今に至るといふ訳ね。」

「何がと言う訳なんだ？」

「っん！」

突然、何者かがゼロの肩を掴んだ。ゆっくりと後ろを振り向く。
すると、そこには屈強な男たちが5人いた。

（たぶん、こいつらだな、ターゲットは・・・）

「おい、こんなところでどうしたんだ？ ああん！」

「まさか、また管理局か？ それとも、迷子かな？ あ、はははははは
！」

完全に目がイッているのが、2人ほどいた。たぶん、例の違法な
薬をやっているのだろうとゼロは思っていた。

（さて、どうするか。ここでやってもいいが、アジトまで案内させ
るか。）

「おい！ こいつ連れて行こうぜ！」

「何だ？ ここで殺さねえのか？」

「折角だ。他の奴らにもやらせようぜ。ほら、こっちだ!」

男たちは、ゼロをアジトへと連れて行く事にした。ゼロは、男たちに囲まれ絶対に逃げられないようにされていた。そして、数分歩いた後、ある廃ビルの中に入って行った。

(ここが、アジトか?)

「おい! みんないるか?」

男の1人が、ある一室のドアを開ける。そしてゼロは、背中を強く押され無理矢理、部屋の中に入れられる。中に入ると、そこには総勢50人くらいの人がいた。

「あら、その子は何?」

「何々? どしたの?」

よく見ると、少数ではあるが、女が何人かいた。

「外で1人うろうろしてたから連れてきた。で、グライドさんは来てるか?」

「ううん。まだ、来てないよ。それよりさ、ちょっとその子貸してくれる。」

1人の女が、ゼロの前まで来た。そして、興味津々な感じでゼロを観察する。

「ねえ、顔見せて。」

そう言って、女はゼロが被っていたフードを脱がせた。

「わー結構かわいい顔してるね。」

「どれどれ。ほー確かにかわいい顔してるね。」

部屋にいた女が全員ゼロのところまで来た。そしてゼロの体や顔を触ったりして、遊び始めた。

「何の騒ぎかね？」

そこへ1人の男が、部屋の中に入ってきた。ゼロは、ドアの方を見る。すると、そこには管理局の制服を着た40代半ばほどの男がいた。

「グライドさん。お疲れ様です！」

「チーース！グライドさん！」

男たちは、一斉にその男に挨拶をした。男たちが言っていたようにこの男こそ今回の最重要ターゲットのライル・グライドだった。

「ああ、ご苦労だね。それで、そこにいるのは誰かな？」

「はい。この近くで不審な行動をしていたので、連れてきました。」

「ほう。不審な行動ね・・・」

ライルは、ゼロの顔をじつと見ていた。

「どこかで見た顔だな・・・さて、どこだったか・・・」

ゼロの顔を見たまま、考え込むライル。そして、1分ほどした頃、突然ライルは思い出したと言う顔をして、笑い出した。

「あ、ははははははは！思い出したぞ。君、レジアスのところに入りしていたらう？」

「はい。」

「なるほど。レジアスの差し金か。奴めこの事を嗅ぎ付けたか・・」

「どうしますグライドさん？殺っちゃいますか？」

「うーん。君、どうだろ。レジアス何かより私に付く気はないか？」

ライルは、ゼロにレジアスより自分に付かないかと言ってきた。

「あんな堅物より、私に付いてきた方が、いろいろと楽しい事が待っているよ。」

グライドが言うように、ここにいる連中は、皆好き勝手な事をして楽しんでた。表に出ては、奪い、犯し、殺すなどを繰り返す。だが、そんな事を繰り返しているのに大きな事件になった事が今まで一度も無い。

「何、私に任せておけば君たちは絶対に捕まったりはしない。だから、安心していいよ。」

大きな事件にならない理由。それは至極簡単なことだった。管理局少将の肩書があるライルにとって少々の事件は隠蔽し、無かった事にするのは簡単なものだった。

「さあ、私と共に歩もうではな・・・い・・・か・・・」

ライルは、ゼロの肩を右手で掴んだ。しかし、どうしたことか、急に自分の右腕が軽くなった。ライルは、右腕を見た。すると、右手はしっかりとゼロの左肩を掴んでいる。

「あれ？」

だが、そこでライルはおかしい事に気づく。ゼロの左肩を掴んでいる右手と自分の右腕が手首のところで離れていた。

ライルは、考える。何故、右手が離れているのだろうと。

ライルは、ゼロの方を見る。ゼロは、口の端を上げ、笑っていた。そして、その右手には、ゼロの魔力光の蒼色の魔力刃が形成されていた。

そこで、ライルは理解した。自分の右手は、目の前にいるこの男に切り落とされたのだと。

「う、うわあああああああ！私の手が！手があああ！」

左手で右腕を押さえながら、叫び声を上げるライル。

「グライドさん！大丈夫ですか？」

「てめえ！死ね！」

1人の男が、懐から銃を取り出した。そして、それをゼロに向けて発砲した。だが、その先にゼロの姿はなかった。

「なっ！どこ・・・に・・・」

ゼロの姿を探そうとした次の瞬間にその男の腹部に鈍い痛みが走った。ゆっくりと腹部を見るとそこから魔力刃が生えていた。否、後ろから貫かれていた。

「かはっ！く・・・そ・・・」

男は、力なく倒れて行く。そして、その光景を見ていた者たちは、恐怖した。

次は自分が殺される。

早く逃げなきゃ。

急がないと。

その場にいた全員が、同じことを思っていた。

「に、逃げろ！」

「きゃあああああああ！」

1人が、逃げ出したのをきっかけにその場にいた全員が一斉に部屋から出て行った。そして、誰もいなくなった部屋には、ゼロとライルの2人が残った。

「うーん。バラバラに逃げて行ったのを追いかけるのは面倒だな。仕方ない・・・来い！」

ゼロは、自分の周囲に4つの召喚魔法陣を展開した。そして、その一つ一つから召喚されたのは、ザフィーラより2倍は大きい黒い狼だった。

《ガルルルルル！》

《ガウツ！》

「よしよし。久しぶりに狩りの時間だぞ。・・・行け！」

ゼロの命令で狼たちは一斉に逃げて行った連中を追いかけて行った。

「さて、グライド少将。あなたも、ここで終わりにしましょう。」

「くっ！何故だ。私と来た方が君のためにもなるはずだ！」

「悪いが、俺は管理局が嫌いだね。一時的ではあるが管理局に身を置いている今も本当なら吐き気がするくらいだ。」

「な、それなら何故、管理局にいる。おまえは、何なんだ！」

「何だか。そうだな、あえて言うなら・・・アヴェンジャー復讐者だ。」

ゼロの言葉に声もでないライル。

「ん？ふっ聞こえるかグライド少将？」

「な、何がだ？」

ゼロはそう言って耳を澄ませた。すると、遠くから異様な音が聞こえてきた。

いやあああああああああ！

助けてくれ！！

うわあああああああ！

それは、悲鳴。この辺り一帯で数多くの悲鳴が響いていた。理由は言うまでもない。ゼロが放った狼たちが、ここにいた犯罪者たちを一人残らず喰い殺しているのだから。

「それでは、終わらせましょうか？」

ゼロは、そばに落ちていた銃を拾って、ライルに向けた。

「何を・・・」

「最後は、自分が蒔いた種で逝くのも悪くないだろ。」

ゼロは、引き金を引く。銃声が、静かになったこの辺り一帯に響いた。

「任務完了。」

目的を果たしたゼロは、その場を後にする。暗いビルの中から外に出る。普通であれば、そこには廃棄都市区画のいつもの光景が広がっているはずだった。だが、今そこには惨劇と言う光景が広がっていた。大量の血の跡。本来は、人の体の一部だった物。そして、狼たちの遊びのつもりだろう、生きてるとは言えないが、死んではない何かになった物。

《主。終わったぞ。》

《これでいいのか？》

「ああ、ご苦労だったな。」

戻ってきた狼たちを撫でて褒めてあげるゼロ。

「さて、帰るか。」

狼たちと一緒にその場から歩き出したゼロ。ミッドチルダ史上最悪の血の惨劇をもたらしたこの大事件は、この後に起きるもう一つの大事件の前兆だったのかもしれない。

第27話 前兆の大事件（後書き）

はい、第27話でした。どうも、Theaterです。

ゼロの無双は無かったです。書くうちに何か自然と無くなっていました。

それと、JS事件の前兆としてこの事件をりましたが、特に意味はありません。後々、ゼロがやったと分かる程度でこれと言って伏線は無いです。

次回からですが、ゼロとヴィヴィオをどうするか悩んでいます。

男のオリキャラとヴィヴィオと言ったら定番はやっぱりあれしかありませんが

まあ、それは成り行きで決めたいと思います。

では次回、第28話で会いましょう。

番外編 妹たちとの出会い4（前書き）

ナンバーズ4と5の登場。

番外編 妹たちとの出会い 4

「そろそろ一度帰るか。」

広い森の奥深く1人呟くは、ナンバーズ0のゼロ・レスティアだった。3番目の妹、トーレと出会ってから、少ししてゼロは無人の世界へ旅に出ていた。目的は、今は秘密にしておこう。

旅に出て、5年の月日が流れていた。その間、一度も家には帰っていなかった。なので、そろそろ帰ろうかと思っていたところだった。

「座標指定。目的地は我が家。転移開始。」

次元転移を使いゼロは家へと向かった。

「ねえ、ウーノ姉さま。お兄様はいつお戻りになるのかしら？」

「わからないわ。こちらからは、連絡できないから。」

「うーん。では、兄とはしばらくは、会えないと言う事か。」

ここは、スカリエッティの隠れ家。ゼロが、旅立ってから妹たちは、寂しがっていた。特にゼロに好意を持っているウーノとドゥーエは、溜息を吐かない日はないくらいだった。それから、トーレはと言うと何でもないと言う態度を取っていたが、時折詰まらなそうな顔をする時があった。

そして、先ほどの会話からわかるようにゼロが旅に出てから、妹が2人ナンバーズに加わったのだ。

「はあ、早くお会いしたいわ。」

「うむ。まったくだ。」

ナンバーズ4クワットロ。ナンバーズ5チンク。それが、彼女たちの名前だ。

クワットロは、茶髪にメガネを掛けた子だ。教育係にドゥーエが付いていてとても懐いているようだ。そして、スカリエッティが目指す目的に一番共感していた。

チンクは、銀髪で姉たちに比べてかなり小柄な体型をしている。しかも、その体型をクワットロに弄られて遊ばれる事がある。それから稼働歴が、5番目ではあるが、クワットロよりも若干長い。

「ゼロの奴、早く帰ってくればいいものを・・・」

「何だトーレ。俺がいなくて寂しかったのか？」

「なっ！」

「みんな、ただいま。」

いつの間に帰ってきたのか。そこには、ゼロの姿があった。ボロボロのフードを羽織り、リュックを1つ持って片手を上げていた。

「ぜ、ゼロ！いつ帰ってきたのだ！」

「今しがただけど。」

何をそんなに驚いてるんだと言う顔をするゼロにその場にいた妹たちは、一斉にゼロに言う。

「兄さん！帰ってくるのが、遅いです。」

「私たちに寂しい思いをさせて、許さないわよ。」

「ごめん。ごめん。それよりさ、そっちの2人を紹介してほしいな。」

ゼロは、見ない顔の2人を見て言った。

「初めましてお兄様。私は、ナンバーズ4クワットロですわ。」

「ナンバーズ5チンクだ兄よ。」

クワットロとチンクは、ゼロに自己紹介をした。

「うん。よろしく2人とも。それじゃあ、ちよつとドクターにも挨拶してくる。」

そう言つて、ゼロはスカリエッティの下へと向かった。

「ドクター、入ります。」

「おお、ゼロじゃないか。帰つて来たのかね。」

研究室のドアを開けて中に入ると、スカリエッティは何かの実験

をしていたのか、怪しげな機械を使っていた。

「それで、何か良さげな物はあったかね？」

「今回の収穫は、これですね。」

ゼロは、リュックから布に包まれたある物を取り出した。そして、それをスカリエッティへと渡す。

「ほおーこれは・・・」

包みを取ると中には、黒い宝石のような物があった。

「嚴重に封印されましたから、解くのに苦労しました。」

「そうだろうね。これほどの魔力を秘めていれば。」

ゼロの旅の本来の目的ではないが、立ち寄った世界に強力なロス
トロギアがあれば、取って来るようにとスカリエッティから、命令
されていたのだ。

「それで、君の目的はどうだったのかね？」

「まずまずと言ったところです。でも、まだ足りませんね。また、少ししたら出るつもりです。」

「頑張りたまえ。」

果たして、ゼロの旅の目的とは一体何なのか？

番外編 妹たちとの出会い4（後書き）

はい、番外編でした。どうも、Theaterです。

えー、今回はいつにも増してよくわからない話になりました。

妹たちとの出会いなのにクワットロとチンクがほとんど出て来ない。これでもいいのか俺。

ああ、誰かネタをくれー

では、次回の番外編で会いましょう。

第28話 不安定な心（前書き）

任務を無事に終えたゼロだったが・・・

第28話 不安定な心

「ただいま。」

「ただいま。」

すっかり日が暮れた頃、聖王教会からなのはとフェイトが帰ってきた。そして、そのままヴィヴィオがいるゼロの部屋に来た。

「あっ」

なのはが来たのを見ると、ヴィヴィオは一目散になのはに駆け寄った。そして、なのははヴィヴィオを抱き上げた。

「ヴィヴィオ、ただいま。良い子にしてた？」

「うん！」

ヴィヴィオは、目に涙を溜めてなのはに抱きついた。

「ありがとうね。エリオ、キャロ。」

「いいえ。」

「ヴィヴィオ、良い子でいてくれましたよ。」

「そっ。と言うか、ゼロ君はどうしたの？」

一緒にヴィヴィオの面倒を見てくれていたはずのゼロの姿がないので、なのははエリオとキャロに聞いた。

「それが、ゼロさん急に地上本部に行かなきゃいけなくなったみたいで……」

「私とエリオ君にヴィヴィオの事をお願いして行っただけです。」

「そうなんだ。」

「はい。それで丁度それが、ヴィヴィオが眠っている時で、ヴィヴィオが起きた後、ゼロさんがいないのヴィヴィオが気付いて……」

「もしかして……」

「はい……ヴィヴィオそれかしばらく泣いてたんです。」

眠っている間にゼロがいなくなっていて、ヴィヴィオは盛大に泣いていたそうだ。

「大丈夫だよヴィヴィオ。ゼロ君もすぐに帰ってくるから。」

なのはは、ヴィヴィオの頭を優しく撫でた。

＜ マスター、帰らないのですか。 ＞

任務を終え、レジアスに報告し後は、六課に帰るだけとなっていたが、ゼロは街外れの森で動こうとしなかった。

「帰りたいけど・・・こんな状態じゃ帰れないよ。」

こんな状態とは？

外見は至っていつも通りである。返り血を浴びている訳でもなく、これと言って怪しいような事はない。なら、何か。それは、精神の方である。

管理局を極度に嫌うゼロにとって、今日のライルとの出来事がきっかけでゼロの精神が不安定になっていた。今の状態で六課に帰ると何をするかわからない。

「今日は、ここで落ち着くことにするよ。」

＜ そうですか。では、私はスリープモードに移行します。御用があれば、お呼びください。＞

「ああ、お休みステラ。」

森の中で、ステラと一緒に一夜を明かすゼロ。ゆっくりと目を瞑り、眠りの中へと落ちて行った。

「はい。全員集合！」

次の日。フォワードはいつも通り、なのはと朝練をしていた。

「じゃあ、朝練はここまで。」

「」「はい！」「」

「今日は、目立ったミスも無く、良い感じでした。今後もこの調子でね。」

「」「」「ありがとうございました。」「」

朝練が終わったフォワードの4人は、一旦寮へと戻るため寮への道を歩いていた

「セカンドモードもだいぶ馴染んできたな。」

「そうですね。」

「変化の少ないあたしとキャロはともかく、ティアとエリオは大変そうだね。」

「形から変わっちゃいますし・・・」

「あたしは、別に。ダガーモードはあくまでも補助だしね。複雑なのはエリオの方でしょ。」

ティアナは、エリオを見る。

「ストラダーのセカンドモード過激だもんね。」

< W i r k l i c h ? >

「私は、カッコいいと思うよ。ストラダー。」

< D a n k e s c h o n , m e i n F r a u l e i n . >

ストラーダは、キャロにありがとうと言う。

「ストラーダと一緒に鍛えていきます。がんばります。」

「ふう〜・・・あっ！」

そして、一方なのはは、朝練のデータをまとめ終え、訓練場を出るところだった。すると、フェイトとヴィヴィオが歩いているのが見えた。

「ヴィヴィオ！」

「ん？」

名前を呼ばれたヴィヴィオは後ろを振り向いた。そして、そこにはなのはが走って自分の下に来るのが見えた。

「おはよう、ヴィヴィオ。ちゃんと起きられた？」

「うん！」

「おはよう、フェイトちゃん。」

「うん、おはよう、なのは。」

「ヴィヴィオ。なのはさんにおはようって。」

ヴィヴィオにフェイトが言う。

「おはよう」

「おはよう。」

「朝ごはん、一緒に食べられるでしょ？」

「うん。」

「朝ごはん？」

「そう。さ、行こう。今日のメニューは何だろうね。」

なのはとフェイトとヴィヴィオは、一緒に食堂まで歩き出した。

「あれ？あそこにいるのって・・・ゼロ君？」

「あっ！」

「ヴィヴィオ！」

そして、しばらく歩いていると前の方にゼロらしき姿が見えた。
それを見たヴィヴィオは、ゼロに向かって走り出した。

「はあはあはあ、ん！」

「おっと・・・ん？ヴィヴィオ？」

いきなり、足に何かが抱きついて転びそうになるのを何とか留まることができたゼロ。そして、足を見てみると、そこには泣きそうになっているヴィヴィオが抱きついていた。

「どうしたんだヴィヴィオ？涙なんて溜めて。」

あやそうとヴィヴィオの頭を撫でるゼロ。だが、ヴィヴィオはゼロの制服をぎゅっと掴んだまま離さなかった。

「ゼロくん！」

「ゼロ〜！」

「なのは隊長・・・フェイト隊長・・・」

後ろからさらになのはとフェイトが走ってきた。

「ゼロ君。もしかして、今帰ってきたの？」

「はい、そうですけど・・・それより、ヴィヴィオを何とかしてください。」

ゼロの足にしがみ付いて離れないヴィヴィオを見て、ゼロが困っていた。

「あ、ヴィヴィオ。ゼロ君から離れようね。」

「・・・や・・・」

「ん、何だヴィヴィオ？」

ヴィヴィオが何か言ったような気がしてゼロは聞き返す。

「いなくなっちゃ・・・や・・・」

「あっ・・・」

そこでゼロは、理解する。

「なのは隊長。ヴィヴィオ昨日は・・・」

「うん。ゼロ君がいなくなった後、泣いてたみたいなの。」

「そうですか。ヴィヴィオ、ごめんな。もう、黙っていなくなった
りしないから、泣かないで。」

ゼロは、ヴィヴィオと目線を合わせて、指で涙を拭った。

「う、ぐす・・・本当？」

「ああ、本当だ。」

「うん。えへへ。」

ヴィヴィオにやっと笑顔が戻った。

「ねえ、ゼロ。何だか、顔色が悪くない？」

「え、そうですか。」

「あ、そう言えば何だかよくないよ。」

ヴィヴィオの事が解決したのも束の間。今度は、ゼロの顔色が悪いと言う問題が発生した。

「大丈夫？」

「はは、大丈夫ですよ。別に何ともな・・・い・・・あれ？」

ゼロは、急にふらつき膝をついた。

「ぜ、ゼロ君！」

「ゼロ！」

慌てて、なのはとフェイトがゼロを支えた。

「はあはあ・・・大丈夫です。これくらい・・・」

「大丈夫じゃないよ。ほら、早く医務室に行こう。フェイトちゃん、ゼロ君を医務室に連れて行くからヴィヴィオの事お願い。」

「うん。わかった。」

ゼロは、なのはに支えられて医務室に連れて行かれた。

第28話 不安定な心（後書き）

はい、第28話でした。どうも、Theaterです。

ゼロがちよっと不調になりました。意外に精神が弱かったんですね。まあ、誰でも嫌いな場所にいれば心が不安定になるかと思うんです。実際、私

も不安定と言うか気が小さい方なんで気持ちはわかります。

さて、原作も折り返し地点になっていよいよ面白くなっていくところですが、

まだ構想があまりできていません。

それと、皆さん覚えているか分かりませんが、ステラにはモード3と言う形態

があるんですが、まだどういう物なのか決まっています。

ですから、アイデアがあるという方、感想でもメッセージでもいいので私にア

イデアをください。（切実に）

では次回、第29話で会いましょう。

第29話 人形使い（前書き）

自分を失敗作と言うゼロ。

そして、ヴェロッサが見つけたものとは？

第29話 人形使い

『隊員呼び出しです。ランスター二等陸士。部隊長室までお願いします。』

午前中オフィスで事務仕事をする事になっていたティアナとスバル。すると、ティアナがはやてからの呼び出しを受けた。2人は、何だろうと言う顔をし、ティアナは部隊長室へと向かった。

「いやゝ実はな、今日これから本局に行くんやけど、よかったらティアナも一緒に行つとくかって相談や。」

「あ、はい？」

いきなり、本局へ一緒に行かないかと誘われたティアナは、何でと首を傾げた。

「今日、会う人はフェイト隊長のお兄さん、クロノ・ハラオウン提督なんよ。」

「はい・・・」

「執務官資格持ちの艦船艦長さん。将来のためにも、そう言う偉い人の前に出る経験とかしといたほうがええかなって。」

「ありがとうございます。同行させていただきます。」

こうして、ティアナの本局への同行が決まった。

「あれ、ティアナは？」

オフィスに1人でいたスバルの下になのはが来た。

「八神部隊長に同行だそうです。本局行きとか。」

「そっか。」

「なのはさんも今日はオフィスですか？」

「そうだろう。ライトニングは、今日も現場調査だし、副隊長たちはオフシフトだし、ゼロ君がちよっと体調不良でお休みしてるから、前線メンバーは私とスバルの2人だけだね。」

「ゼロさん、大丈夫なんですか？」

今朝、なのはに医務室に連れて行かれ、シャルに診てもらったゼロ。診断の結果、病気というよりは精神的に疲れていると言う事だった。なので、一応大事をとって今日は、休みとなっていた。

「うん。シャル先生が、今日一日休めば治るだろうって。」

「よかったです。ゼロさん、たまに地上本部に呼び出されているみたいですから、大丈夫かなって思ってたんで。」

「そうだったんだ。（地上本部にそんなに呼び出されている・・・考え過ぎだよね。）」

「アンカー配置。位置固定しました。」

「待機状態に入ります。」

「補給と簡易点検を受ける。手の空いた者から休息に入れ。」

「「「はっ」」」

次元航行部隊　XV級艦船クラウディア。
現在、管理局本局に補給と点検の為に戻ってきていた。

「お疲れ、クロノ君。」

「ああ。」

クラウディア艦長、クロノ・ハラオウンに話しかけてきたのは、
本局査察部査察官であり、聖王教会　教会騎士団の騎士カリム・グ
ラシアの義弟ヴェロッサ・アコースだった。

「はやてが、来るまではまだ少し時間があるな。」

「ま、のんびり待つとしようか。あ、そうだ。ケーキ食べるかい？」

ヴェロッサは、右手にケーキの入った箱を出した。

「自作物だけど、なかなか良い出来だよ。」

「だから、僕は甘い物は、苦手だと言うのに。」

「甘さ控え目！」

「まあいただくか。」

「うん。」

クロノは、仕方ないと言った感じで、ヴェロッサの誘いに乗ることにした。そして、ケーキを食べながら、用件を済ませる。

「しかし、君の依頼通り、内密で地上本部の中に、ゲイズ中将周りを調べてみたけど。何と言うかな、本当に面白いくらい剛腕な政略家だよね。」

「実力者であり、人を引き付ける牽引力もある。優秀な方だとは思う。黒い噂が絶えないとはいえ、彼が地上の正義の守護者であるのは事実だ。」

「企業や政界からの支援も山ほどあり、管理局最高評議会の覚え子でもある。こりゃあ、確かに本局としちゃ扱いに困る人物だ。」

「そう、迂闊な介入はできない。唯でさえ、海と陸。本局と地上本部は、断ることに衝突を・・・ん？」

クロノが言い終わる前に通信が入った。

『失礼します。クロノ艦長。』

「ああ？」

『八神はやて二佐がいらっしやいました。』

「わかった。」

「はあ」

＜ マスター、大丈夫ですか？ ＞

自室のベットの中で溜息を吐いているゼロ。シャルに診てもらった後、自室での休息を言い渡された。しかし、ゼロは退屈していた。確かに体調はいい方ではなかったが、いきなり休めと言われても暇なだけだった。

「ステラ、暇だよ」

＜ 仕方ないですよ、マスター。シャル医師から休めと言われて
いるのですから、休んでいないと ＞

「そうだけど。はあくこの程度で不安定になるなんて、やっぱり俺は失敗作・・・」

< マスター!! >

急に怒鳴るように声を上げるステラ。それを聞いたゼロは、ビクッとしてしまった。

< マスターは、失敗作なんかじゃありません! マスターのそれは、ちゃんとした人である証拠です。だから・・・だから・・・自分を失敗作なんて言わないでください・・・ >

デバイスであるステラは、泣くことはできない。だが、もしそんな機能があったなら間違いなく涙を流していることだろう。

自分のデバイスに、たとえ造られたAIにでもそんな思いをさせてしまった事にゼロは反省した。

「ごめんな、ステラ。もう、言わないから。」

ゼロは、ステラを手に持ち、コアの部分を撫でた。

< ……約束ですよ。今度言ったら、許しませんから。 >

「ああ、約束だ。」

「君も座れば？」

「いえ！自分はここで！」

はやてとティアナが、来てヴェロッサは、はやてにお茶を入れた。そして、1人だけ座らずに立っていたティアナに座るように進めるが、ティアナは断った。

〈前線メンバーにも今回の全容を？〉

〈予言関連は、ぼかしてあるよ。地上本部が襲われる可能性だけ。もちろん、ゼロ君の事も言うてない。〉

〈なるほど。〉

六課設立の理由を前線メンバーにも話したはやて。だが、カリムの予言の一部は言わず、地上本部が襲われる可能性があると言うだけにしておいた。

それによって、予言にあった“復讐にとりつかれた人形使い”の

部分を知っているのは、隊長たちだけということになる。

「さて、それでは話に移りたいんだけど・・・」

ヴェロツサが、話を始めたいと言うが、途中で口籠りティアナを見た。

「何や、ロツサ？ティアナがどうかしたか？」

「うーん。彼女がいるところじゃちょっとね・・・まずいかもしれないかなって。」

「あ、あの。お邪魔なら出て行きます！」

ティアナは、空気を読んで部屋を出て行ってしまった。

「あ、ティアナ！行ってもうた・・・ロツサ、そんなにまずい事なんか？」

「ああ、かなりね。でも、これはまだ、ただの憶測なんだけどね。」

ヴェロツサは、真剣な顔になる。

「六課にゼロ・レスティア一等陸尉と言う男がいるだろ？」

「うん。いるけど・・・」

「義姉さんの予言に出てきた“復讐にとりつかれた人形使い”これに当てはまる人物。」

「でも、人形使い・・・ゼロ君のレアスキル“ドールマスター”がそうだけで、復讐にとりつかれたの部分は当てはまらんよ。」

はやても一応の用心はしているものの、ゼロのレアスキル“ドールマスター”が今のところ予言に当てはまっているだけで、“復讐にとりつかれた”の部分は当てはまっていない。

「うん。確かにそうだよ。だから、レスティア一等陸尉の他に似たような能力を持った人がいないか調べたんだ。そしたら、1人だけいたんだ。」

ヴェロツサは、モニターにその人物のデータを映し出した。

第29話 人形使い（後書き）

はい、第29話でした。どうも、Theaterです。

さあ、だんだんとゼロの事がバレ始めてきました。

一体、ヴェロッサが見つけた人物とは？と言っても、誰なのかは皆さんわか

りますよね。

さて、このままゼロはどうなってしまふのか。疑いだけで済むのか、それと

も完全にバレてしまふのか。

では次回、第30話で会いましょう。

第30話 保護責任者と後見人（前書き）

予言の人物はだれか？

そして、ヴィヴィオに2人のママができた

第30話 保護責任者と後見人

「誰や？この人・・・」

ヴェロッサが、モニターに映し出した人物。青いロングの髪をポニーテイルして、やや長身で細身の体型。見たところ10代後半から20代前半と言った感じの女性局員だった。

「ルナ・レスティア一等空佐。」

「レスティア！！」

はやては、ゼロと同じファミリーネームに驚いた。

「ロッサ、この人は・・・」

「うん。おそらく血縁関係者だと思う。調べた結果、レスティア一佐もドールマスターが使えたらしい。」

「それで、彼女は今は？レスティア一佐なんて言う人は聞いたことがないんだが・・・」

クロノがヴェロッサに聞く。

「わからない。」

「わからない？　どういう事や。」

「レスティア一佐は、10年以上も前に管理局を辞めた事になっていた。だから、それからの足取りは不明だ。」

ヴェロツサも、いろいろ調べてみたが、まったく情報が無かった。

「それで、結局どういう事なんや？」

「うん。ゼロ一尉が、予言に当てはまらないなら、レスティア一佐が予言の“復讐にとりつかれた人形使い”かもしれないってこと。」

「でも、それこそ何の根拠もないんじゃないか？」

「確かにそうだけど・・・」

クロノが、そう言うときヴェロツサは自分の考えたことを言った。

「レスティア一佐は、若くして一等空佐までいった人で、その功績もかなり多い。しかし、そんな人が突然管理局を辞めてしまった。そんなこと、ありえるかい？」

「それは・・・何か事情があったんじゃないか？」

「普通は、そう思うよね。でも、レスティア一佐に関してはそうは言い切れないんだよ。」

ヴェロツサは言う。

「何かあるのか。」

「うん。リンディ提督に聞いた事なんだけど。」

「母さんに!？」

クロノは、自分の母親の名前が出てきて驚いた。

「リンディ提督とレスティア一佐は、友人だったそうだよ。」

「そうなんか!」

「うん。それでね、レスティア一佐は辞める前に少将になる事が決まっていたそうだよ。リンディ提督によれば、彼女はその事をも喜んでいたらそうだよ。」

リンディによれば、少将になる事が決まっていて、本人はそれを楽しんでいた。そして、今で言えば、なのは、フェイト、はやてのよくな友人関係だった2人。悩みも相談する事もあったのにリンディ

には何も言わず辞めていた。

「僕の考えでは、レスティア一佐は何かの事故あるいは事件に巻き込まれた。そして、それに管理局が関わっている。」

「管理局が！」

「実際、管理局はわからない事が多すぎる。何かある事は確かだよ。」

ヴェロッサのいう事にはやてはどうしたらいいか悩んだ。果たして、予言の人物はルナなのかそれともゼロなのか。はやての頭の中は、それでいっぱいだった。

「よしっと！うーん！・・・ん？」

事務仕事が終わるスバルは背伸びをした。そして、ふいになのはのデスクを見た。すると、どこかぼーとしているのが目に映った。

「なのはさん？あの、なのはさん？」

スバルは、なのはのそばに行き声を掛けた。しかし、呼びかけてもなのはは気付く様子はない。

「なのはさん？」

「・・・えっ？つとごめん。なに？」

3回目の呼びかけでようやくスバルに気が付いた。

「いえ、あの。データのセット、終わってますよって・・・」

「ああ、本当だ。ダメだね、ばーとしちゃって。」

「いえ。」

2人が、そんな話を話していると、そこにお昼のチャイムが鳴った。

「お、ちょうどお昼だ。寮に戻ってヴィヴィオと食べるんだけど、スバルもどう？」

「はい。一緒にします。」

ヴィヴィオとお昼ごはんを食べるため、なのはとスバルは隊舎を出て、寮へと向かった。そして、その道中、2人はヴィヴィオの話をしていた。

「でも、ヴィヴィオってこの先どうなるんでしょうか？」

「ちゃんと受け入れてくれる家庭が見つかればそれが一番なんだけど・・・」

「難しいですよ？ やっぱり普通と違うから・・・」

スバルは、自分とヴィヴィオを重ねているのか少し暗い表情をした。

「そうだね。見つかるまで、時間が掛かると思うんだ。まあ、だから当面は、私が面倒見てけば良いのかなって。エリオやキャロにとつてのフェイト隊長みたいな保護責任者って形にしとこうって。」

「いいですね。ヴィヴィオ喜びますよ。」

「うーん、喜ぶかな？」

「ふふっきつと！」

「そうだよ。普通じゃないだろ。何回も同じようなパターンなんて。」

これ以上、こいつらを出すと危険なので場面は、再びなのはたちへ。

「ん？」

「ほら、やっぱりよくわからない。」

ヴィヴィオに保護責任者の話をしてみたが、ヴィヴィオには当然難しく理解できていない。

「うーんと何て言えばわかるのかな？うーんと・・・つまり、しばらくはなのはさんが、ヴィヴィオをママだよって事。」

「ママ？」

ヴィヴィオは、なのはを見上げ言う。

「あ、いや・・・その・・・」

スバルが、自分で言うておいて焦りだす

「いいよ、ママでも。」

「あ・・・」

「ヴィヴィオの本当のママが見つかるまで、なのはさんがママの代わり。ヴィヴィオは、それでもいい?」

なのはは、ヴィヴィオに聞く。それを聞いたヴィヴィオは、じつとなのはを見つめていた。

「ママ?」

「はい、ヴィヴィオ。」

「う、うわーん。」

ヴィヴィオは、突然泣きだしなのはに抱きついた。

「何で泣くの。大丈夫だよヴィヴィオ。」

ヴィヴィオの背中を優しく撫でるなのは。そして、それからしばらくヴィヴィオは、泣き続けた。

「そう言えば、アースラって今は？」

「来月、廃艦処分が決まったよ。」

ゼロの話が終わって、今度はアースラの話になっていた。ちなみに今部屋にいるのは、はやとクロノだけでヴェロツサは、ティアナと外に出ていた。

「そうか。前に見た時はまだ頑張れそうやったけど・・・」

「長期任務には耐えられそうにないからな。」

「ちょっと寂しいな。アースラは、私たちの思いでの船やから。」

「十分働いたんだ。もう、休ませてやらないとな。」

はやてにとってアースラは、魔法に出会った時から世話になった船だ。まだ、頑張ってほしい気持ちもあるが、クロノの言う通り休む時が来たと思うしかない。

「そう、なのはがママなってくれたんだ。」

「うん。」

夜になり、フェイトが捜査から戻ってきた。そして、寮の自室に戻るとヴィヴィオからなのはが、ママになってくれたと聞いた。

「でも、フェイトさんもちっとだけヴィヴィオのママになったんだよ。」

「ん？」

「後見人って言うのになったからね。ヴィヴィオとなのはママを見守る役目があるの。」

「ん？」

ヴィヴィオは、並んでベットに座っているなのはとフェイトを交互に見た。

「なのはママとフェイトママ？」

「うん。」

「そう。」

なのはとフェイトは、ヴィヴィオの両手をそれぞれ握った。

「ん？ママ？」

「はい。」

「あは、えへへ。」

ママと呼んで、なのはとフェイトが返事をする。すると、ヴィヴ

イオは笑顔になって微笑んだ。

第30話 保護責任者と後見人（後書き）

はい、第30話でした。どうも、Theaterです。

予言の人物が誰なのか？とはやてたちがいろいろ考えていました。
そこで、ルナが出てきたのですが、リンディと友人関係だったと言
う事にしま
した。そのあたりは、後々わかってきます。

では次回、第31話で会いましょう。

第31話 六課への出向者（前書き）

スバルの姉、ギンガが六課に来た。

第31話 六課への出向者

「さて、今日の朝練の前に1つ連絡事項です。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が、今日からしばらく六課に出向になります。」

「はい。108隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします。」

「」「よろしくお願いします。」「」

今回の事件に関して、陸士108部隊から、スバルの姉、ギンガが六課に来た。そして、もう1人。

「それから、もう1人。」

「どうも。」

「10年前から、隊長陣のデバイスを見てくださっている。本局技術部の精密技術官。」

「マリエル・アテンザです。」

「地上での御用事があるとのこと、しばらく六課に滞在していたくことになった。」

「デバイス整備も見えてくれるそうなので・・・」

「気軽に声をかけてね。」

「」「はい。」「」

10年前の闇の書事件からの付き合いがあるマリエルが、六課にきた。

「おーし！。じゃ、紹介が終わったところで、今日も朝練行っとくか。」

「」「はい！」「」

フォワードの4人は、それぞれの朝練の場所に散った。

「ライニング集まって。」

「「はい！」「」

エリオとキャロは、フェイトの下へ。

「ティアナは、今日もあたしとやるぞ。」

「はい。」

「突撃型の捌き方、第6章。」

「お願いします。」

ティアナは、ヴィータの下へ。

「ギンガ。」

「はい？」

「ちょっと、スバルの出来を見てもらっていいかな？ 1対1で軽く模擬戦。スバルの成長、確かめてみて。」

「はい。」

スバルは、なのはの提案でギンガと模擬戦をやることになった。

朝練が始まり、フォワードの4人は、それぞれの訓練をやっている。

た。だが、訓練が始まってすぐに訓練をしていたみんなの手が止まった。原因はスバルとギンガの模擬戦だった。姉妹同士の模擬戦に皆興味があり、訓練の手を止め見学をしていたのだ。

（似ているな。やっぱり・・・）

そして、2人の模擬戦を見て、ゼロがそんな事を呟いていた。誰の事を言っているのか、ゼロの目の先には、ギンガが映っていた。

（あの2人、俺が仇だと知ればどういう反応をするのかな・・・）

「はーい！そこまで！」

ゼロが、そんな事を考えている間にどうやら模擬戦が終わってしまったようだ。ゼロが、空を見上げるとウイングロードの上でギンガの拳がスバルの顔を前で止まっているのが見えた。見るからにギンガの勝ちのようだ。

「それじゃあ、みんな集合！」

模擬戦が終わり、なのはが集合をかけた。

「せっかくだから、ギンガも入れたチーム戦やってみようか？フオ

ワード5人対前線隊長5人チーム。」

「え?・・・」

それを聞いたギンガが固まった。

「あのねギン姉。これ時々やるの。」

「隊長たち、かなり本気で潰しにかかってきますので・・・」

「まずは、地形や幻術を駆使して、何とか逃げ回って。」

「どんな手を使っても、決まった攻撃を入れる事ができれば撃墜になります。」

フォワード4人は、ギンガに説明した。

「ギンガは、スバルと同じくデバイス攻撃ね。左ナックルか蹴り。」

「はい。」

「じゃあ、やってみようか。」

「「「「はい!」「」「」」」

こうして、フォワード＋ギンガ対隊長陣5人のチーム戦が始まった。

「はい、じゃあ今日はここまで。」

「全員、防護服解除。」

「」「」「はい・・・・」「」「」

チーム戦が、終わりフォワードとギンガは、座り込んだ。

「うん。おしいところまで行ったな。」

「あと、もうちょっとだった。」

シグナムとフェイトが、なかなかの高評価をした。

「うーん、最後のシフトをゼロさんに邪魔されなければ・・・」

「くやしい」

「まだ、甘いな。おまえたち。」

隊長戦でフォワードの4人が一番苦労しているのはゼロだった。もちろん、なのはたちも十分手ごわいので苦労するのは変わらないが、ゼロは別だった。

隊長戦では、ドールマスターの使用が禁止されている。なので、ゼロは徹底的にフォワード陣の作戦を先回りして潰していた。

「ゼロさん、ちょっとは手加減してくださいよ。」

「ドールマスター使わないだけ、マシだろう。」

実際にゼロが、ドールマスターを使って模擬戦をした場合、フォワードにまず勝ち目はない。ゼロが、最初にシグナムと模擬戦をした時と同様に動きを封じられて終わってします。

「それにな・・・」

「ママ！」

その時、遠くの方からママと言う声が聞こえてきた。

「ヴィヴィオ！」

その声にみんなが、声のした方を見た。すると、そこにはヴィヴィオが、こっちに向かって走ってきているのが見えた。

「あぶないよ、転ばないでね。」

「うん。あっ！」

「」「あ！」「」

フェイトが、フラグを立てたせいか、ヴィヴィオが見事に前に転んだ。

「あ、大変。」

「大丈夫。地面柔らかいし、綺麗に転んだ。怪我はしてないよ。」

「それは、そうだけど・・・」

フェイトが、ヴィヴィオの下へ行こうとするとなのはがそれを止めた。

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「うう・・・ぐす・・・」

なのは呼びかけにヴィヴィオが顔を上げた。ヴィヴィオの目にはすでに涙が零れそうになっていた。

「怪我してないよね？頑張って自分で立ってみようか。」

「うう・・・ママ・・・」

「うん。なのはママここにいるから。おいで。」

自ら立って自分の下までおいでと言うなのは。そばでは、フェイトがそわそわしていた。

（さすがに、あのくらいの年の子にそれは、キツイと思うけど・・・しょうがないな。）

なのはの厳しい教育に苦笑しながら、ゼロはどこから取り出したのかクマのぬいぐるみを手に持った。

「エデン オブ スタッフドール」

ゼロは、前にヴィヴィオの世話をした時と同じようにぬいぐるみを動かした。そして、クマのぬいぐるみは、ゼロの手から飛び降りヴィヴィオの下へと走り出した。

「ママ・・・」

「おいで・・・って・・・えっ？」

ヴィヴィオにもう一度、おいでと行った時、なのはの横を何かを通り過ぎて行った。なのはが、通り過ぎたものをよく見た。

「ぬいぐるみ？」

「うう・・・ぐす・・・ええ？」

ついにヴィヴィオが本気で泣き出しそうになったとき突然、目の前にクマのぬいぐるみが現れて驚いていた。

「え・・・ぐす・・・なに？」

クマのぬいぐるみは、ヴィヴィオの前に来ると、ヴィヴィオの手を掴んで引っ張りだした。それらか、うつ伏せになって起き上がっ

て見せたり、ヴィヴィオの頭を撫でたりした。

「・・・あは、えへへ。」

そして、今には泣きだしそうだったヴィヴィオは、涙を引っ込めて笑顔になりだした。

「ほら、ヴィヴィオ。立って見て。」

「え？」

そして、いつの間にかヴィヴィオの前にはゼロがしゃがんでいた。ゼロは、ヴィヴィオに手を差し出して立って見てと言う。

「・・・うん。」

「よし。良い子だ。」

ヴィヴィオは、ゼロの手を取って自分で立った。そして、ゼロと手を繋いでなのは下へと歩き出した。

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。怪我もしてませんし。でも、なのはママは、ちょっと厳しい過ぎですけど。」

「そんな事ないよ。ゼロ君だって甘いよ。」

「手は貸しましたけど、ヴィヴィオはちゃんと1人で立ちましたよ。ねえ、ヴィヴィオ。」

「うん！」

ヴィヴィオは、ゼロの手を掴んだまま、にっこりと笑って頷いた。

第31話 六課への出向者（後書き）

はい、第31話でした。どうも、Theaterです。

今回、ゼロがスバルとギンガに対して仇と言うフレーズが出てきました。どう
いう事なのかはまだ言いません。すでに分かっている人もいるでしょうが・・

それと、気が付けば10万PVを超えていました。いやゝこんな作品を読んで
いただいて本当に感謝です。これからも頑張りますので応援お願いします。

では次回、第32話で会いましょう。

第32話 パパ（前書き）

ヴィヴィオにパパができた。

第32話 パパ

「ヴィヴィオ、髪の毛かわいいね。」

「なのはママのリボン。」

朝練を終えた一同は、朝食のため食堂に来ていた。そこで、キャロがヴィヴィオの髪をかわいと言った。今までただ降ろしてしただけのヴィヴィオだったが、今朝をなのはのリボンで結んでいた。

「アイナさんが、してくれたんだよね。」

「うん。」

「良い感じだよ。ヴィヴィオ。」

「えへへ。」

スバルにも褒められヴィヴィオは、ニツコリと笑った。

そして、3つのテーブルにそれぞれ、フォワード＋ギンガ、はやとヴォルケンリッター、なのはとフェイトとヴィヴィオにゼロのグループで座った。

「あゝん。うふふ。」

「よく、噛んでね。」

「うん。」

ヴィヴィオが、食べているのはオムライスだ。

「しっかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いよね。」

「スバルの小っちゃい頃もあんなだったわよね。」

「えっ？そうかな？」

ギンガに言われ、スバルは頬を赤く染めた。

「リインちゃんも。」

「えー！リインは、初めから割と大人でしたあ！」

「嘘をつけ。」

「体はともかく中身は、赤ん坊だったじゃねえか。」

「うー、はやてちゃん違いますよね。」

「ふふ、どうやったかな？」

はやてたちのテーブルでそんな風な話で盛り上がっている中、ヴィヴィオがある事に苦戦していた。

「あっヴィヴィオダメだよ。ピーマン残しちゃ。」

「うゝ苦いの嫌い！」

「えゝおいしいよ。」

「しっかり食べないと大きくなれないんだから。」

「うゝ・・・ん」

「えっ？」

なのはとフェイトに残さず食べなさいと言われるヴィヴィオ。でも、嫌いな物をそう簡単に食べることは無理だ。そして、ヴィヴィオは何を思ったかゼロを見つめてきた。

（えっと・・・これって助けてほしいってだよな？）

ゼロは、ヴィヴィオが見つめてきた理由を助けてほしいと解釈し、助け船を出すことにした。

「えっと、なのは隊長、フェイト隊長。ヴィヴィオは、まだ小さいですし、そんなに無理に食べさせなくてもいいのでは？」

「ゼロ君。それは、違うよ。好き嫌いはよくないんだから。」

「そうだよゼロ。」

予想通り、ゼロはなのはとフェイトに怒られた。

「さあ、ヴィヴィオ。ピーマン食べよ。」

「ヴィヴィオ。」

「うゝ。んっ！」

「あっ！ヴィヴィオ！」

なのはとフェイトに再度食べなさいと言われたヴィヴィオは、よほど嫌なのか椅子から飛び降りて逃げだした。そして、向かい側に座っていたゼロの下に来てゼロに抱きついた。

「ヴィヴィオ？」

「うゝ」

ヴィヴィオは、ゼロに抱きついたまま、涙目になってゼロを見つめた。それによって、ゼロはピンチに陥る。何故かと言うと、ゼロがふとなのはとフェイトの方を見ると2人が、睨んでいた。

おそらく、ヴィヴィオが自分たちから逃げてゼロのところに行ったのが、おもしろくないのだろう。ゼロは、要らぬ恨みを買いたくないのでヴィヴィオを説得することにした。

「うゝん、ヴィヴィオ。そんなにピーマン嫌い？」

「きらい・・・」

「うゝん・・・」

しかし、ヴィヴィオは、食べてくれなさそうだった。だが、ここで諦めるわけにはいかない。ゼロは、何とかピーマンを食べさせる良い方法がないかと考える。そして、ベタだと思うがある方法を思いついた。

「それじゃあ、ヴィヴィオ。好きな物と一緒に食べてみよ。そうすれば、嫌いな物を食べられるから。」

「うゝ」

「はい。あゝん。」

ゼロは、ヴィヴィオのオムライスを自分のところまで持ってきて、残ったオムライスにピーマンを混ぜてヴィヴィオにあゝんをした。

「うゝ」

「大丈夫。ほら、あゝん。」

「・・・あゝん。」

ヴィヴィオは、食べた。

「どうだ、ヴィヴィオ？」

「・・・にがい。」

残りのオムライスの量が少なかったのが原因かピーマンの苦さは消えなかったようだ。だが、ヴィヴィオは、残りのピーマンも頑張って食べてくれた。

「よし、えらいえらい。」

「えへへ。」

ピーマンを完食したヴィヴィオをゼロは褒めた。ヴィヴィオは、

ゼロに頭を撫でられて、気持ちいいのかニツコリと笑っていた。

「なあ、あれ見てどう思う？」

「そうですね。仲の良い親子って感じですかね。」

「と言う事は、ママがなのはさんとフェイトさんで、パパがゼロさんと言うことですか？」

他のテーブルのみんなが、今を見てそんな事を言っていた。途端にゼロは、恥ずかしくなって顔を赤くした。そして、そんなゼロのそばでヴィヴィオが、何かを考えていた。

「・・・お兄ちゃん。」

「・・・」

「お兄ちゃん！」

「えっ？ あっ俺か。」

ヴィヴィオにお兄ちゃんと呼ばれ、ゼロは自分の事かと思った。

（そう言えば、ヴィヴィオに今まで呼ばれた事なかったな。）

エリオとキャロと一緒にヴィヴィオを世話した時、ゼロは自分の名前を教えてなかった。そして、ヴィヴィオから特に何とも呼ばれなかったのも、お兄ちゃんと呼ばれても自分の事だとすぐに気が付かなかった。

「で、何だヴィヴィオ？」

「お兄ちゃんが、ヴィヴィオのパパ？」

「えっ！」

ヴィヴィオにパパ？と聞かれて一瞬何が起きてるのか分からなかった。ヴィヴィオは、はやてたちの冗談が分らず、マジで聞いてきた。

「パパ？」

「い、いや、ヴィヴィオ。俺はヴィヴィオのパパじゃ・・・」

「う・・・ぐす・・・パパじゃないの？」

ヴィヴィオの目には涙が浮かんできた。それに慌てたゼロは、助けを求めようとなのはたちの方を見た。だが、ゼロの視線の向こうには、助けてくれそうな人はいなかった。

なのはとフェイトは、何故か顔を赤く染めて、心ここに非ず言っ

た感じで何か呟いていた。

「そんな、ゼロ君と夫婦なんて・・・まだ、早いよ。恋人にもなっていないし、それどころか告白だって・・・」

「私が、ママでゼロがパパ。ううゝ嫌じゃないし寧ろ嬉しい・・・ってな、なに言ってんだろう私・・・」

2人とも、妙な妄想にトリップしていた。

「ゼロ君が、パパかゝ何かおもしろいわ。」

「ゼロさんだったら、ヴィヴィオも懐いてるし良いんじゃないかな。」

「そうだよね。」

一方、はやてたちは、面白がって助ける気なんてまるで無い。

「パパ？」

「うゝん。ヴィヴィオは、俺がパパでもいいのか？」

「うん！」

ゼロが、ヴィヴィオに聞くと元氣よく肯定した。

「はあ、わかった。ヴィヴィオ、今日から俺がパパだ。」

「うん。パパ！」

ヴィヴィオが、ゼロに飛びついた。

こうして、ヴィヴィオにパパができた。未だにトリップしているのはとフェイトを除いたみんなが、微笑ましいその光景に笑みを浮かべていた。

第32話 パパ（後書き）

はい、第32話でした。どうも、Theaterです。

今回は、日常的な展開でした。

それにしても、ヴィヴィオがゼロに懐き過ぎな気がしてます。一応、似たよう

な境遇と言う事でゼロに懐いたと言う事にしたいと思っています。

では次回、第33話で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4333w/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～No. Zero～

2011年12月16日18時36分発行